
IS インフィニット・ストラトス -無限の可能性を持つ力-

クリボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス - 無限の可能性を持つ力 -

【Nコード】

N4599T

【作者名】

クリボー

【あらすじ】

命 とは何か。

簡単に済ませられる程、 命 とは軽いモノなのだろうか。

これは、そんな考えを持った少年の、苦悩に溢れた青春の物語。

6 / 13 タイトルを変更いたしました

プロローグ（前書き）

どうも初めまして。

あまりクオリティは高くないかもしれませんが、楽しんで頂けたら幸いです。

ブローグ

インフィニット・ストラトス。
アイエス
通称IS。

元々、宇宙空間での活動を目的として開発されたマルチフォーム・スーツであつたが、ある時、一気に世間からの注目を集めた。

今から約10年前、IS発表から大凡1カ月後に、日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射されるも、その約半数をIS 白騎士 が迎撃した上、それを見て 白騎士 を捕獲もしくは撃破しようとする各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した。

これは、通称 白騎士事件 と言われ、この時の死者は皆無だつたとされる。

だが、本当に死者は皆無だつたのだろうか？

二千以上もの数のミサイルが発射され、その半数は 白騎士 が迎撃したのだろうが、残りの半分はどうなつたのだ？

もしかしたら、それを発射してしまった国々が躍起になって迎撃したのかもしれないが、果たして、それで犠牲者が皆無だなんて都合の良い事が起こるのだろうか。

答えは否。この世界はとても美しく、醜く、残酷に出来ている。

そのような“綺麗な”奇跡がそうそう起こるほど、この世界は優しくない。

その日、とある一家は家族水入らずで旅行を満喫していた。

決して裕福とは言えないが、貧乏とも言い難い極々平凡な一家。

たどたどしいながらも、しっかりと地面を踏みしめて歩く、やっと言葉を話せるようになったばかりの3歳くらいの女の子と、その手を繋ぎながら歩く、未だ幼いものの、その眼に、自身は兄という立場だから、しっかりと妹を護らねば、という決意の色を宿した、5歳くらいの男の子。そんな2人を微笑ましく思い、暖かく見守る両親。

ただそれだけ。

別段、両親が何か犯罪に手を染めているワケでもなく、探せばどこにでも居るような普通の家族だった。

彼等が何かしたワケではない。

なのに、不幸は突然、その家族に訪れた。

「何が起こったの……」

突然、空が光った。それから、あまり間を置かずに訪れた爆音。それに驚く暇もなく、彼の視界は赤と黒と砂塵に覆われ意識を失ってしまった。

それから暫くして、目を覚ました彼は絞り出すようにそう呟くと、何とか立ち上がる。

「あ……ああ……」

すると、彼の視界に入ってきたのは、“地獄”であった。

爆風の余波でそうなったのか、彼の周りにあった自然は、軒並み崩れるか、ひび割れている。

幸か不幸か、その場所には彼等の家族しか居なかったため、誰も巻き込まれてはいないが、助けもなかった。

遠目で見れば、吹き飛ばされたであろう両親が、赤く染まって横たわっている。

「お父さん！ お母さん！？」 それを見て、少年は慌てるものの、フと感じた掌にある感触をもとに、先程まで手を繋いでいた妹の存在を思い出し、勢い良く振り返った。

「あ……うああ……、ウォエエ！」

彼は、しっかりと妹の手を握っていた。今現在も、その感触は確かに彼の掌にある。

だが、振り向いたその先にあつたのは、妹の手だけ（・・・）であつた。ペンキをひっくり返したかのように真つ赤に染まつたその向こう側には、積み重ねられた大きな石と、地面とそのの間から見える赤黒い液体が見える。幼いながらも、それが何か理解した瞬間、彼は胃の中の内容物を盛大に吐き出した。

「ハッ……ハッ……！」

粗方それを出し切り、幾分か落ち着いた少年は、目尻に涙を溜めながらも、ヨロヨロと遠くに倒れている両親へと近付いて行く。妹

が取り返しのつかないことになっている事を伝えるために。

しかし、そのような中で、彼の頭はどこかで、アレ（・・・）に近付くなど警鐘を鳴らしていた。妹がああなっていた（・・・・・・）。のだから、両親も同じようになっていくかもしれない。幼い頭で、最悪の事態を想定していたのだ。

そして、その最悪は的中する事になる。

「あ……うああ……うわああああ!!」

物凄い勢いでかなりの大きさの石の破片が当たったのか、彼の父親の顔は、右半分が削られて（・・・）いた。母親の方は、身体に複数の穴が空いている。

「何で!? どうして!？」

それは、僅か5歳の少年の心を壊すには、十分な光景であった。

先程まで甘受していた幸せは根刮ぎ吹き飛ばされ、大好きだった両親、護らねばと誓った妹の笑顔や声は、もう見ることも聞くこと叶わない。

なぜ自分達がこのような目に遭わなければならないのか。そのような考えが、まるで呪いの如く彼の頭の中を廻っていく。涙はとめどなく溢れ出て、その顔を濡らしていった。

「あ……れ……?」

暫くして、もはや出尽くしてしまったのか、彼の涙は枯れて、その瞳からは何も出なくなっていた。すると、何の前触れもなく、少年は背中から地面に倒れ込む。

そう、近くに居た家族がそのような事になっていて、彼だけ無事というワケがあるはずもなかったのだ。

その背には、大小様々な石の破片が刺さっていて、一部は臓器をも傷付けているかもしれない。

そのような怪我を負っているのに、彼がそれに気付かなかったのは、あまりの事に気が動転していたのか、はたまた酷すぎるために逆に痛覚が麻痺していたのか、そのどちらかであろう。

だが、たとえ気付かなかったとしても、流れ出る血が止まっていたワケではないので、とうとう限界が来たのだ。

「ハハ……、僕も……お父さん達のところに行けるのかな……」

その背から流れ出る赤い液体で地面を濡らしながら、少年は掠れた声でそう呟いた。もうこの世に大好きだった家族は居ない。ならば、思い残す事もない。

そのような事を考えながら、彼は薄れていく意識に身を任せ、その瞳を閉じた。

「……誰か来たの？」

しかし、完全に意識を失う前に、まだ残っていた聴覚が、何かの足音を聞き取る。野生の獣だろうかと思っていたら、彼の両頬に、乾燥した何かがあてがわれた。それはタオルだとか、そのようなモノではなく、人の温もりを持っている。

そのため、彼は閉じていた瞳を開き、弱々しくその誰かに尋ねた。

「良かった……、まだ生きていた……」

すると、そこには涙で顔をぐしょぐしょにした1人の老人が、自分が生きている事を確認して小さく呟いていた。口元や顎にたくわえられた白い髭までも涙で濡らし、顔を歪めているその表情は、お

世辞にも綺麗だとは言えない。

だが、その時の少年には、その表情が何よりも綺麗なモノに見えた。

「君だけでも、絶対に助ける……」

最後に老人がそう言ったのが耳に入ると、少年の意識はそこで途切れ、闇に吞まれていった。

「ここは……」

少年が目を覚ますと、まず白い天井が目に入ってきた。初めは病院かと思っていたが、辺りを見回してみると、病院というより何かの研究所のように思える。何故ならば、病室にしてはあまりにも質素すぎたからだ。

と言っても、僅か5年ほどしか生きていない彼からしたら、今まで至って健康に過ごしてきたため、病室で目覚めるなんて経験があ

るはずもなく、その思考が当たってるかなんて自信はないのだが。

「目覚めたようじゃな」

ボーっとした頭で、そのような事を考えていると、徐にその部屋
と思われる場所　の扉が開かれた。

入って来た人物は、髪の毛はもはや全滅したと言っても良いほどの
頭をして、白い髭をたくわえた小柄な老人であった。

「あ……ッ！」

その老人を見た瞬間、少年の頭に、まるでフラッシュバックのよ
うに、意識を失う前の光景が思い出される。それにより、再び吐き
出しそうになるも、彼は気合いで何とか持ちこたえた。

「……我慢しなくても良いんじゃないぞ」

「いえ……、大丈夫です」

その様子を見て、老人は悲しそうな表情で少年を見ると、静かに
そう話しかける。それに対し、少年は顔を真っ青にしながらも答え
を返した。

「その様子じゃと、全て覚えているようじゃな……」

「あれは夢じゃなかったんですね……」

「……ああ、君には酷かもしれんが、全て現実じゃ……」

「そう……ですか……」

少しして、少年の呼吸が整えられたのを確認すると、老人はゆっくりと話しかけ始める。確認のために投げかけられた質問は、年不相応な敬語による質問で返され、その答えを言つと、少年は弱々しく呟いて俯いてしまった。もはやあの場で枯れてしまったのか、その瞳から涙は流れなかったが、悲しんでいるのが分かる。

「さて……」

「……」

再び時間だけが流れ、少年が落ち着いたのを見計らうと、老人が何かを切り出そうと声を出した。それを聞き、少年は老人へと視線を向ける。

「このまま孤児院へと預けられるのと、見ず知らずの爺と共に過ごしていくの、君はどちらが良いかのう？」

「……へ？」

視線が交差してから、たつぷりと間を置いて放たれた言葉を耳にした瞬間、心が壊れた少年は、間抜けな声をあげた。

結論から言うと、少年は老人と過ごす方を選択していた。確かに、見ず知らずというのは間違いではないが、少年の生存を確認した時の“綺麗だ”と思えた表情に惹かれたというのが、理由の1つだ。まア、この時に彼が居た場所は、老人の研究施設だったため、何があっても老人と過ごす事になっていただろうが。

「さて、じゃあ互いに自己紹介でもしようかのお。ワシの名前はケイン。この施設の研究者じゃよ」

「あ……」

「うん？　どうかしたか？　いつまでも“君”とかそういった呼び方は、あまりしたくないんじゃないかのお」

「……スミマセン、分からないんです」

「む……」

それはともかく
閑話休題、精神的にまいっているだろうが、互いに名前だけでもと、ケインと名乗った老人は、自己紹介をしてきた。

だが、返って来たのは分からないの一言。
それもそうだ。僅から歳であるのような事を経験したのだから、どこかに異常を来していても何らおかしくはない。ケインもある程度

は想定していたのか、その表情はやはりかといった意味合いが強く出ている。

「あの時、僕は一度死んだんです」

「そうか。じゃが、君は今も生きている。きちんと心臓が動いているし、意識もちゃんとある。そうじゃな？」

「ハイ……、これを 生きている と言って良いのか分からないけど、確かに僕の心臓は動いているし、きちんと考えることも出来る」

「ならば、名無しというワケにはいかないのお。名前を考えてやらねば」

「え……？」

それならば、とケインは少年に名前を与える事にした。これから共に過ごしていく相手なのだ。それは重要であり、大切なモノとなってくる。彼は名前など意味を持たないと考えているような外道ではない。故に、真剣になつて考える。

当の少年はというと、急な展開に思考がついていけないのか、ポカンとケインを見つめていた。人生経験を積んでない少年にとって、この展開は予想外すぎたようだ。

「よし、君は今日から六久^{むく} 満^みじや。」

「六久……満……」

「そうじゃ。気に入ってもらえたかのお」

「ハイ……、有難うございます」

そして、与えられる名前。それを噛み締めるかのように、少年満は小さく呟いた。

その日から、一度死んだ少年は、六久 満として生まれ変わり、新たな人生を歩んで行くことになった。

これは、ISによって全てを失いながらも、それ以上の力を手に入れた少年が苦悩する物語。

その力をもって、全てを壊すか、何かを守るかは彼次第。

一度死んだ六久 満の第2の人生が、今、始まる。

プロローグ（後書き）

いやあ、いきなり某正義の味方見習いの少年のハジマリのような感じになっていきますね（苦笑）

これからも、ちよくちよくこういった感じなモノが出て来るかもしれません、御容赦下さいm（―――）m

第1話 入学・切っても切れない仲？ - (前書き)

書き忘れていましたが、作者はISの知識が基本的にアニメしかありません。一応小説も読んだことはあるのですが、友人に借りるといった形だったので、うる覚えなのです。

なので、Wiki頼りな部分が多いので、ここがおかしいといった所があれば、感想などで指摘して頂ければ嬉しいです。

後、プロローグが何か中途半端な感じだったので、書き足しています。

もし朝方から夕方にかけて拝読して下さった人が居たら、主人公の名前の部分が増えているので、お手数ですが今一度ご拝読下さい。

このような浮ついた拙作ではありますが、今回も楽しんで頂けたら幸いです。

では、長い前置きで失礼しましたm(_____)m

第1話 入学・切っても切れない仲？ -

生暖かい風がその場を吹き抜ける。今、そこを支配しているのは、硝煙の臭いと響き渡る怒声に銃声。戦争、紛争、理不尽なナニカ。平和など程遠く、血で血を洗い流す。それらはそういうモノだ。今でこそ戦争と呼べる争いは無くなったものの、それでも紛争や、理不尽なナニカはどこへ行っても目に着く。それにより巻き込まれた、覚悟などする必要もなかった命も。

争いを起こす者達は、少なくとも命の覚悟はしているだろう。そうでなければそのようなことは起こさないだろうし、なければ起こすなど言いたい。

だが、それに巻き込まれた者達はどうだろうか。争いなど望んでもいなく、現在を懸命に生きている者達は。ただ、自分達は生活していただけなのに。たまたまその場が戦場となってしまう、巻き込まれて理不尽に命が散っていく。

それを、平等でないから だとか、運が悪かった だとか、仕方がなかった と済ませて良いほど、 命 とは軽いモノなのだろうか。

彼はそれに否と答えた。理不尽に散っていく命を認められず、より多くを救うためにその力を振るった。 命を数として数えている だとか、 お前はそれほど偉いのか と罵られる事もあったが、彼はそれを全て聞き流した。そのような事など、どうでも良かったのだ。そこに 幸福 という結果があれば、それで良かった。何より、自分のような（・・・・・・）存在を、無闇に増やしたくなかった。

故に、精神破綻者。理解されることのない異常者。それが彼の行き着いた果てであった。

今、彼の視線の先には、助かったことに喜び、抱き合う数多の人達が居る。それを少しズラせば、先程まで彼が壊し、 したモノ達

も目に入る。先の先頭ではISは出現しなかった。それもそうだが、現在、ISはアラスカ条約によって軍事利用は禁止とされている。いくら紛争の鎮圧のためとはいえ、おいそれと使ってしまったら、国際社会から反発を受けることが目に見えているからだ。本来、抑止力としても成り立つであろうモノが意味を成していないなど、なれんという皮肉であろうか。勿論、彼もそのような事など十二分に理解しているため、表で何かする場合は、必ず姿を見せないようにしている。今回も、相手側の索敵範囲外から、超長距離精密狙撃によって場を鎮圧したに過ぎない。まあ、彼の力は、正確に言うところでは無いのだが。

それに、表の目が確実に届かない裏の場合は、そうでもない。

「俺は、後どれだけこんなことをすれば良いんだろう……」

纏っていた力を解き、生身に戻ってから、彼は誰に尋ねるのでもなく小さく呟いた。

彼自身、これは自分が勝手にやり始めた事は十分に理解しているし、何もこの世から争いを全て無くしたいというワケでもない。人には様々な主義主張があり、それにより衝突する事もある事も理解している。恒久的な平和など馬鹿げているとも思っている。物事が停滞していたら、この世は腐っていくだけなのだから。

だが、それでも、現在そこら中で起こっている事は、必要な事だとは思えないのだ。ISの出現で引き起こった理不尽なナニ力。それは必ずしも要るモノなのだろうか。

「……嫌な空模様だなア」

呟いた後に見上げた空は、まるで彼の心境を表すように、分厚く薄暗い雲に覆われていた。

日本某所 - I S 学園 -

「（何故こんなことになった……！）」

今現在、彼 六久 満は頭を抱えていた。

彼がD r・ケインに拾ってもらってから約10年、様々なことがあった。壊れてから何とか組み直した心が、磨耗し擦り切れてしま
う程に……。

その間、満はD r・ケインから色々な知識を与えてもらった。今
では並の天才とは比べられないほどの知識量を誇っている。I Sの
開発にも携われるほどに。まア、彼はI Sに関わるつもりなど一切
なかったのだが……。

それはともかく
閑話休題、その知識を使ってとある企業に就職しようとしたのだ
が、そこで想定外の事が起こったのだ。 企業に面接に行くと、あ
る一室にI Sが鎮座していた。ここはI S関連とは関係のないハズ
だと思ったのだが、どうやら運搬の中継地点として使われたらしい。

満からしたら、見たくもないモノを見てしまって良い迷惑なのだが、それを表情に出して相手側の印象を悪くしてしまっではいけないと、平静を保っていた。

すると、その知識量が裏目に出て、好奇心が湧いた企業の人間に色々と聞かれた。印象云々の関係で無碍に扱うワケにもいかず、程ほどにあしらおうとISに触れたのがいけなかった。

満が触れた瞬間、ISが反応して機動してしまったのだ。

それからあれよあれよという内に、日本政府から保護という名の軟禁を受けるはめになってしまった。後に精密検査を受けると、彼のIS適性数値は1。つまりはDである。

しかし、それが男だという事がいけなかった。このままではどこかに誘拐され、モルモットにされかねないと、急遽IS学園への入学が決まってしまった。学費が払えないと反発したのだが、それは政府が全額援助するという、なんとも有り難迷惑な特典付きでだ。

その際、日本政府に提示した偽造戸籍などに関して、少し心配があるが、それは杞憂だろうと満は結論付ける。

「（バレるとしたら、研究施設の人達がアイツ等くらいだろうし）」

何故ならば、絶対にバレないという自信があるから。それ程までに、Dr・ケイン達の技術力と隠密性は高いのだ。

まあ、それでも可能性が0というワケではないため、出来ることなら過去に戻って、あの時の自分を殴り倒したいと満は思っているのだが。

「（ハア……）」

それはともかく

閑話休題、いつまでもそうしているワケにはいかないと、過去を思い起こしていた思考を中断し、彼は視線だけで周りを見渡した。すると、目に入ってくるのは女子！ 女子！ 女子！

ISが女性しか扱えないことを考えたのなら、それは至極当然の事なのだが、彼は違ったことで参っていた。

「（人が多いなア）」

そう、満は今までの生活の関係上、同年代の者達と触れ合う機会が少なかったのだ。勿論、経歴はそのままというワケにもいかないので、きちんと偽造をしてあるが。そこから察せると思うが、小・中学校と彼は行っていない。そういったところから、現状は新鮮に感じるものもあれば、不安に感じるものもある。今は自己紹介がされているようで、クラス内の1人が立ち上がり、それぞれ自分をアピールしていていた。

因みに、満の席は窓側一番端の列、それも一番後ろに位置するため、その気になれば教室全体を見渡せる。そのため、今どういった状況なのかが、一番分かると言っても過言ではない。

「（ちょっと可哀相だな……）」

そう、今現在の状況。その原因となってしまうっている場所に視線を向けると、教室全体からの視線を集めてしまっている人物が目に入った。その人物とは、IS学園にて唯一の、満以外のイレギュラー。織斑 一夏である。ISは女性しか扱えないハズなのに、男でありながら起動させ、適性数値もなかなかに高かった本当の意味でのイレギュラー。今では、世界初のISを動かした男 という看板を背負っていた。

因みに、満のことが発覚したのは彼より後だったため、世界で2番目にISを動かした男 となっている。更に言うと、それにより 本当は男でも動かせるのでは、となったが、そこは割愛しておく。

「（まア、俺にはどうにも出来んから、何とか頑張れ）」

織斑 一夏の席はちょうど真ん中の列の一番前。つまり満とは逆で教室全体から見えてしまう位置になっている。そうなれば、彼の奇様な境遇から、視線を集めてしまうのは自明の理であり、それに気付いているのか、首を竦めて少し震えていた。このような好条件の位置に居る自分にすら、少しばかり視線が来るのだから、彼への視線の圧力は、想像を絶しているだろう。それを不憫に思った満は、内心で織斑にエールを送った。それが届いたかどうかは分からないが。

そうこうしている内に、自己紹介の順番が織斑へと回ったようだが、彼はそれに気付いていない。教壇に立つ教師、山田 真耶が涙目になりながら呼び掛けやつと気付いていた。その途中に口の中を噛んだのか、間拔けな声を上げていたが。その事により、クスクスといった笑いが教室内で湧き起こる。

「だ、大丈夫？　び、びつくりさせてごめんね。お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね自己紹介、『あ』から始まって今『お』なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？」

笑われている彼を更に不憫に思っていたら、それを見た山田教諭が泣きそうになりながら織斑をまくし立てている。見た目からして、彼女は自分達と年代代か、もしくは下と言っても差し支えがないような容姿をしている上、あのような様子で大丈夫なのか。と、満は思うのだが、彼自身学校の教師というモノを良く知らないため、深く考えるのは止めておいた。

「いや…あの、そんなに謝らなくても……っていうか、自己紹介し

ますから、先生も落ち着いてください。ね？」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ 約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げたかと思うと、織斑の手を取って詰め寄る山田教諭。織斑は苦笑いを浮かべながらゆつくりと頷いている。恐らく自分もあんな反応になってしまっただろうな。と、満は内心で他人ごとのように考えていた。

その織斑は、山田先生に答えた以上は自己紹介をしなければならぬ。しっかりとした姿勢で立ち上がり、後ろに振り向いた。

瞬間、織斑の表情が若干引きつる。当然、この空間に対する男女の比率を垣間見た結果だろう。2対28。圧倒的に女子がこのクラスを占めており、その視線が今は織斑を捉えているといつていい。

「お……織斑 一夏です。これから1年間、宜しくお願いします」

そのような中で、やっとの事で織斑から言葉が発せられた。普通なら、可もなく不可もなくといった感じの妥当な言葉であるが、生憎と今の彼は普通の状況に居ない。

それだけ？ とか、 もっと他には？ といった声が聞こえそうな視線が集中する。

「（あ、顔が青くなった）」

それに彼も気付いているのだろつ。一気に顔から血の気が引いていた。

「い、以上です！」

それに耐えられなくなったのか、織斑は半ば強制的に自己紹介を打ち切った。

瞬間、満はクラス内の女子の大半がずっとこけたような気がした。

「あ、あのー……？」

本人はその気がないのだろうが、それはまさしく追い討ちをかけるような声。よく聞けば、涙声にも聞こえるそれは、恐らく山田教諭が発した声だ。

だが、何と言われようと、織斑はもうこれ以上は無理だろう。でないと、本当に彼の心が折れかねない。

満がそんな事を考えていると、織斑の頭がいきなり激しい音を立てて叩かれる。織斑は瞬時に頭を抱えると共に何事かを思案しているようにも見えた。

そして、どうやら答えに行き着いたようで 彼は恐る恐る後ろを振り向く。

「げえっ、関羽!？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

言いながら、その人物は再び織斑の頭を出席簿の角で叩く。

叩かれた織斑は頭を抑えて悶々となるが、そんな事などさして気にしていないように見受けられた。

「あ、織斑先生。会議は終わられたんですか？」

「ああ。すまなかったな、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてしまっ」

「い、いえ。副担任なので、これくらいは……」

その人物　織斑教諭の言葉に、山田教諭は何処か嬉しそうに答え、おまけにはに cand。

先ほど見せた対応とのえらい違いに、満は本当に織斑　一夏が不憫に思えた。

「諸君、私は織斑千冬。このクラスの担任を受け持つ事になった。君達新人を1年で使い物になるIS操縦者に仕立て上げるのが私の仕事だ。私のいうことを聞き、よく理解するように努める。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな？」

山田教諭に向けられた声など、地平の彼方へ飛んでいったのか、幾分か低い声色で独裁者のような言葉を口にする織斑教諭。

「キャ　　！千冬様、憧れの千冬様よっ！」

「私、ずっとファンでした！」

「あの千冬様にご指導いただける……ああ、私もう死んでもいい！」

普通ならこのような独裁者紛いの言葉など有り得ないのだが、初めての経験なため、学校の教師とはこういうモノなのか。と、満が間違った方向へと行きかけていたその時だ。

きゃいきゃいと騒ぐ女子達。ようよく本領を發揮したというところだろう。

しかし、そんな声援など彼女にとっては厄介極まりない事か。怪訝そうな表情を浮かべ、嘆息しながら口を開いた。

「……毎年、よくこれだけの馬鹿者達が集まるものだな。感心する。」

それとも、私のクラスだけに馬鹿者達を集中させているのか？」

その言葉を聞いた瞬間、満は何処のクラスに行っても同じような反応だと思った。なにせ、彼女は現役時代に無敗を誇った最強のIS搭乗者。その武勇伝は各地を一人渡りしているらしく、彼女を英雄視する人物も多い。

織斑 千冬 通称 ブリュンヒルデ。IS関係の知識がなくとも、その名を知らない者など居ないであろう程の有名人だ。

だからだろう、彼女の辛辣な言葉を受けても女子の声援というのは止まる事を知らない。それどころか益々エスカレートしており、聞いているだけでは満としては理解出来ない内容も出ていた。

「で？ お前は満足に挨拶もできないのか？」

「え、えっと、千冬姉、違うんだ。俺は」

そんな女子達の声援を軽く無視し、織斑に向き直った彼女は彼の言い訳を聞こうとした瞬間、再びその脳天を叩く。

「織斑先生と呼べ、織斑」

「……はい、織斑先生」

しゅんとした表情で軽く下を向く織斑。対する織斑教諭は相変わらず気にするという言葉を知らないのか、前を向く。

そのやりとりを見て、周りが再び騒ぎ始めた。

「え、織斑君つてもしかして千冬様の……」

「それじゃあやっぱり、男なのにISを使えるのもそれが関係して

いて…」

「いいなあ、変わって欲しいなあ」

そう、よほど察しが悪くない限り気付くであろう彼女達の関係。つまりは姉弟という事である。

「（姉弟揃って兵器の適合者とはね……）」

周りが囃したてる中、満だけは黙って2人の姿だけを見ながら、そのようなことを考えていた。場合によっては姉弟で殺し合う可能性が出て来てしまう。

そう考えると、つくづくこの世界は残酷だと思える。

更に、未だ興奮冷めない教室内の視線は、今一点に集まっている。それも、不思議と低温な視線が織斑へと。

そんな時、急にチャイムの音が鳴り響き、シヨートホームルーム S H R の終了を知らせた。

チャイムの音を聞くと、織斑教諭は手を叩いて皆を注目させる。

「さて、シヨートホームルーム S H R は終わりだ。諸君らにはこれから半月で I S の基礎知識については覚えてもらう。その後実習になる訳だが、基本動作については半月で体に染み込ませる。いいか、返事をしろ。よくなくとも返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

『はい！』

満と織斑を除く女子達が、一斉に声を上げた。寧ろ、地獄の幕開け前の言葉であったような気が、満にはしていた。

「席に着け、馬鹿者」

「はい……」

そして、彼女は授業に入る為に黒板の方へと動く。

ただ、何時までも立っていた織斑を馬鹿者呼ばわりしながらも席に座らせたが。

その光景を見ていて、満はつくづく織斑が不憫に思えた。

「（あ……、自己紹介が流れてしまったな）」

授業を受ける準備をしている最中、満はフとそのような事を考える。

だが、いつまでもそれを気にしていたら、あの出席簿が飛んで来そうな気がしたので、あまり気にしない事にした。

ノートと教科書を取り出し、黒板の前に居る織斑教諭へと視線を向ける。

この日、初めて満は学校の授業というモノを受けるのであった。

第1話 入学・切っても切れない仲？ - (後書き)

と、学園に入学するまでを書いてみました。

タグに 原作ブレイク とありますが、まだここら辺りは原作に沿って行くつもりなので、御容赦下さい。

さて、千冬がヒロインに覚醒するまで、どれだけかかるやら……。

第2話・出来ること・出来ないこと・（前書き）

ストックとして置いていたのを読んでもたら、また中途半端に感じたため、休憩時間や出勤途中にチマチマと崩して繋いで修正をしていました。

すると、何とも膨大な文字数にorz

それでもまだ中途半端な気がします、もう力尽きました（苦笑）
恐らく、後にも先にも、この話がこの小説最大の文字数となるでしょう。

では、このような拙作ですが、楽しんで頂けたら幸いですm（

ー）m

第2話・出来ること・出来ないこと

「進化は緩やかに行われていかねばならない」

老人は、いつもそう語っていた。彼は、本当に耳にタコが出来ると思うほど、その言葉を聞いている。

「人には様々な主義主張がある」

この言葉も、彼が老人から教わったモノだ。先程の言葉みたいに何回も聞いているワケではないが、それは本当のことだと思っし、間違っていないと考えている。

「じゃからこそ、自分の考えを押し付けるのではなく、相手のモノと共有していくべきとワシは考えているのじゃが、進化に関しては、皆がそう考えてほしいと思っているのが本音じゃ」

この言葉も、冒頭のモノと同じく、飽きるほど聞いている。

洗脳かと思われるかもしれないが、彼自身、初めからそれに共感しているため、気にはしていなかった。

「じゃが、ISの開発者はそうじゃなかった。確かに、これまでの歴史を見れば、軍事的なモノによって技術は進化をしてきた。でもいくら自身の技術が見向きもされないからといって、自作するとは愚の骨頂じゃ。それを如何に見向きさせるかを考えるのも、ワシは醍醐味だと思うんじゃがのお」

白騎士事件　の顛末を初めて聞いた時、彼は激しい怒りを覚え

た。偶然ならば良かったというワケでもないが、その脚本のせいで自身は家族を失ったのだから。

だが、今はそれほどでもない。

憎しみがなくなつたと言えば嘘になるが、もう過ぎ去つてしまつた事なのだからと割り切つていた。起こつたことはなくせないし、現実には覆らないのだから。

それを老人も分かっているのだろう。復讐とか、そのようなモノに結び付けはしないと思つてゐるからこそ、その話を何度もしているのだ。

「天才」とは利己的で協調性が無いモノだと言うが、アレはまさにその典型じゃつた。いや、今となつては、ワシがそのような事を言つても、言い訳にしかならんかのぉ」

これも何度も聞いていることだ。

老人は、ISの開発者に間接的にだが制止の言葉を投げかけたらしい。それも随分な回数を。が、相手はその悉くを無視し、今に至る。

あの時、自身の身の保全を考えて間接的にしていたが、そのような事は気にせず直接止めに入るべきであつたと、老人は後悔をしてゐた。

初めて彼がその話を聞いた時は、土下座をしてきたほどだ。

今となつては、頭を下げられることもなくなつたが、言葉の端々から垣間見える申し訳なさは拭いきれていない。

まア、これも毎回の事なので、彼は苦笑いを浮かべながら老人を氣遣うのだが。今回はそれほど深く入り込んでいなかったためか、老人はすぐに元の雰囲気に戻る。

「うん？ ならば、ワシがアレを超えるモノを創れば良いとな？」

それならば、と。彼はいつも疑問に思っていたが、聞くに聞けなかった質問を試してみた。

老人の持つ技術力は凄まじい。それは共に過ごし、その知識を分け与えてもらった彼が一番よく知っていた。

だからこそ、老人ならばISを超えるモノを創り出せると、確信にも似た思いを持っている。

「ふむ、確かにワシはそれなりに時間はかかるじやろうが、アレを超えるモノも創れる。じゃが、それは出来ん。いや、してはいかんと言っべきかのお」

だが、返ってきた答えは、彼の予想外のモノであった。
出来るのに、してはいけないとは、どういう事だろうか。

「うん？ 答えは簡単じゃ。ワシがいつも言っていることに関係している。」

思わず疑問が顔に出てしまっていたのだろうか。彼の表情を見た老人が、苦笑いを浮かべながら説明を始める。

「まず、これが世界だと仮定しよう」

老人はそう言いながら、同じ大きさの2つのグラスを並べ、その上に、どこから取り出したのか、1枚の薄い木の板を乗せた。

「そして、これが技術の進化だしよう。大きさによって、その度合いが違うと思ってくれ」

それから、これまたどこから取り出したのか、様々な大きさの鉄

球を机の上に並べる。

「技術が進化するにつれ、世界には負担がかかっていく。大きくなれば大きくなるほど、その負担は増大する」

その鉄球の中から、1つ選んでは置き、それを退かしてから、前のモノより大きいやつをと続けていく。

「じゃが、何も進化するのは技術だけではない。時間はかかる（・・・）じやろうが、世界かて同じじゃ」

すると、鉄球がある程度の大きさになった時、木の板がしなり始めた。

それを見た老人は、しなった木の板を退けて、それより厚みの増したモノを代わりに乗せる。

つまり、木の厚さが増したことが世界の進化であり、適応したという事なのだろう。時間がかかるという部分を少し強調していたので、途中のしなり（・・・）が、適応するまでに起こる理不尽なナニ力なのだろうか。

「さて、今までは少しずつ、緩やかに進化してきたワケじゃが、これがいきなり大きくなりすぎたら、どうなると思う？」

入れ替えたことにより、しなりがなくなった木の板から鉄球を退かすと、老人はそう言いながら、先程までよりかなり大きな鉄球を持ち上げた。

「勿論、世界が耐えられなければ崩壊するワケじゃが、現在^{いま}はまだ（・・・）そうはなつとらん」

そして、それを板の上に乗せる。
すると、板は物凄くしなり、ひび割れるも、何とか鉄球を支えていた。

「察しの良いお前なら、もう分かっているのではないかのぉ」
それを一瞥すると、老人は試すような視線を彼へと向ける。

それに対し、彼は何も答えないものの、頭の中ではとくに答えが導き出されていた。

そう、これは鉄球がISであり、ひび割れた板が現在^{いま}の世界なのだ。

歪なまでのしなり（・・・）が、現状の各地で起きる理不尽なナニカの多さを物語っており、ひび割れ、不安定なそれは、各国が戦争の一手手間にいることを表していた。

「現状でこれじゃ。これより大きくなったらどうなるかなど、火を見るより明らかじゃのぉ」

何も答えなかったが、老人は自分が何を言いたいのか、彼が理解していると分かっているのか、そのまま先を促した。

つまり、老人がISを超えるモノを創ってしまうと、現在^{いま}の世界では崩壊してしまうという事だ。

更に、それだけではない。今は世界中でISの開発が行われており、文字通り進化している。それはこれに例えると、少しずつ鉄球が大きくなっていることに他ならない。

「本当にアレは、難儀な問題を作ってくれたのぉ。しかも、本人はそれに気付いとらんときた。」

ならば、現状は、世界が適応して進化するのが先か、それよりも早くISが進化して崩壊するのが先か、という瀬戸際なのではない

だろうか。そのような危ない状況に気付いてないとなると、怒りを
通り越して呆れる。

何が大袈裟な、と思われるかもしれないが、現行兵器を相手に無
双出来るようなスペックを誇っているのだ。そうだとは言い切れな
いはずだ。

しかし、そう考えると、現状の理不尽なナニカに対しては、何も
出来ないという事になりかねない。

それは、彼にとってあまり堪えられないことだ。

「ワシも何とかしようとは思っとなるんじやがのお。本当に難儀なこ
とじゃて」

それが顔にでてしまっていたのか、老人は苦笑いを浮かべながら
彼にそう語りかける。

その言葉が発せられた後、その場には重苦しい雰囲気の流れてい
た。

「（ふむ、なるほど）」

1限目の授業が終わり、満は初めて休み時間というモノを経験していた。その中で、次の授業の用意をしながら、彼は視線だけで周りを見渡し、内心で1人ごちる。

「（これが先ほど織斑が体験したことか。いや、あの時の状況を考えると、今は幾分かマシなのかもな）」

休み時間になったためか、先ほどとは打って変わって、彼に視線が集まっていたのだ。一応、織斑にも視線はいつているのだが、先ほどあまり見れなかったためか、その数は満の方が若干多い。

ただ、話しかけていいのか、それとも抜け駆けする気じゃないか、というよく分からない雰囲気か辺りを漂っているので、未だに彼等は孤立無援状態だ。

「よ、よお」

と、彼が再び織斑を不憫に思っていると、1人の男が彼に対して話しかけてくる。

言わずもかな、その男とは織斑 一夏だ。この雰囲気か耐え難いのか、まだ1限目が終わったばかりだというのに、目元が疲れている。

「織斑……だったな。何か用？」

「いや……特に用はないんだけど、ほら、同じ男同士だし、一緒に行動する事も多いかと思っただけな」

「なるほど。俺は六久 満。好きに呼んでくれて良いよ」

「なら満って呼ばせてもらうぜ。俺は一夏で構わない」

軽く会話を交わすと、自分はまだ自己紹介をしていなかったことを満は思い出し、名乗ってから右手を差し出した。

対する一夏も、軽く微笑んでからその手に応え、ガッチリと握手をする。

「キヤー！ あれが 男の友情 というモノなのね！」

「あーん！ 織斑君の笑顔カッコイイ！ 六久君は……、普通かな」

「えー、そう？ 私は結構タイプなんだけどなア」

「この場合、織斑君が攻め？ いや、六久君が攻めというのも捨てがたい！」

すると、周りで事の成り行きを見守っていた（？）女子達が、俄に騒ぎ出した。1人、道を踏み外している者も居るようだ。

因みに、満の容姿に関してなのだが、彼は黒髪で碧眼。顔の造りは 中の上 といったところである。絶世の美男子というワケではないが、好きな人は好きな顔付きをしていた。そのため、今回も評価が分かれているようである。

「……そういえば、満はさっきの授業の内容って全部分かったのか？」

「大体、だが」

「す、凄いな……」

「そうか？　そういう一夏はどうなんだ？　分からない所があるなら、俺が教えてあげるよ。まア、出来る範囲で、だけどな」

「そ、それは頼もしい限りだ！　実は……」

そんな女子達に気付かず、2人は先ほど受けた授業に関しての会話を始めた。

因みに、先ほどの授業とは、ISの基礎理論である。入学前に、分厚い参考書を受け取っていたが、どうやらその内容らしい。まア、満にはそのようなモノは必要なかったのだが。

何故なら、彼にはDr. ケインという最高の教師がついていたから。本当にあの老人の知識量には、正直に感服すると、満は思っている。

しかし、そんな彼でも授業は真面目に受けていた。覚えていることの再認識、つまり復習にもなるし、何より初めて経験することだったからだ。

それに対し、一夏は何処か分からないところがあつたらしく、それを読み取った満が手を差し伸べると、かなりの勢いで食い付いてきた。

目を輝かせ、満に詰め寄る一夏。

いくら織斑教諭の弟はいえ、分からない事も当然あるのだろう、と満は思い、謙虚な姿勢を取る。

「それで、分からない点は？」

「ああ、実はな……」

「……ちよつといいか、其処のお前」

一夏が分からない事を言おうとした瞬間、それを遮るように何者かが彼等の会話に割って入ってきた。

その瞬間、一夏の顔がやや意外そうに変わり、話しかけてきた人物を見る。

彼等以外に男子はいないので、当然女子。髪型は長い黒髪を纏めるようにポニーテールにしてあり、それを結つてあるリボンの色は白。

身長は周りの女子とさほど変わらないが、体を鍛えているのか、何処か培つたような印象があつた。それでいて不機嫌なのだろうか、目元が少しばかり鋭い。

満は彼女の名前が分からなかつた。更に言うと、一夏の場合で自己紹介は終わつたので、他の女子の名前すら分かつていない状態だ。

「廊下でいいか？」

満の前では話にくいのか、その女子は絶えず一夏の方を見ていた。

まるで、彼など眼中に入っていないかのように。存在感が薄いのだろうか、と満は軽く落ち込む。

しかし、彼の気持ちなどいざ知らず。

その女子は彼等に踵を返すと、一人でさつさと廊下の方に出て行つてしまった。

満は一夏の方をちらと見やり、彼の背中をポンと叩く。

「行つて来い。ご指名だぞ」

「そ、そうだな。じゃあ、満……後で、頼む」

切実そうに両手を合わせて満に願うかのような姿勢を取ると、一夏は先ほどの女子の後を追っていった。

一夏が廊下に出ようとした瞬間、それまで道を塞いでいた女子達が一斉に道を開けていく様子を見て、満は思わず笑ってしまいそうになったが。

「（それにしても、さっきの女子は知り合いだろうか。……いや、そうでなければわざわざ一夏を呼び出すはずがない）」

完全に一夏の姿が見えなくなると、満は先ほどの女子のことを考え始めた。

自分とは違い、同年代の知り合いが居る一夏を、彼は少しばかり羨む。

「（あ、一夏が居なくなっただから、視線が一気に俺に……）」

が、それも束の間。

一夏を追いかけずに、その場に残った女子達の視線に気付き、満は少したじろぐのだった。

「 であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

二時間目の授業が始まる。

科目はIS。しかし、二時間目はISについての規則の勉強。これも入学前の参考書に書いてあり、満も一応は予習した内容だが、此处ではそれを細かく覚えさせられるらしい。

授業を聞きながら、あの参考書は本当に必要なモノだったのだなと、満は思っていた。あれがなければ、知識もないまま それこそ、感覚だけで ISを動かす所だったのだらう。

まア、彼の場合は適性数値が極端に低いので、あまり意味がないのかもしれないが、それでも規則などの詳細は知っておいて損はない。

そして今、教科書を手際よく読んでいるのは、彼等のクラスの副担任である山田真耶教諭。

先ほどのおどした態度は何処へやら、今ではしっかり先生をしている。

しかし、ISというのは、世間一般からしたら、其処まで難題なのだろうかと満は感じていた。それを証明するかのように、彼の目の前には、教科書が五冊ほどとっしりと積まれている。

健全な学生、それもISなど関係のない学校の者達なら、見るだけでげんなりとしてしまうのだろうが、他を知らない満は、それが普通なのだと思っていた。

そんな中、彼は他の生徒達同様に山田教諭の話に耳を傾け、ノートを取っている。

と、真面目にノートを取っている最中、前の席では一夏が隣の女子と何事かを話していた。

会話事態はすぐに終わり、授業中の為に聞こえないほどの小さな声だったが……彼に比べると、クラスにもう馴染んでいるようだ。そんな一夏の様子を見てか、彼の隣の女子がちらと彼の方を見る。期待に満ちたその目を見て、彼は何かを求められていることまでは読み取るが、その何かまでは理解出来なかった。

それに、この授業には何故か担任の織斑教諭までいる。出席簿を片手に持ち、その鋭い目で教室中を見渡しているのが、彼には分かる。

喋ろうものならば、あの出席簿が飛んでくるに違いない。そう考えると、彼に視線を向ける女子は、非常に危ないのかもしれない。

「あの、織斑君。何か分からないところがありますか？」

「あ、えっと……」

隣の女子と会話していたのを見ていたのだろう、山田教諭は一夏に対して尋ねる。

対する一夏はそういった曖昧な声を出す。先ほども分からない事があると満に言っていたが、恐らくはそれ関連だろう。

「（やはり、教えておくべきだったか？）」

そのやり取りをちらと見て、満はそんなことを考えるが、一夏の友人との会話を邪魔するわけにはいかなかった為、あの判断は妥当だっただろうと、彼は結論付けた。

「分からない事があつたら、何でも訊いてくださいね。なにせ、私は先生ですから」

先生という点を強調し、えっへんと胸を張る山田教諭。

まア、教師なのだから生徒の質問に答えるのは当然なのだろう。教師自体もその分からない場所を補足出来たり、其処が分からなかったのかと勉強になるなど、生徒にとっても教師にとっても重要な事になる。

そして、一夏はその言葉を聞いてばつと大きく手を上げた。

「先生！」

「はい、織斑君！」

いきなり手を上げ始めた一夏だが、山田教諭は冷静な姿勢で一夏を当てる。

おまけに、山田教諭は何処かやる気に満ちている。生徒のやる気。この場合は一夏だが、を見て、山田教諭もまた自信が満ちてきたのだろうか。

そして、一夏は 衝撃的な事をその口から発した。

「すみません、殆ど全部分かりません！」

その言葉を聞いた瞬間、満を含むクラス中の生徒の目が点になった……ような気がした。

何処か一部分だけかな、と思っていた彼も、これには面食らう形となったようだ。

やはり、先ほどは引き止めておくべきだったか、と今になって満は後悔したが、もう遅い。

「ぜ、全部……ですか？ 本当に……ですか？」

「はい！ 全部です！」

堂々と胸を張って言い放つ一夏だが、内容は何とも情けないものだ。

山田教諭も見事に顔が引きつり、なんと答えていいのかわからないような表情を浮かべていた。

「……織斑、入学前の参考書をキチンと読んだか？」

それから少しして、後ろの方に控えていた織斑教諭の飽きた様な声が教室内に響く。

「古い電話帳と間違えて捨てましたので、読んでいません」

刹那、鈍い音がしたかと思うと、一夏が音を立てて地に沈んだ。

その近くには出席簿が転がっており、恐らくはあの位置から出席簿を投げ、一夏に命中させたのだろう。恐るべし、織斑 千冬。

「（ふむ、出席簿というモノは、あのように粗末に扱っていいのだろうか？）」

その光景を見て、満は内心で首を傾げた。

「必読 と書いてあっただろうが、馬鹿者……」

呆れからくる溜息を漏らしながら、織斑教諭は呟く。

満自身も、ISの知識はあったため、参考書は捨てようかと思っただが、必読 と書いてあったため、何とか止まり内容がある程度ではあるが読んでいた。

その中には、彼の知らなかったISの運用知識などもあったため、彼は助かったと言えるのかもしれない。

「えっと……織斑君以外で、今の段階で分からないっていう人はどれくらいいますか？」

それは拳手を促しているのだろう。

ややおどおどした態度で尋ねる山田教諭だが、それに対して、手を上げる生徒などまるでいなかった。当然、満もだ。

此処までは入学前の参考書の内容にあるとおりなのだから。

「み、満も分かってるのか!？」

「騒ぐな。やかましい」

復活した一夏が満の方を見て驚愕に満ちた表情を浮かべるが、何時の間にか出席簿を拾い上げた織斑教諭が復活した一夏の頭を容赦なくその出席簿で叩く。

「ッ!」

「自業自得だ、馬鹿者め」

出席簿を持ちながら、器用に腕を組む織斑教諭。

対する一夏は頭を抱えながら悶えており、満は見ていて少し不憫に思えた。

動けば同じ目に遭いそうだったため、動くに動けなかったが。

「後で再発行してやる。一週間以内に覚える。いいな？」

「え…？ あれを一週間以内は、ちょっと…」

「やれ」

「……はい、やります。やらせていただきます」

一言で一夏が沈む。それだけ織斑教諭の威圧感が凄かったのだらう。

そんな二人の様子に、一部の女子達はクスクスと笑う。一夏は何処となく恥ずかしそうにしていたが、織斑教諭は違った。

「いいか、ISはその機動性、攻撃力、制圧力の全てにおいて過去の兵器のあらゆる点において遙かに上をいく代物だ。そういった兵器を深く知らずに扱えばどうなるか？ 当然、それに関連して事故が起きる。それも、自分の命を失うかもしれないほどのな。そうならない為に、こうした基礎知識や訓練が必要になる。理解できずとも、覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

正しい事だ。

幾らスポーツ感覚でやっているにしても、これは 兵器 なのだから。攻撃が当たれば痛いし、致命傷になるときもある。

自分たちのやっていることは戦争じゃない。

だが、兵器を扱う以上、そういった知識、あるいは訓練を重ねなければどうしようもない。

遊びではないのだ。これは、特に……。

「（流石に、理解はしているみたいだな）」

織斑教諭の言葉に、満は少し関心していた。

女尊男卑が当たり前となってしまうた今の世の中、それを忘れてしまった女性が多数居ることに、満は嘆いていたからだ。

周りとは一線を画した存在。

彼は自身の内の彼女の評価をそう位置付けておいた。

「（つと、あまり思考に耽りすぎないようにしないと）」

思考に没頭していたが、いつの間にか授業が再開しそうになっていることに気付くと、満は慌ててそれを中断する。

呆けていると、あの出席簿が飛んできそうだから。

「六久、どうかしたか？」

「ッ！？ いえ……、何も」

「そうか」

その瞬間、いきなり織斑教諭が満に話しかけてくる。

それを受けた彼は、一瞬動揺するも、何とか平静を保って言葉を返した。

思考を読まれたのか、と初めは思ったが、内容まで読まれるはずもなく、何とか誤魔化せてお咎めを逃れる。

「え、えっと、織斑君？ 分からないところは授業が終わってから……そうだ、放課後に教えてあげますから、頑張つて？ ね？ ねっ？」

「は、はあ……。それじゃあ、放課後に宜しくお願いします」

山田教諭が一夏を励ます。一夏は恥ずかしそうに頭を掻いていたが、やや力なく頷いた。

だが、その言い方がまずかったのだろう。

彼女の頬がいきなり染まり、ぱっと両頬に手を当てていた。

「ほ、放課後……放課後に二人っきりの教師と生徒……。あつ、だ、

ダメですよ！ 織斑君！ 先生、強引にされるのは弱いんですよ…？ それに私、男の人は初めてで…」

とりあえず、とんでもないことには違いない。そんな事を口にした。

山田教諭はどうやら妄想癖があるようだ。何やら良からぬ想像をその脳内で広げているのだろう。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら…！」

「ゴホン！ 山田先生。それくらいにして、授業の続きを」

「は、はひっ！？ す、すみません！」

まだまだ続きそうな山田教諭の妄想だったが、それは織斑教諭によつて遮られる。満も内心でだが、多いにツツコミを入れていたが、彼女自身もほど妄想に耽っていたようで、呼びかけられた途端にビクツと体を振るわせて反応した。

そして、慌てて机に伏せてあつた教科書を手に取り、ずり落ちた眼鏡をかけ直すと、先ほどの続きの部分だろうか、それを読み始める。

それから、何事もなかったかのように、授業は推し進められていくのだった。

「そついう訳なんだ、満！ 頼む！」

「……………あー」

地に膝をつきながら両手を合わせ、満に懇願する男、織斑 一夏。
2 限目の休み時間が訪れたと思いきや、一夏は素早く彼の所に駆け込むと、そう頼み込んできた。

対する満の反応は……微妙なモノであった。どう反応すれば良いか、イマイチ分からなかったからだ。

「……………ふむ。放課後は山田教諭の補修があるんだろ？ それが終わったら、勉強を見てやる」

「ほ、本当か！？」

しかし、いつまでも黙っているワケにもいかず、少しだけ考える仕草を見せた満は、救いの手を差し伸べた。基本的にお人好しなのだ。

一夏の目が輝き、満を真っ直ぐに見る。……………織斑教諭に怒られたくないのが身から染み出ているような感じだった。

一応、満はかなりの知識量を誇っているため、教えることは出来るのだろうが、他人に教えるという行為が初めてなので、どこからどうやって教えようかと、今から思索し始めていた。

「ちょっと、そこのお二人。よろしいかしら」

「へ？」

「……………む？」

そのようなやり取りがされているなか、そこに割り込んでくる声がした。

一夏は急に声を掛けられたことに驚いたのか、間抜けな声を上げる。

それに比べ、満は特に驚く事は無かった。声を掛けてきた人物が近づいてくるのは見えていたからだ。

そして、その声を掛けてきた女子（必然的に）だが　その容姿は、どう見ても日本人の物じゃなかった。

その髪は地毛なのか、金髪が鮮やか。ヨーロッパ方面出身なのか、瞳の色はブルーに染められており、その瞳はやや吊り上った状態で彼等を…特に、一夏を見ていた。

おまけに、金髪の髪はロールが掛かっており、話し方からしても高貴な印象を漂わせている。

「…なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄の極みなので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

満と一夏は揃って黙り込む。

一夏は正直に言って面倒そうに、満は……恐らく、一夏と同じ考えだったと思われる。彼自身、自分でもどんな表情をしていたか、さっぱり分からなかった。

一夏はポカンと口を開けていたが、満は違う。やや呆れが混ざった目線を彼女に浴びせ、その女子を馬鹿にするかのようにだった。

その女子も満の視線に気付いたのだろう。

一瞬だけ顔をしかめるが、すぐに腰に手を当てると、一歩踏み出して口を開き始める。

この世界ではISに乗れるから、女子が偉いという構図が出来ている。所謂、女尊男卑だ。しかし、だからといって、そのような態度を取る事に対しては、満は納得していなかったが。

「…満、其処の彼女と知り合いか？」

「知らん。初対面」

因みに、外国人がいることは不思議ではない。

このIS学園は無条件で多国籍の生徒を受け入れなくてはならないという規則まで存在するので、外人なんてさして珍しくともなうともないのだ。

事実、今も廊下から覗いている女子達の中には、その外人が混ざっている。

否、彼等のクラスも、半分がかうじて日本人、という事なのだが。

しかし、満の物言いに金髪の女子（名前は知らない）は怪訝そうに表情を変える。プライドが高い証拠だ。

「私を知らない？ このセシリア・オルコットをご存じなくて？」

イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を知らないなんて！？」

驚愕したような声を出す金髪。名前は、セシリア。

「（代表候補生……ね。面倒臭そうだ）」

彼女の反応を見て、満は内心で溜め息を吐いた。

「なあ、満？」

「何だ、一夏？」

「代表候補生って……何だ？」

「な、な、なっ……！ これは常識ですわよ！？ それくらいのことも知らなくて！？」

「ああ。さっぱり分からない」

一夏が言葉を発した瞬間、一部のクラス女子達が音を立ててずっこける。

対するセシリアも面食らったように口をパクパクと閉じたり開けたりしていたが、満は構わず一夏に説明する。

「代表候補生とは、それぞれ国があるだろう？ その国家代表として、ISを操縦する候補生として選出されるエリートの事だ。つまり、代表の卵だ」

「ああ、なるほど。さすが満、分かりやすい解説だな！」

親指をグツと立てて満に向ける一夏。

セシリアはそんな一夏の様子に怒り心頭の様子だったが、ふんと鼻を鳴らしたかと思えば、何故かそのままの様子で満を睨んできた。

「…折角この私が直々に常識知らずの下々に説明してさしあげようと思ったのですが……邪魔立ては許しませんわよ！」

「いや、何か固まっていたから。邪魔立てじゃあなくて、変わりに
と思つて」

「なっ……！ さっきからその態度、許しがたいですわ！」

満からしたら、面倒を避けるために、適当にあしらうつもりであつたのだが、セシリアはそれで更に怒つてしまい、彼に人差し指を向ける。

「（本当に面倒だ……）」

指を向けられた状態で、満は再び内心で溜め息を吐く。
人差し指が彼の鼻に当たりそうな程に近寄せられているので、当たつたら当たつたで面倒な事になりそうだ。

「貴方は幸運でしたわね。本来ならば私のような選ばれた人間と、
クラスを同じにする事だけでも奇跡に等しいんですから。それが分かつていなくて？」

「ふむ……」

「まあ、ISについて詳しい人が同じクラスなのは、ラッキーな事
だな」

「あ、貴方は！ 私を馬鹿にしていますの！？」

そんな彼の心境など知らず、セシリアは再び腰に手を当てながら

話し始めるも、途中で相槌を打った一夏に再度怒りだす。

沸点が低いのも代表候補生の特徴なのだろうか。それとも、単に彼女のプライドが高いだけなのか。

「（实力は本物かも知れないけど、この性格が実戦で通用するとは到底思えないな）」

目の前で百面相を見せているセシリアに対し、満は内心でそう評価していた。

「大体、貴方はISに関して何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね。少しはこの……この、根暗そうでやけに苛立つ方を見習ってはどうかの!？」

「（根暗……か。俺ってそう見えるのか）」

矛先を一夏に変えていたものの、引き合いに満を挙げ、第一印象であろうことを彼女は口走るのだが、それにより彼は少しだけ精神的ダメージを受け、内心で軽く落ち込む。

「ふん、まあでも？ 私は貴方方と違って優秀ですから。貴方のような人間にも優しく接してあげましょう」

そんな事などつゆ知らず、セシリアは一度落ち着いて（？）三度上から目線で話し出した。

それは優しさなのだろうか、と満は思い、それとなく一夏にも促してみるが一夏も首を振る。

「ISの事で分からない事があれば、そうですね……泣いてひれ伏して頼まれたなら、教えて差し上げてもよくってよ。何せ私、入

試で唯一教官を倒したエリートですから。それこそ、エリート中のエリートですよ！」

エリートの部分をやけに強調し、先ほどの山田教諭同様に胸を張るセシリア。

因みに、満は入試を受けていない。急遽決まったことな上、政府直々の推薦だったからだ。

「え？ 入試ってあれか？ ISを動かして戦うやつだろ？」

「それ以外に入試が存在しまして？」

それはともかく
閑話休題、彼女の言葉を聞いた一夏が何やら反応して質問を投げかけた。

それに対し、質問を質問で聞き返すセシリア。それはどうかと満は思ったが、この場合はああいう返し方が妥当なのだろう。相変わらず、刺々しい物言いだが。

「でも、それって……確か、俺も倒したぞ、教官」

セシリアからの返答を受けた直後、一夏の口からとんでもない言葉が飛び出してきた。

「嘘！？ 貴方なんかがありえませんか！ それに、私だけだと聞いているわよ！」

「ふむ……、女子では というオチが付くんじゃないか？」

一夏のその言葉に、セシリアは本当に信じられないといった表情で、それを否定する。

満も、初めは目を見開いて驚いていたが、それが本当だとすると、

といった感じで考えて、導き出された答えを彼女に伝える。
ちょうどその時、チャイムが鳴り響いた。

「っ…！ また後で来ますわ！ 逃げない事ですわね！」

「（いや、逃げるも何も、同じクラスだろ）」

お決まりの台詞を言って席に戻るセシリア。

その台詞に、満は内心でツツコミを入れておいた。

「あつ、しまった。教えてもらっのを忘れてた……」

「後で見えてやる。それまで我慢しろ」

「サンキュー、満！ じゃあ、また後でな！」

それだけいって、一夏も自分の席に走って戻っていく。

休み時間のはずだったのに、満は何故か精神的に余計な疲れが溜まっていた。

そして、三時間目の授業。講師はどうやら織斑教諭のようで、山田教諭は先ほど織斑教諭がどっしりと構えていた場所に立っている。

「ああ、そういえば。授業の前に再来週に行われるクラス対抗戦リーグマッチに出る代表者を決めなければならんな」

これから教鞭を振るうのかと思えば、ふと思い出したかのように
呟く織斑教諭。

クラス対抗戦リーグマッチとは、一つのクラスから一人の代表者を選出し、I
S同士で戦う行事だ。

まだまだそれぞれの实力は均衡しているだろうが、勝ち抜くのは恐らく各国の代表候補生。決勝までいけば、尚更だろう。

それに、1年にはISがどういう風に戦うのかを見る絶好の機会にもなる。戦術、機動性、相手との間合い……見る事は多い。見ることも、立派な訓練なのだ。

「ちなみに、クラス代表者とは読んで字の如く、そのままの意味だ。
対抗戦リーグマッチだけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、
クラスの長だな。これは一度決まると一年間変更は不可能だから、
それは弁えるように」

織斑教諭の言葉に、クラス中がざわめく。選ばれたら選ばれたで厄介だからだ。

早めから経験を積めるというメリットもあるが、その他として付いてくる雑務を考えると、損得差し引いて、0かもしれない。
満としては、何としても回避したい役職である。

「はいつ。私は織斑君を推薦します！」

そうこうしている内に、一人の女子が元気よく手を上げたかと思うと、一夏の事を推薦し始めた。

それに対し、一夏は何故かゆつくりと首を縦に振っている。

「私は六久君を推薦します！」

そうなれば、満の名前が挙がるのも必然というワケで。

クラスからは2人の名前が次々と聞こえてきた。

そして、ようやく一夏は事態に気付いたのか、満の方を振り向いてくる。

どういう反応をしたら良いか分からなかったため、満は無言で視線を逸らした。

「候補者は二人……織斑　一夏と六久　満か。他にいないか？　自他推薦は問わない」

「いやいや、千冬姉っ！　それはちよっ……てえっ！」

「織斑先生だ。何度言わせる気だ、お前は？」

相変わらずの出席簿で一夏の頭を叩く織斑教諭。

惚れ惚れするほど容赦がない。

「ま、待ってくれ！　俺はそれを満にゆず」

「推薦されたものに拒否権はない。それに、二人出たのならばそれ相応の手段が必要だからな……」

何処か、織斑教諭の表情が変わった。

少しばかり、口元を動かして笑ったのだ。まるで、何かを期待しているかのように。

そんな時、ガタンと音が鳴って誰かが立ち上がったかと思うと、教室内に甲高い声が響き渡る。

「お待ちください！ そんな事は納得がいきませんわ！」

更に机をバンと叩きつけ、勢いよく立ち上がる人物 セシリア・オルコットだ。

代表候補生のプライドもあり、自分の名前が上がらないのが不服なのだろう。

「そのような選出は認められません！ 大体、仮にでも男がクラス代表など……恥を晒すのと同じですわ！ 私、セシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえと！？」

まるでヒステリックを起こしたかのようにになるセシリア。その様子は、見るからにプライドの高さが窺える。

まア、満からしたら、今はそのプライドを応援したいのだが。

「實力から行けば私がクラス代表になるのは当然、それを物珍しいからと言う理由で極東の猿二匹にされては困ります！ 私はこのような島国までIS技術の修練に來たのであつてサーカスをする気は毛頭ございませんわ！ 大体、文化としても行進的な国で暮らしていかなければならないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で！」

エスカレートしていく彼女の物言いに、満はつい苦笑いを浮かべてしまう。

まさに日本という国を馬鹿にしていると言えるそれは、普通から

したら、憤慨とまではいかなくとも、多少は怒りを覚えることなのだろう。

ただ、満はその点に関してはどうでも良かった。そこまで愛国心を持っているワケではないし、彼自身の出身国がこの国だと言えるワケではなかったからだ。

出身国に関しての記憶など、とうの昔に無くしたしまっているから……。

「イギリスだって、大したお国自慢なんてねーだろ。世界一不味い料理で、一体、何年覇者だよ」　だが、それは満の場合であって、このクラスのもう1人の男子、織斑　一夏は違ったようだ。

セシリアのそれに反応たのか、彼は怒りが混ざった口調で仕返しととれる言葉を投げ返す。

「貴方！　私の祖国を侮辱しますの！？」

そのような事をする、セシリアが過剰に反応するのは自明の理で、自然と2人は睨み合う形になった。

「決闘ですわ！」

「おお、良いぜ。四の五の言うより分かりやすい」

そのままの形で、重苦しい雰囲気醸し出しながら少しばかり時間が過ぎると、セシリアが一夏を指差して決闘を申し付ける。

それに対し、一夏も乗り気なのか、なし崩しな形で決闘する事が決まった。

「（やれやれ、このままだと俺も巻き込まれそうだな）」

しかし、そうすると満も決闘に参加する事になりかねない。それは彼にとって、メリットなどなくデメリットしか残らない事柄だ。

「織斑教諭、よろしいですか？」

自分にとって不都合なことしかないモノに好んで入り込んでいくほど、満は酔狂ではない。

だからこそ、彼は拳手してから発言の許可をこの場で一番の権力者に求めた。

「何だ？」

「俺は辞退させてもらいます」

「なっ!？」

この場において、それを却下する理由などあるはずもなく、織斑教諭は満の発言を認める。

それを確認すると、彼はそのまま自分の意志を口にした。

その発言は予想外だったらしく、あからさまに狼狽える一夏はまだしも、織斑教諭ですら少し目を見開いている。

「辞退は受け付けないと言ったはずだが？」

「いや、俺の場合はきちんとした理由があります。確かに、面倒だという考えが無いと言えは嘘になりますが、何もそれだけで辞退を申し立てるではありません」

だが、それは一瞬だけであり、すぐさま織斑教諭はいつもの鋭い目線に戻ると、少し威圧感を込めて満へと話しかける。

対する満は、それを軽く受け流して飄々と語った。

すると、織斑教諭は目線を更に鋭くするも、続きを言うように促す。

「担任である貴女方は知っていると思いますが、俺のIS適性数値は1。つまり、本当にただ乗れるだけなんです。そんな俺が代表になんて向いていると思いますか？ 仮に専用機を与えられるとしても、この特殊な境遇の元、データの収集が目的になると俺は考えます。その収集に関しては、俺より遥かに適性数値の高い奴が居るのに、俺の方に回す意味があると言えますか？ ただでさえ絶対数が決まっているISを、そのように無意味に使って良いとは、俺は思えません。」

その目線の意味を読み取った満は、顔を引き締めて真剣に理由を語る。

ISに用いられているコアは、現在ブラックボックス扱いをされており、開発者にしか創れないとされている。

まア、満は他にも創れる人物を数人知っているものの、今は関係ないので黙っているが。

「今の時分、適性数値など意味をなさない」

「そう仰られると思っていましたよ。でも、それは同じスタートラインに立っているとしたらでしょう？ 俺はISの稼働に関してはてんで素人ですが、立候補をしている彼女は代表候補生なんですから、経験は豊富なはずです。仮に専用機を受け取らず、訓練機で戦闘を行うにしても、専用機持ちである彼女に訓練機で挑むことじたい自殺行為だ。経験があればそうでもないんでしょうが、さっき言った通り俺にはそれが無い。機体のスペックで負け、経験で負け、操作技術でも負けているのに、どうやって勝てと？ 勝てる戦しかないのかと言われると否と答えますが、今回は無理を通さなければ

ならないような事では無いと俺は思っています。故に、俺は辞退を申し立てるのです。」

満の言い分を聞き終わると、織斑教諭は瞳を閉じながら先程より幾分か低い声で、彼に語りかけた。見方によっては、怒っているようにとれるかもしれない。

しかし、満はそのような事など気にもせず、それに反論してから更に持論を展開した。

そう、彼は分かっているのだ。自分に出来ること・出来ないことが。自分が持つスキルを深く理解し、それを的確に判断する。

世の中、出来ないことでもやり通さなければならぬ時が確かにあるが、今回はそのような時だとは考え難い。

「……分かった。お前の辞退は受理しよう」

満の言っていることに間違いはないため、織斑教諭は渋々ながらも彼の辞退を承諾した。

その言葉を聞いて、満は一息吐いてから姿勢を崩す。

「ふ、ふん！ あちらの方は少しは利口なようですわね。貴方も、謝るなら今のうちですよ」

「何を謝れば良いんだよ」

それにより、満達のやりとりの間に固まっていた空気がほぐれ、件の中心であるセシリアと一夏が再び牽制しあいだした。

「戦うことはよろしいですけど、わざと負けたりしたら私の小間使い……いえ、奴隷にしますわよ！」

「真剣勝負なのに、そんな無粋な真似はしねーよ」

まさに売り言葉に買い言葉。とんとん拍子で話が進んでいく。

「話は纏まったな。それでは勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑とオルコットは、それぞれ準備をしておくように。」

切りの良いところを見計らい、織斑教諭が決闘の仔細を伝えた。これにより、1組のクラス代表決定戦が、正式に執り行われることが決まるのだった。

第2話・出来ること・出来ないこと・（後書き）

ハイ、セシリアとの決闘話が挙がるところまでを書いてみました。
千冬の初絡み（？）ですが、まずはこんなところでは。

かなり強引すぎたでしょうか？（苦笑）

指摘などがあれば、感想覧に書いて頂けたら嬉しいです。

では、また次話にて会いしましょう。

第3話・部屋割り・（前書き）

投稿してから5日ほどで、PVが約20000、ユニークも約2500という数字になっていました。

これが凄いかどうかは自分には分かりませんが、兎に角、それだけの方々がこの拙作を拝読して下さっているということに、感無量です。

これを励みに、これから一層精進していこうと思っていますので、何卒よろしく願います。

では、浮ついた拙作ではありますが、今回も楽しんでいただけたら幸いですm（ー）（ー）m

第3話・部屋割り・

立ち入り禁止区域

文字通り、入ってはいけなさとされる場所だ。

その気になって探せば、それなりに見つけられるこれは、幼き子供はなかなか好奇心を擽られるのではなからうか。

心を組み直せた彼もその例に漏れず、老人から固く禁じられていた場所へと忍び込んでしまった。

「何故じゃ……。何故こうなってしまったのじゃ!？」

結果、今、老人は彼の目の前で悲しみにくれている。

彼が、その場にあつたモノを起動させてしまったために……。

「このようなことが運命だとすれば、世界はこの子に何を求めているのじゃ……!」

過ぎてしまった時は戻せない。例えそのようなことが出来たとしても、それはしてはいけない。

こうして、彼の運命は静かに……、されどしっかりと動き出すのだった。

狂々、狂々と……。

「おい！ お前、アレはどういうことだよ！？」

「どういうこととは？」

3 限目が終わり、休み時間になった途端、一夏は満のもとへと駆け込むと、開口一番そのように怒鳴りつけてきた。

対する満は、熱くなっている彼とは対照的に、冷めた様子で言葉を返す。

「さっきのことだよ！」

「ふむ……、そう言われても、さっき言った通りなんだが」

それが気に食わないのか、一夏はますますヒートアップするのだが、満はその態度を崩さない。

「お前、あれだけ言われて悔しくないのかよ！？」

「うーん……、悔しくないと言えば嘘になるが、あれはどうでも良いことだったし」

「何でだよ！？」

「まアそう熱くなるな。それにだって、きちんと理由があるんだぞ？」

「……え？」

まさに 暖簾に腕押し な状態であつたにもかかわらず、一夏は尚も満に食い下がるのだが、やっと彼の話題に触れた満によつてもたらされた言葉により、幾分か冷静になる。

「俺よりお前の方が勝てる可能性が高いからこそ、辞退したんだ」

「でも、俺だってISに関してはド素人だぜ？ それに、知識だけならお前の方があるじゃないか」

一夏の様子を見計らい、満は静かに語り出す。
だが、その内容に不満を持った一夏は、顔をしかめて反論してきた。

「知識だけではどうにもならん事だつてある。お前は、国語の知識がある……つまり成績が良いつてだけで、世間から面白いと評価される小説が書けると思うか？」

「それは……」

それを満は軽く受け流し、たとえ話を持ち出して説明する。

そう、知識だけではどうにもならないことはあるのだ。

彼の話为例として挙げると、確かに、国語の知識があれば、文章の構成やセリフ回しなど、小説の外側は上手いこと作れるだろう。

だが、それだけでは肝心の中身であるストーリーが足りない。そして、それを思い付くというのは、ある種の先天的な才能が必要である。

言ってしまったえば、たとえ国語の成績が悪くても、きちんとしたストーリーを思い付けたのなら、それは面白い小説となるのだ。外側は、後から付け足していけば良い。

逆に、外側が綺麗に作れたとしても、ストーリーがしつかりしていなければ、それはとても薄っぺらなモノになってしまう。

知識は既存のモノであるから、後から比較的楽に吸収することが出来る。まア、相応の努力は必要であるが。

しかし、先天的なモノに関しては、そうはいかない。それは、ある種の新しいモノを生み出すことに等しいのだ。努力すれば何とかなるだろうが、それは知識を吸収することよりも、遥かに時間がかかってしまうだろう。

「それに、悔しいとは思ったけど、どうでも良かったし」

「それが俺には分からない」

話が逸れたが、一夏から何も返ってこないのを確認すると、満はこの話の根本となつているところを話しだした。

勿論、一夏はそれが納得いかなかったから、尚も食い付いてくる。

「だって、お前が居るからな……」

「へ？」

そんな一夏を見て、満は苦笑いを浮かべながら穏やかな声で語った。

その言葉を聞いた一夏は、なんとも間抜けな声をあげる。

「あのまま俺が参戦していたとしたら、お前よりも才能の無い俺は、不様な姿を晒すだけだったろうしな。仮にお前とオルコットが先に

戦って、お前が勝ったとしても、その後に俺と戦うことになったら、十中八九俺が負ける。そしたら、お前だけが特別だったんだってことになりかねないだろ？」

呆けている一夏をよそに、満は真剣な眼差しを彼に向けて自分の考えを語った。

「それって、つまり……」

「そ！俺に対しての保険というワケだ」

「……お前、そんな嫌な性格の奴だったんだな」

「クッ……、そう言うな。それでも、結構期待してるんだぞ？」

「うあ……、変なプレッシャーかけるなよ」

何とか再起動をはたした一夏からの言葉に、満は飄々と答える。

そして、大凡の会話が終わったところでチャイムが鳴り響き、彼等は再び授業へと戻るのだった。

「だから、ここはこういう意味になるんだ」

「なるほど！」

「……と、まア今日はこの辺りで終わっておくか」

「分かった。サンキューな、満！」

満にとって、初めての授業。それを全てこなしきった後の放課後。今、彼は、約束通り一夏の勉強を見てあげていた。辺りが夕暮れに染まってきた頃になり、漸くその個人授業が終わり、一夏は固まった身体を解すように伸びをしながら気さくに満へと感謝を述べる。

周りを見てみると、ある程度時間が経ったとはいえ、まだ教室の周りに女子達が集中していた。その状況から、まるで、動物園にいる動物のように思えるな。と、満は内心で1人ごちる。

「あつ、六久君に織斑君。まだ教室にいたんですね、良かったです」

そんなことを考えていると、女子が集まっていない方の扉から誰か入ってきて、その声を掛けられた。

彼等は同時にその声の方を向き、その人物を確認する。まア、大方予想はついていたのだが。

「どうしたんですか、山田先生？」

不思議そうな表情で一夏は顔をそちらへと向ける。

そう、彼等に話しかけてきたのは副担任である山田教諭だった。
この後に会議でもあるのだろうか、書類を片手に持っている。

「はい。あのですね、お二人の寮の部屋が決まりましたので、その報告をですね」

そう言い、2つのキーを渡す山田教諭。

1つは一夏に渡し、もう1つは満に渡した。……が、彼女をちらと見たところ、満は何処か妙な印象を受ける。

すると、一夏は部屋のキーをポンと渡された事に首を傾げながら、山田教諭に尋ねた。

「えっと、俺の部屋はまだ決まっていけないんじゃないですか？
前に聞いた話だと、初めの内は家から通学してもらって……」

「ええ、そうなんですけど……君達の場合は事情が事情ですので、
一時的な措置として部屋割りを無理やり変更してみたんです。
…それと、その件に関して重大なミスがありました……」

そう言って、山田教諭は何故か肩を落とし、一夏の方を見る。

一夏は一体何の事だか分かっていない様子だったが、満はそれを見る限り、部屋割りの事なのだろうと考えた。

「えっと、六久君の方は個室を用意できたんです。でも、織斑君の方は女子の方と共同という事になりました……」

「え……？ ええっ!？」

「なるほどね……」

小声で話してきた山田教諭の言葉に、一夏は当然驚いた。
しかし、満だけはどこか納得した表情を浮かべている。

「何かなるほどなんだよ!？」

「いや、少し考えたら分かるだろ？俺達はかなり特殊な例なんだ。だから、学園から外に出すのは、政府からしたらあまり得策じゃない」

その態度を不思議に思ったのか、一夏が満にツッコミを入れるが、満はそれに冷静に答えた。

「その通りだ」

すると、まるで見計らったかのように、彼等のもとへ織斑教諭が現れる。

「な、何で満は違うのに、俺が別の部屋なんですか？一緒の場所に行けば……」

「文句を言つな、織斑。お前の場合は無理やり変更したんだ。妙な勧誘に晒されないだけマシだと思え」

その姿を見た瞬間、一夏はどこか気まずそうな表情をするも、すぐさまそれを振り払い織斑教諭へと提案を述べた。

しかし、案の定それは却下される。

「ま、まあ、それは分かりますけど……その、家に戻って準備をしないといけないですし、今日は」

「荷物？ああ、私が手配してやった。ありがたく思え」

それでも、一夏は何とかしようとあれこれ言うのだが、彼女はそ

れをバツサリと切り裂いた。

途端、一夏の表情が変わる。その顔を例えるなら、やっぱりといった表情だろう。

「まア、荷物といつても生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器だけで十分だろう」

「あ、ありがとうございます……」

そして、トドメの一撃が一夏へと与えられた。

彼女のやった事は凄く大雑把だが、確かにそれで事足りる。

まア、一夏は何処と無く不満そうだったが、折角織斑教諭が手配してくれたのだ。当然、文句は言えなかった。

「それで、六久の方なんだが……」

「ああ、大丈夫ですよ。ある程度は予想出来ていたんで、ここに来るまでに手配しておきました。仮に部屋が決まらなかったとしても、謝ってどこかに保管してもらって、部屋が決まってから運べば良かっただけです」

「……そうか」

それから、織斑教諭は満に対して何か言おうとするのだが、それを遮るかのように彼は言葉を発する。

それを聞いた織斑教諭は、一瞬だけ目を鋭くさせるも、短くそう答えるだけであった。

「では、話はそれだけだ。道草なんぞ食わずに、真っ直ぐ寮へと帰るように」

そして、ある程度の注意事項を伝えと、織斑教諭はそう言つて教室を後にする。

それを追つて山田教諭も出て行つてしまつたので、これ以上ここに居ても仕方がないと、満達も帰路に着くのであつた。

勿論、道草などしたら織斑教諭の出席簿が火を吹くので、真つ直ぐと……だが。

突然であるが、IS学園はかなりのエリート校である。兵器

を扱うといった関係上、文字通りその門は狭い。

それは定員数を割る事もあるということを表す。命がかかつているのだ。一定の基準を満たせていない者を入学させるワケにもいきまい。

「やはり、備品置きとして使われていたようだな……」

今現在、満はあてがわれた部屋へと辿り着き、内装を見回してい

た。

そこから何か気付いたのか、小さくそう呟く。

「そりゃあ、得体の知れない奴を、弟と一緒にには出来ないわな……」

そう、彼は気付いたのだ。この部屋が、無理矢理用意されたということを。

所々に見受けられる何かの跡は、ここが物置みたいに使われていたことを表す。つまり、定員数を割ったので、そのように使っていたということだろう。

「あー……、警戒させちゃったかなア」

彼からしたら、今までの生活上、雨風さえ凌げればそれで良かったので、どのように部屋が使われていようとどうでも良かったのだが、その他に関してはそうもいかなかった。

去り際に見せた、織斑教諭の目筋を思い出しながら、満は誰に言うのでもなく、1人そう愚痴るのだった。

IS学園・第1学年フロアの廊下・

「織斑先生、本当に良かったのですか？」

「何がですか？ 山田先生」

会議が終わったのか、満のクラスの担任と副担任は、廊下を歩きながら少し話していた。

「部屋割りのことです。織斑君の言うとおり、2人とも同じ部屋にした方が良かったのでは？」

「ああ、その事ですか。確かに、男女を共にさせるよりはマシかもしれませんが、それが出来なかったんです」

その会話の話題は、先ほどの部屋割りの事。山田教諭が言っている事は酷く正論なのだが、織斑教諭はそれでもそうするワケにはいかなかった。

「何故ですか？」

「山田先生も知っているでしょう？ 六久の奴は、あの歳からしたら知識量がありすぎるんですよ」

そう、彼女は警戒していたのだ。急遽この学園へと入学が決まった満のことを。

入試を受けずに入ってきたため、その実力は未知数。

そのため、クラス代表を決める時にでも見せてもらおうかと思っ

ていたのだが、その目論見も失敗に終わってしまった。

正体が明確でない者が、有り得ないほどの知識量を誇っていたら、警戒するなという方がおかしい。

「そ、そうですか」

「ハイ、だから山田先生も少し警戒しておいた方がよろしいですよ」

その話を、どこか他人ごとのように聞いていた山田教諭に、織斑教諭は念のために釘を刺しておく。

様々な思惑が交差する中、満の初めての学園生活初日が、幕を閉じるのであった。

第3話・部屋割り・（後書き）

ハイ、今回はこれまでです。

前話にて、ストックを崩してしまったおかげで、何か変な感じになつてしまった気がします。

まア、それは言い訳にしかありませんが（苦笑）

とりあえず、この話では、千冬の満に対しての第一印象を書きたかったんですが、どうだったでしょうか？

かなり強引なような気がしないでもないですが、兎に角、警戒から入ったということが伝わっていたら幸いです。

では、後書きはこれくらいにして、次話にてまたお会いしましょう。

第4話・クラス代表決定戦 - (前書き)

初めは前後編に分けようかと思っていたんですが、それだとまた何か中途半端に感じたんで、崩して繋いで修正をしていました。

それにしても、戦闘描写って難しいですね(苦笑)

では、何か変な感じになってしまいましたが、楽しんで頂ければ幸いです。

第4話・クラス代表決定戦・

そこに居る者達は、紛れもない 天才 であつた。各分野でそう言われてもおかしくない者達が、そこには集まっていた。

ただ、その者達は少し変わっていた。 天才 とは、利己的で協調性の無いモノとされていたが、その者達は違ったのだ。

否、元々はそうであつたのだが、今は変わったと言つて良い。

そう、彼等は気付いてしまったのだ。その類い希なる頭脳から、自分達の力が、やがて世界を滅ぼしかねないということに。

彼等とて、自分達の力でこの世界がどの様に進化していくかに、興味はあつた。だが、だからと言って、世界を滅亡させたいとは思つていない。

故に、彼等は 表 から姿を消し、アンダーグラウンドに隠れた。その力が、易々と使われないように……。

しかし、それでも彼等が 天才 であるという事実是不変ならないならば、その様な者達が集まっている環境に、彼が入ったらどうなるだろうか。全てを失い、空っぽになつてしまった彼が……。

答えは簡単。その 天才達 の知識を、吸収していったのだ。

確かに、相応の努力はしていたが、空っぽ故に、彼は瞬く間に知識を蓄えていった。周りの者達も、彼のような子供を相手にした経験が少なかったため、面白がつてドンドン彼に、色々と教えていった。結果、彼は年不相応の知識量を誇るようになる。

だが、彼はそこで止まつた。そこから先へ、発展させることが出来なかつたのだ。つまり、彼は圧倒的な知識量を誇る 秀才 であるものの、 天才 ではなかつたということである。

そのことに彼は申し訳なさを覚え、周りの者達へと頭を下げた。それに対し、周りの者達は笑いながら気にするなと彼を氣遣い、最後にこう言つた。

「大いなる力には、責任が伴う。故に、お前は選択を誤るなよ」

この言葉は、今でも彼の胸の内にある。きちんと守れてきたかどうか自信はないが、それでも彼は今まで自分がしてきた事が、間違いはなかったと言い切れる。

「本当に、有難うございます。貴方達のおかげで、俺は今も生きているのだから……」

だからこそ、彼は感謝を忘れない。

久々に夢で見た 天才達 に、目覚めたばかりの彼はそう口にした。遠くに居るであろう彼等に届くよう、小さいながらも、しっかりと。

その言葉は、彼の頭上に広がる蒼穹に、吸い込まれるように溶け込むのだった。

何だかんだで、あれから1週間の時が流れた。

その間、満は一夏に勉強を教えたり、男同士のハートフルな会話をしたり、周りが女ばかりの生活にストレスが溜まった一夏を氣遣ったり、慣れない生活を送る上で自分までもストレスが溜まったので、その発散に四苦八苦したりと、なかなか充実した学園生活を送っていた。

更に、親しく出来る友人も増えたのだ。

その相手とは、篠ノ之 箒。一夏のルームメイトであり、あの（・・・）ISの開発者の妹でもある。

最初は、彼女の姉に近付けるかと思っていたが、途中、彼女自身が姉を嫌っている節を見せたため、めばしい情報は得られないだろうと、満は結論付けた。

まア、そういった打算的な部分を抜きにしても、仲良くしたいと思えた相手だから、友人になれたのだが。

何故なら、彼女は一夏に恋しているから。

それを直接口にすれば、彼女は否定するだろうが、態度があからさまなため、満は簡単にそれに気付けた。

彼にとっては、初めての友人と言える一夏。そんな彼に恋する女の子。お人好しの満からしたら、応援せずにはいられない相手だ。だから、いつも放課後に仲良く勉強している彼に嫉妬（？）していた彼女に、満は一夏を差し出した。理由に、勉強ばかりではなく、身体も動かすべきだろうから と言って、彼女に一夏の特訓を任せたのだ。

結果、一夏は地獄を見るハメになったのだが……。

それはともかく
閑話休題、そんな充実した1週間も終わりを告げ、今現在はクラス代表決定戦の真つ最中……の筈なのだが。

「なア、満。俺の専用機はいつになったら届くんだろうな」

「俺にそんなこと言われてもなァ……」

「なァ、ほう……」

「知らん」

第3アリーナのピットにて、3人は待機していた。

そんな中、一夏は近くに居る友人に対して、疑問に思っている事を尋ねてみるも、取り合ってもらえなかった。幕に至っては、名前すら全て言わせてもらえずに、切り捨てられたほどだ。

何故そのようなことをしているかという、それは未だに一夏の専用機が届いていなかったからだ。

アリーナの方を見ると、セシリアは準備万端なようで、既に空へと上がっている。更に、周りには今か今かと待ちわびているクラスメート達の姿が見えた。流石に、ここまで盛り上がらせておいて、戦えませんでしたでは洒落にならない。

だが、それでもISの機体がなければ戦えないのも事実なので、そのモヤモヤを何とかするためか、一夏は妙にソワソワしていた。

「あれが、アイツの専用機か……」

それを解消するために、友人に話し掛けていたのだが、それを取り合ってもらえなかったので、一夏は仕方なく目の前にモニターを開き、セシリアの姿を見ることにする。

彼は1週間、満に色々と勉強を教えてもらっていたので、それなりに知識は蓄えられたが、それでも相手の姿を見ただけでは、どのような機体なのかは読み取れなかった。

しかし、それでも何もしないよりはマシだったのだろう。いつの間にか、彼のソワソワ感はなくなっていた。

「織斑君！ 織斑君！ 織斑君！」

そこへ、何やら慌てた様子の山田教諭が、一夏へと声をかける。名前は一度呼べば良いように思えるが、そこにツツコミを入れてはいけないのだろう。

「来ました、織斑君の専用IS！」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用出来る時間は限られているからな、ぶつつけ本番でモノにしろ」

どうやら、やっと一夏の専用機が届いたようで、それにより山田教諭は興奮していたようだ。その一報が一夏の耳に入ると、すぐさま織斑教諭から指示が飛ぶ。まア、その指示はとんでもないモノであつたが。

「これが、織斑君の専用IS、 白式 です」

そして、彼等の目の前に現れる、一夏の専用機。その壮大な姿に、一夏の表情は先ほどよりも引き締まったモノとなった。

「すぐに装着しろ。時間がないから、フォーマットとフィッティングは実戦でやれ」

すると、それを見計らったかのように、織斑教諭から更なる指示が飛んでくる。だが、その内容を聞いた満は、一瞬だけであるが顔をしかめるのであつた。

それが、訓練もしていない新兵を、実戦に出すようなモノだったから。無茶振りにも程があるだろう。

しかし、今はそんな事を言っていられないので、満は黙っておい

た。 そんな満に気付くことなく、一夏は織斑教諭にせかされて、まるで主を待ちわびるかのように解放されている 白式 の装甲の中に、自分の体を潜り込ませた。

すると、 白式 は主の存在を確認し、即座に一夏の体と機体各所を接続する。一夏はまるで、もともと自身の体であるかのような一体感を感じた。手や足だけでなく、本来人間の体には備わっていない筈のスラスター・各種センサーですら、自分の為だけにあつらえたかのように感じられる。

視界に直接投影されるモニターの各種ステータスは、すべて正常を示し、同時に一夏に最適な機体となるために、高速でデータの処理を行っている。それが完了した時こそ、 白式 は新に一夏の専用機となるのだ。

そして、 白式 のレーダーが一つの反応を捕らえる。

ブルー・ティアーズ、セシリア・オルコットの駆る第三世代型IS、これから一夏が刃を交える相手だ。

知らず一夏はこぶしを握り、 白式 の腕が鋼の擦れる音を立てた。

その音を聞きながら、一夏はこの一週間のことを思い返していた。満は約束通りに自分のできる範囲で、最大限助力してくれた。

箒も、ISとは関係がなさそうなものの、身体を動かすという意味で剣道に付き合ってくれた（付き合わされた）。

しかし、これから戦う相手は代表候補生に選ばれるほどの実力者、自分の勝つ確率は限りなく低いだろう。

だからと言って臆してなんかいられない、勝つにしろ負けるにしろ、友人の思いを無駄にするような無様な戦いだけはしない、そのぐらいの意地は一夏にだってあった。

「じゃあ、行ってくるぜ箒」

一夏は振り返り、後ろにいた箒と向き合いそう言う。ISのハイ

パーセンサーのおかげで、今の一夏の視界は三百六十度全方位にあるが、それでも一夏はしっかりと箒を見つめた。今回の自分の無謀とも言われている挑戦にも、誠心誠意を持って応えてくれた、大切な幼馴染を

そして箒は、そんな一夏に勝てでもなく、負けるまでもなく、ただ一言

「
がんばれ、一夏」

笑顔を浮かべて、そう言った。それは一夏にとって、最も心強い加勢に他ならなかった。

更に、今回手助けをしてくれたもう1人の友人、満の方へと振り向くと、彼は何か言うワケでもなく、力強く1つ頷いていた。それが、余計な力を一夏から抜いたのだろう。それだけで、何故か落ち着いた気持ちになった。

そして一夏は、白式を浮かばせ音もなくアリーナへと向かう。その胸の裡に溢れんばかりの闘志を滾らせて

そして、アリーナに足を踏み入れた一夏は、視線の先にいるISを認識した。

「あら、逃げずに来ましたのね」

腰に手を当て、天空に優雅にたたずむセシリア。その容姿と雰囲気はまるで一枚の名画のように、非常に様になっていた。

そのセシリアが纏っているISは、青を主体としたカラーリングに、騎士をイメージさせる四枚のフィン・アーマーを背中に装着した、イギリスの第三世代型IS ブルー・ティアーズ。

その手にはすでに主兵装である六七口径特殊レーザーライフルスターライトmk? が握られているが、セシリアの余裕の表れなのか銃口は下げられたままだ。

「最後のチャンスをおげますわ」

銃口を下げたまま、セシリアは一夏を指さしながら言い放つ。だが、その態度からろくでもないことを言いだすのは明白だった。

「チャンスって?」

「私が一方的に勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

予想通りのろくでもない言葉。しかし、セシリアの様子からして、本気で慈悲のつもりで言っているのだろう。

だから、そんな言葉に、一夏は馬鹿丁寧に返すつもりは毛頭なかった。

「そんなのはチャンスとは言わないだろ。それに、ここまでお膳立てしてもらったんだ。今更引けない」

力強く、しつかりとした視線でセシリアを見やり、言い放つ一夏。

「そう、残念ですわ。それなら……」

それを意にかいさず、セシリアは戦闘態勢に移行する。

瞬間、白式のハイパーセンサーが反応し、一夏へと警告を指し示した。

「お別れですわね！」

それと同時に、一夏へと放たれるセシリアの攻撃。不意打ち気味に放たれたそれは、寸分違わず彼へと叩き込まれるのだが、何とかそれを腕の部分で防いだ一夏は、背中から地面へと落ちていくも、叩き付けられることなくスレスレで姿勢を正した。

が、それだけでセシリアからの攻撃が止まることなどあるはずもなく、レーザーによる攻撃が矢継ぎ早に放たれるので、一夏は必死で回避に徹する。

「クソッ！ 俺が白式の反応に追いついていない！？」

「さア、踊りなさい。私、セシリア・オルコットのブルー・ティアーズが奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

途中、一夏は現状に悪態を吐くのだが、そんな彼を嘲笑うかのように、セシリアは容赦なくその手に持つ武器から攻撃を放ち続けた。

「ヤバイ。何か装備……、装備は……」

完全に避けきれないそれを、腕で顔を隠す形で防ぎながら、一夏は何とかしようと武器を探す。

すると、近接用ブレードのみが、選択肢として現れた。

「これだけか！？　まあ、素手でやるよりは良いか！」

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘装備で挑もうだなんて、笑止ですわ！」

そのことに更に悪態を吐きそうになるも、一夏は開き直ってそれを取り出し、セシリアへと突っ込む。

対するセシリアは、それを舐められていると捉えたのか、更に攻撃の苛烈さを増すのだった。

一夏がアリーナ内でセシリアとの決闘を演じる中、箒はピット内のモニターで、満はピットからアリーナへと繋がっている出入り口から、それぞれそれを観戦していた。

「一夏……」

「大丈夫だよ。そこまで心配しなくても」

そんな中、苛烈さを増したセシリアの攻撃に曝される一夏の姿を見て、箒は弱々しく呟く。

それが聞こえたのか、満は戦闘に視線をやったままではあったが、彼女を気遣った言葉をかけた。

「何故お前はそんな風に言えるのだ」

「1週間、俺はアイツにやれるだけのことはしてやったつもりだから。後は信じて待つしかないと思ってるんだよ」

しかし、その言葉が気に食わなかったのか、箒は噛み付いてくる。対する満は、視界に入れてなくても彼女の現在の表情が頭に思い浮かび、苦笑いを浮かべるのだが、視線はそのままに静かに言葉を返した。

次の瞬間、手に持つライフルだけでなく、ピットによる攻撃をも加えた、まるで流星雨かのようなセシリアの攻撃を、ダメージを無視した形で一夏がなんとか切り抜ける。

「何という無茶を……」

「でも、ただ闇雲にそうしたワケじゃなさそうだ。段々と動きも良

くなってきたるし」

「しかし……！」

「勝つにしろ、負けるにしろ、俺達はアイツを気持ち良く迎えてやるべきなんじゃないか？」

そんな一夏の様子を見て、箒は呆れたように言葉を漏らす。それに對しても満は自分の意見を述べた。その言葉を耳にして、箒は再び彼に噛み付こうとするのだが、それを遮るかのように満は再度言葉を口にする。

すると、箒は何も言い返せずに黙り込んでしまった。

「うん……、良い顔付きだ」

そんな彼等のことなど知るはずもない一夏は、勝機を見つけたのか、目を輝かせながらセシリアの放つ攻撃をかくぐり、遂にはビットの1つを斬り捨てた。その表情を見た満は、微笑みながら穏やかな声でそう呟く。

「一夏！」

「クククッ……」

だが、次の瞬間、ビットを更に2つ落とし、攻勢に転じた一夏に、セシリアの罠が襲いかかる。

攻撃手段がまだ残っていたようで、彼女が放ったミサイルが、全弾モロに入ってしまったのだ。

「何を笑っているのだ!？」

「いや、一夏って本当に主人公体質なんだな。まるで狙ってやっているかのようだよ」

その光景を見て、箒は一夏を心配するのだが、満は何故か笑い声を零す。

端からみたらそれは不謹慎であり、箒も激昂して彼へと詰め寄るのだが、満はそれを意にも介さず飄々と受け流した。

「何ワケの分からんことを……！」

「ほら、試合はまだ終わってないぞ」

「は？」

その態度に、箒は堪忍袋の緒が切れそうになるのだが、満はそれを無視してアリーナの方を指差した。

すると、そこにはやっとファーストシフトが終了したのか、姿を変えた一夏が健在している。

それを見て、箒は間抜けな声をあげた。

「な、何故お前は一夏が無事だと分かったんだ？」

「何故って、見えていたからだが……」

それから暫く箒は固まっていたのだが、なんとか再起動すると困惑気味に満に尋ねる。

それに対し、満はキョトンとしながら簡潔に答えを返した。

「ちょ、ちょっと待て！ 見えていたとはどういう……。いや、そ

「そもそも、先ほどから気になっていたのだが、お前はモニターを見ていなかったよな!？」

「ああ、それについては簡単だ。俺は常人より視力が遥かに優れているんだよ。だから、ここからでも一夏の様子を見ることが出来るんだ」

その答えを聞き、箒は驚愕の表情を浮かべて、悲鳴じみた声で再び満へと尋ねる。

それに対し、満はニヤリといった表情で、飄々と再度答えを返した。

かつて、マサイ族の戦士がとんでもない視力を叩き出したそうなのだが、満はそれと同じくらいのモノを持っていた。

流石に、某赤い弓兵と比べると見劣りするものの、十分に異常である。

「そんな馬鹿なことが……!」

「と言っても、やっぱり流石に死角があるわな。ってことで、一緒にモニターで観戦しようか」

そのことに、箒は何故か戦慄を覚え、信じられないといった表情で呟くのだが、満はそれに気付かず、彼女の隣へと来るとモニターを見だした。

篠ノ乃 箒にとって、六久 満という存在は、飄々としていてどこか掴みづらいところがあるものの、さり気なく自分を手助け意中の人へのアプローチという意味で してくれる、優しい奴といったモノであった。

しかし、今回のこれで、更に よく分からない奴 というモノが加えられるのであった。

第の満に対しての評価が改まった頃。

空では二機のブルー・ティアーズがミサイルを発射する前に一閃されたところだった。そうになると、セシリアに残された使用できる武装はスターライトmk?だけ。急いで照準を合わせようとするが、ファーストシフトを果たした一夏の白式のスピードに対応することができずに、スターライトmk?も破壊される。

「やった!」

そのことに、一夏の勝利を確信した第の声が響き渡った。

確かにこれでセシリアの攻撃手段はなくなったため、後は一夏が攻撃を与えるだけである。

満がそう思っていると、徐に一夏が持つ剣が光り出した。

『試合終了！ 勝者

セシリア・オルコット！』

その瞬間、アナウンスが流れ、一夏の敗北が伝えられる。

「……は？」

それを聞いてからたつぷり間を置いて、箒と満は間抜けな声をあげるのであった。

試合終了後。

一夏はピットにて、織斑教諭から軽い説教を受けてから、白式の武器についての説明を受けていた。

「残念だったな」

「満……」

それが終わり、山田教諭からISについての分厚い規則本を受け取って、何とも言えない表情をしていた彼に、満は声をかける。

「スマン、負けちまった。お前の期待に応えられなかったよ」

「む？ お前は何を言っているんだ？ 俺は勝てとは一言も言っていないぞ」

その声がした方を向いた一夏は、本当に申し訳なさそうな表情で満へ謝罪を述べた。

しかし、対する満は不思議そうな表情で言葉を返す。

「でも、『期待している』って言ってたじゃないか」

「ああ、確かに言ったな。だが、それが『勝て』ということには繋がらないぞ。結果は負けだけど、あれだけ善戦したんだ。十分にお前は俺の期待に応えてくれたさ」

それが不思議に思ったのか、一夏は意外そうに満に尋ねるのだが、満は穏やかな声でその答えを口にした。

「まア、初戦闘だったからな。一夏自身でも反省点はいっぱい見つけたと思う。大事なのは、その反省を今後に活かすことだ。それができなければ、意味はないからな」

「そう……だな」

その後に、声色を元に戻して、満は一夏へと助言を与える。対する一夏も、表情をキュッと引き締めて返事を返した。

「……悔しかったか？」

「悔し……いに決まってるだろ。あんな事を色々言ったセシリアには、勝ちたかったに決まってる」

「そうか」

なら、お前はまだまだ強くなるさ」

その返事を聞くと、満は少しばかり何かを考える仕草を見せてから、一夏へと1つの質問を投げかけた。

一夏はそれに真摯に答える。

それを耳にした満は、ニヤリといった笑みを浮かべて一夏へとそう言い放った。

「まあ、今日は良く頑張った。戦いの中で成長するっていうのは難しいんだ。自分のペースで強くなれば良い。ISの操縦についてはなにも手助けできないかもしれないが、それ以外のことならなんでも頼ってくれよ？」

「満……ありがとうな！」

「いや、俺だけじゃあないぞ？俺は操縦は教えられんが、それに關しては箒ちゃんが居る。だろ？」

それから、労いの言葉を一夏に送ってやると、これから關しての話をしながら、満は箒へとアイコンタクトを送る。

「あ、当たり前だ！操縦に關しては、これから私が教えてやる！」

「そっか！箒もサンキューな！」

すると、箒は顔を赤くしながら満の言葉に反応した。
どうやら、一夏と一緒に居れる時間が増えるのが嬉しいようだ。
しかし、一夏はそんな箒の心情など気付かず、純粹に手助けしてくれると思い軽く御礼を述べる。本当に鈍感だ。
それから、アリーナの使用時間の期限が迫ったため、3人は慌ててその場を後にする。

こうして、クラス代表決戦は幕を閉じるのであった。

第4話・クラス代表決定戦 - (後書き)

ハイ、ということでクラス代表決定戦の話は終わりです。

アニメではピット内でも居た場所が違っていたため、今回は千冬の絡みは無しにしておきました。

流石に、一介の学生が教師と同じ場所に居るってのは有り得ないと思っただので。

それにしても、全体的に変な感じがするのは自分だけでしょうか？

(苦笑)

何か御指摘があれば、感想覧にでも書いて頂ければ嬉しいです。

では、後書きはこれくらいにして、次話にて会いしましょう。

……そういえば、いつになったら千冬のフラグを建てられるんだろ
うなアorz

第5話・IS学園は今日も賑やか・（前書き）

オリジナルの部分を出すまでは、ただ再構成しているだけに思えてきた今日この頃orz

本当に、自分の構成力の無さには呆れます（苦笑）

では、このような拙作ではありますが、楽しんでいただけたら幸いですm（ー）m

第5話・IS学園は今日も賑やか・

力 を手に入れてから3年。

現状を良しとしない彼は、老人のところを飛び出して世界中を廻っていた。

ISの出現によって巻き起こされた争い。その中心となっていたのが、かつて空軍に所属していた人間達である。

確かに、ISは世界中の軍事的なモノを一変させたかのようなのだが、実は割りかし変わったところは多くなかったのだ。

まず、陸軍は機甲師団などは規模が縮小されたが、最後に戦争を決めるのは何時だって歩兵だ。ISは、確かに最強と言われるだけの兵器ではあるが、その火力のせいで都市の制圧などには向かないし、逆に味方に損害を与える可能性もあるので、未だに陸軍では大規模な軍縮は行われていなかった。

そして海軍もまた、ISの登場によってその存在が脅かされたかというところでもない。確かに戦艦や空母クルー、艦載機のパイロット達は冷や飯食らいになったのだろうが、海軍の一番の目的はなんとと言っても自国のシーレーンの確保であり、唯でさえ国防の必要最低限でしか配備されていないISにそんな事をさせる余裕など、どの軍隊もあるはずがなかった。

だが、空軍は違う。領空を守り何も守るものも遮る物もない大空で敵の侵入を阻み、または突破して陸海軍の支援を行い、時に爆撃によって敵を粉砕する。しかし、ISの登場によってその役目は取って代わられた。それは何故か？答えは 白騎士事件 によりたえIS一機だけでも国防は成り立ち、しかもこの世のありとあらゆる兵器を上回り、唯でさえ金のかかる航空機の必要性を完全に奪ったからだ。そのため、かつては軍の花形として、それを思うがままにかけていたその姿はISによって地に叩き落され、多くのパイロットや将官たちが解雇されることになった。

そういつた理由から、彼等は争いを起こしているのだ。ISの開
発に力を入れ、自分達を捨てた国や企業に復讐するために。彼等と
て生活があつたのだらう。言つてしまえば、彼等も篠ノ之 束の愚
行によつて生まれた被害者なのだ。

そういった背景を分かっているからこそ、彼はその者達を駆逐す
る事はしたくなかつた。けれど、巻き込まれて散つていく 命 も
認められなかつた。

だからこそ、彼はいつも話し合いから入つていった。そんな事で
はなく、もつと他の道を探そうと。

だが、それが叶つた事は一度もなかつた。そのような理想論だけ
ならまだしも、彼のような幼い者の言うことなど、誰も耳を貸さな
かつたからだ。

故に、彼はそれらを駆逐した。より多くを救うために、犠牲者で
もあつた彼等を切り捨てたのだ。

散つていく 命 が認められないと言いながら、実際は自ら 命
を奪つていく。何という矛盾。こんなことはしたくないと言つて
も、やらざるを得ない現状。それらは、幼い彼の心をドンドンと蝕
んでいった。

しかし、もう走り出してしまったのだから、彼は止まらない。日
に日に削られていく心に気付きながらも、それを無視して、彼は走
りつづけるのであつた。

クラス代表決定戦があった日から翌日。満は1人で学園への通学路を歩いていった。

理由は、箒と一夏を2人きりにするため。箒の恋路を応援すると言うより、一夏の幸せを願う。者としては、常に一緒というのは、気が引けたからだ。

まア、先日の放課後に向けられた、嫉妬の視線に負けた……というのもあるのだが。

「（いつもより少し遅かったけど、問題はなかったな）」

そんなこんなで、食堂に入る時間もズラし、通学時間もズラして箒に気を利かせていた満は、自分のクラスへと辿り着く。

今日もいつもと変わらぬ1日が始まると思っていたのだが

「何だ、この状況は……」

現実はいささか違っていた。

彼が教室に入って、まず目に入ってきたのが、一夏を挟んで睨み合う箒とセシリアの2人。その中心となっている一夏は、どうやら力尽きているようで、机へと突っ伏くしていた。更に、近くには誰も居なく、少し離れた場所で事を見守る女子達……。

この異様な光景に、流石の満もその場に立ち尽くしてしまった。

「あ、六久君おはよー」

「ああ、お早う」

だが、いつまでもそうしているワケにはいかないので、なんとか再起動を果たした満は、自らの席へと向かう。

それにより、満の登校に気付いた女子の内の1人が、気さくに挨拶をしてきた。対する満も、無愛想にならない程度に挨拶を返す。

「あら、六久さん？　今いらしたのですか？」

「ああ、今しがた登校した。お早う、オルコット」

すると、それが聞こえたのか、箒と睨み合っていたセシリアが徐々に彼に近付いて来る。

自分の名前を覚えていたことに少し驚くも、満はなんとか平静を保ちながら挨拶をすることが出来た。

「ええ、お早うございます。それと、この間は大変失礼なことを言つてしまい、申し訳ありませんでした」

「……え？」

「あら？　どうかされましたか？」

「いや、スマン。少し驚いていた」

「何か驚くことがありました？　あれは私に非があったのですから、謝罪するのは当然ですわ」

その挨拶に対し、セシリアも挨拶を返してくれたかと思うと、急に頭を下げて謝罪を述べてくる。

その行為に満は少し固まってしまっただが、セシリアは差して気にするワケでもなく、自分から謝罪の意味を口にしてくれた。

「そうか……まア、そんなに気にする必要はない。俺も大して気にしてなかったし」

「ですが……」

「全ての人を認めるってのは大変だ。人間っていうのはそんなに単純にはできていないからな。1人1人が感情を持って生きている。その中で、好きな奴嫌いな奴は必ず出てくるはずだ。大人になっただけは我慢しなくちゃいけないことなんだろうが、俺達はまだ子供だからな。今は自分が真に認められる奴を探していてもいいんじゃないか？」

それを聞いた満は、気にするなとセシリアを気遣うのだが、彼女は後ろめたいのか引き下がらない。

それを見越して、満は自分の考えをセシリアに言ってやった。押し付ける気はないが、少しでもプラスに働けばと思いながら。

「そうですか……。けど、謝罪は受け取って貰えませんか？」

「ああ、俺からしたら、その気持ちだけで十分有り難いからな」

「有り難うございます」

そんな満に対し、セシリアは尊敬の念を持ったそうな。

しかし、それでも罪悪感が残るので、セシリアは気持ちだけでも言ってくる。これ以上は言葉を掛ける意味もないと判断した満は、そんな彼女の思いを汲み取ってやった。

「改めて、六久 満だ。好きに呼んでくれて良い。宜しくな、オルコット」

「分かりましたわ。では、六久さん と呼びします。それと、私は セシリア で構いませんわ」

「了解。セシリア」

そのやり取りが終わると、和解の意を込めて満は右手を差し出し、改めて自己紹介をする。

対するセシリアも、快くそれに応じてくれた。

「では、私は一夏さんに用があるので、これにて」

そして、握っていた手を話すと、やるべきことは終わったと言わんばかりに、セシリアはそう告げて一夏の方へと向かって行き、再び簾と睨み合う形になる。

一時的にセシリアが抜けていた事により、幾分か復活を果たしていたのか、その時には一夏も顔を上げていたのだが、再度睨み合った2人に目配せをしてから頭を抱えだした。

「（ふむ、まさか……な）」

それを見て、満はある可能性を思い付くのだが、それを結論付けるにはまだ判断材料が足りなかったので、一時保留にしておく。

「皆さん、S H Rを始めますよ」

彼がそんな思考に徹している内に来ていたのだろう。いつの間に

か山田教諭が教壇の前に立っており、SHRの開始を宣言するのだが、それでも箒とセシリアの2人は気付いてないのか、睨み合いを続けていた。

その様子を見て、涙目になりながらアワアワと慌てる山田教諭。彼女の力では、この事態は収集出来ないだろう。

「（あー……、これはマズい事になるぞ）」

教室の一角で巻き起こる出来事を傍観しながら、満はそんな事を思った。

瞬間、激しい音が響いたと思うと、件の2人が頭を押さえて沈黙する。

「いつまでも何をやっとなるんだ、馬鹿者共め」

そう、織斑教諭の出席簿が火を吹いたのだ。

それにより、やっと状況に気付いた2人は、シュンとしながら自身の席へと戻る。

そんな2人を一瞥して、織斑教諭は溜め息を1つ吐くと、自らも教壇の前へと行くのであった。

「騒ぎを起こすな、織斑。面倒だ」

……途中、一夏へと出席簿を振り下ろしてから。

「では、まずは連絡事項を伝えておこう。クラス代表はオルコットが辞退したので、織斑に決定した。」

「ハア!？」

場が収まってから、織斑教諭の咳払い1つでクラス全体の空気が引き締まり、SHRが開始される。

生徒全員の顔を見回してから、1つ溜めを作ったあと、織斑教諭は一夏にとって衝撃的な発言を口にした。

勿論、それを聞いた一夏の表情は驚愕に染まり、思わず声をあげてしまう。

「何で辞退なんかしたんだ!？」

「当たり前ですわ。あんなモノ、勝利でもなんでもありませんからね。そのような中途半端なことで代表を名乗るなど、恥なだけですわ」

その後、ギヤイギヤイと言いつののだが、敗者に口無しというのか、一夏はそのまま言い負かされた。

「話をついたようだな。では、誰か異論のある者はいるか？」

「ハイッ！」

それにより落ち込む一夏を気にもせず、織斑教諭は話を続ける。すると、気合いで復活した一夏が勢い良く手を上げた。まるで、最後の希望に手を伸ばすかのように……。

しかし、最初から織斑教諭は異論を認める気なんてなかったのだろう。

「いないか。お前らは話のわかる奴らだな。それではSHRはこれまでだ。勉学に励めよ」

「……もう、ヤダ」

彼女の目には一夏の姿だけ見えてないのか、それを無視して決定してしまった。

希望を失い、机に突っ伏す一夏。

流石に、満もこれには同情を禁じ得なかった。

こうして、一夏はクラス代表という大任を負うことになるのだった。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせる」

SHRが終わり、いくつかの授業をこなした後。
現在は、ISの実習訓練の真つ最中であつた。

「よし、飛べ」

織斑教諭の言葉に従つて一夏とセシリアは飛行を始める。セシリアは流石は代表候補生というか、危なげのない動作で急上昇、遙か上空で静止した。

それに対し、一夏はまだまだ白式を扱い切れていない。ブルー・ティアーズより出力は上のはずなのだが、フラフラとしながらセシリアより幾分か遅れて上空へと辿り着いていた。

因みに、一夏に反重力力翼と流動波干渉を説明しても、思考回路がショートするだろうからと、満はそれを教えていない。

彼は自分で飛ぶイメージを掴むしかないと思つたからだ。それに、イメージだって立派な技能だ。例えば、武装展開だってイメージが重要。展開のスピードはイメージの強さに反映されるのだから。

「なんか、オルコットさん楽しそうですね」

「小娘がはしゃぎおつて」

それはともかく

閑話休題、空中ではセシリアが一夏に何やら教えていた。

その様子を見て、満はSHR前に一時保留にしておいた事項を、

確信に決定付ける。

間違はなく、セシリアは一夏に惚れていた。先日のクラス代表決定戦の時に何かあったのか、それとも今朝方にしたという和解の時に何かあったのか。

「（これが三角関係というヤツか？ まア、一夏が幸せになるなら、俺はどちらかを贖身せずに2人とも応援するがな）」

兎も角、箒にライバルが現れたということだ。

だが、一夏の幸せを願う満にとっては、どちらの想いが実ろうが関係なかった。

しかし、彼は基本的人好しなので、両方を平等に応援することになっていた。

「し、篠ノ之さん!？」

「む?」

満がそんなことを考えていると、少し離れた場所に居た山田教諭が持っていたインカムを箒が引ったくる。

セシリアが一夏と楽しげに話しているのが気に入らなかったんだろつ。

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい!」

随分とお怒りのようで、インカムへと怒鳴っていた。

これだけ分かりやすい好意に気付かない一夏は、本当に鈍感だとは言えない。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地

面から十センチだ」

そんな事など意にも介さず、織斑教諭は出席簿で簞を叩いた後、次の指示を上空の2人に与える。

それを聞いたセシリアは、頭から急降下して、地上数メートルの辺りで体を起こすようにして停止の体勢に入った。そして、完全停止を完璧に決める。

それは本当に見事なモノで、所謂お手本というやつとなった。続いて一夏が頭から急降下してくる。

「（あ、何か嫌な予感が……）」

それを見て、何故か満はそんな事を思った。

彼の考えが的中するかのごとく、一夏はセシリアのように地上数メートルで上体を起こそうとするのだが　　起き上がらなかった。そのため、急降下のために頭を下にしていたので、彼はそのままグラウンドに墜落する。体に痛みはないだろうが、恥ずかしさからか、顔を上げなかった。

確かに、これは恥ずかしい。だけど、そのままにしておくわけにもいかない。

「あー……、一夏。大丈夫か？」

「あ、ああ……。なんとか大丈夫だ」

「失敗は失敗だから仕方ないぞ。あとで穴直すの手伝ってやるから、とりあえず戻ってこい」

「……おう」

だから、満は穴へと近付いて一夏へと声を掛ける。

その隣では、いつもの凜とした表情で織斑教諭が何か言っていた。一夏は穴から戻ってくると、箒とセシリアに取り囲まれる。2人はそのまま一夏を挟んで睨み合うのだが

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ、端っこでやっている」

それを見かねた織斑教諭により、首根っこを掴まれて一夏から引き剥がされた。

その後、専用機持ちの2人は、更に武装展開をやらされるのだが、一夏はこれも上手く出来ないでいる。対するセシリアは、主力武器のライフルはすぐに展開出来るものの、近接武器にはもたついていた。

「（ふむ……、今日はイメージについて教えてやるか）」

それを見て、満は本日の一夏への教導の方針を固める。

「時間だな、本日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そんな感じで、満が今日の予定を立て終わった瞬間、チャイムが鳴り響き授業の終わりを告げた。その音が鳴り止むと、織斑教諭は一夏が作った穴を指差し、彼へと指示を出す。

「織斑教諭、俺も一夏を手伝います。SHRまでに間に合わせますから」

「……好きにしろ」

それを聞き、満は約束通り一夏を手伝おうと、織斑教諭へと提言した。

それに対し、彼女は訝るも、数秒ほど満を見据えた後、小さく許可を下ろした。

「すまねーな、満」

「いや、気にするな。俺が好きでしてるんだから」

許可が下りたところで、満は一夏と一言二言話し合ってから、穴の修繕を始める。

途中、クラスメートの女子の一部が協力を買って出てくれたのだが、それをやんわりと断り、2人はせつせと修繕を進めた。

こうして、彼等は学園での受けるべき授業を、全てこなし終えるのであった。

最後に、修繕しながらでも教えられるからと、満が一夏に武装展開のイメージについて少し助言してやったら、それを実践して上手くいったので一夏が調子にノってしまい、結局SHRには間に合わずに、2人して織斑教諭から出席簿の一撃を喰らったことを追記しておく。

「織斑君、クラス代表決定おめでとー！」

「……おめでとー！！」「……」

その日の放課後。どうやら、クラスの女子達が、一夏の代表決定を祝うためにパーティーを企画したらしく、食堂の一角を貸し切って盛大に盛り上がっていた。

主役である一夏は、クラス代表になりたかったワケではなかったため、何とも言えない表情をしていたが、この期に及んでグチグチ言うつもりはないらしく、空気を読んで周りのクラスメート達と談笑をしている。

「（いつにも増して賑やか……だな）」

そこから少し離れた場所。パーティーの一角の隅の方に、満は居た。

こういった雰囲気は初めての経験だった事もあるが、主役は一夏であるため、彼なりに気を利かしたからだ。

「あれ？　むっくーは参加しないのー？」

「む？　あー……、すまないが、むっくーとは？」

「えへへ、六久 だから むっくー なんだよー」

「そ、そうか……」

そんな満に、どこか間延びしてポワポワした声がかけられる。
その声の主は、クラスメートの 布仏 本音。一夏曰わく、
のほほんさん だそうだ。

因みに、彼女は一夏とはよく会話しているが、満は今日が初めて
だったりする。一応、一夏から名前や特徴を聞いてはいたが、これ
は彼の想像以上だったようだ。

満はこういった手合いと会話した経験は皆無であつたが、何故か
悪い気はしなかった。

それは、彼女が 癒し系 に属しているからだろう。普通、あそ
こまで語尾が間延びしていたら、不快に感じて仕方がない。

「あ、居た居た。何でこんなところに居るのかなー」

そうこうしていると、何やらカメラを持った人物 当たり前で
あるが女子 が満に近付いて来た。彼女は2年生、つまり先輩で
新聞部の黛 薫子。どうやら彼を取材しにきたようだ。

何故それが分かったかというと、のほほんさんと話している時に、
一夏やセシリアにインタビューしたり、写真を撮ったりしているの
が見えたからだ。

「君が 2人目のISを動かせる男 よね？ 話題性もあるし、何
かコメントを貰えないかな」

「そんなことを言われても、特にコレといったのは……」

カメラを向け、質問というより確認をとるための言葉をかけてきてから、彼女は満へお願いをしてくる。

それに対し、満は少し困惑しながら返事を返した。

「えー？ 同じ男である織斑君が頑張っているんだから、『俺もライバルとして負けないぜ！』とかないの？」

「……貴女は俺をどんなキャラだと思っているんですか？」

そんな満に、彼女は彼の声真似をしてるつもりなのか、低い声で何やらセリフを言う。

それを聞いた満は、若干呆れが混じった声でそう返した。

「つまらないわねエ。まア、そこらは適当に捏造するから良いか」

「……今とんでもない言葉が聞こえた気がしますか？」

「あら、大丈夫よ。あたしらの新聞のモットーは、清く正しい捏造 なのだから」

「メディアの腐敗をここに見ましたよ」

その後も、彼女は1人で色々喋るのだが、満はそれに次々とツッコミを入れていく。そのやりとりが楽しいのか、黛先輩はドンドンとテンションが上がっていくのだが、満は逆に疲れていった。

「じゃあ、君も1枚だけでも貰っておくわね」

暫くそんな事を続けていたのだが、黛先輩は徐にそう言うと、満の写真を撮ってからその場を後にする。

まるで嵐のように過ぎ去っていった彼女に、周りは呆然としていた。

そして、22時を過ぎた辺りで、パーティーはお開きとなるのであった。

「ヤバイ、迷った……。ここは何処なのよー!!」

丁度その頃、ツインテールの少女が、学園の敷地内でそんな事を叫んでいたそう。

第5話・IS学園は今日も賑やか・（後書き）

ハイ、今回はここまでです。

ヒロインである千冬の絡みが無いなんて、本当に何してるんでし
ょうねorz

日常会話での絡みがあったんですが、それを混ぜるとまた膨大な文
字数になったんで、今は閑話としてチマチマ執筆中です。

では、後書きはこれくらいにして、また次話にてお会いしましょう。

第6話・転入生はセカンド幼なじみ・（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

6月に入ってから、私生活がかなり忙しくて、この5日ほどグロッキーでしてorz

……言い訳でしかありませんね（苦笑）

では、待たせた割にあまり文字数は変わらない拙作ではありますが、楽しんでいただけたら幸いですm（ー）m

第6話・転入生はセカンド幼なじみ・

モンド・グロツソ

これは、21の国が参加しIS同士で対戦する国際大会である。いわばIS版オリンピックだ。

競技内容も純粋な兵器としての性能を競うものや、格闘部門やスピード部門、変り種だとミスISなるもの等、実に様々な競技が行われている。

これに出場できるのは、各国IS搭乗者の中から、更に厳選された国の代表選手の座を勝ち取った者のみとされている。

国家の代表選手というのは、国家の威信を背負い国民の期待を一身に受ける。その様は、近代のオリンピック選手と同じようなモノだった。

だが、オリンピックはその端を古代ギリシャにまで遡り、平和とスポーツマンシップに則ったものである。

しかし、ISは兵器だ。半ば見世物のようになってはいるが、その実各国の技術競争と軍勢力の誇示を目的とし、謂わばゲームの形を取った戦争をしているのだ。

だから、彼はそれが嫌いであつた。

確かに、幾分か平和的ではあるが、それでも単に、薄いメッキで覆い隠しているに過ぎないと思っっているから。

それ故、最初は興味を持っていなかった。だが、ある出来事により、彼はそれに注目する。

『第2回モンド・グロツソにて、前回の総合優勝者の弟が誘拐された』という情報を耳にしたからだ。

しかし、それだけなら、基本的にISが嫌いな彼は興味を持たない。問題はその後だ。

誘拐された人物の行方を、何故かドイツだけ（・・・）が迅速に探し出せ、姉であるブリュンヒルデに情報を与えていたというところ。

そこに、彼は疑問を抱いた。それもそうだろう。普通に考えて、何か裏があると捉えても可笑しくない。

だから、彼はその件を独自に調査した。一応、彼からしたらこれも表 だと言えるので、隠密に徹して。

ファントム・タスク
「亡国企業……？」

そこから辿り着く答え。 表 の闇で暗躍する組織。

それから、彼はその組織と、決して小さくはない関係を持っていたのであった。

一夏がクラス代表をすることが正式に決まってから時は流れ、4月も下旬。桜も散り、青葉へと木々が姿を変えきった日の朝のこと。

「織斑君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？ 今の時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

その頃になると、一夏はもうすっかり慣れたのか、周りに居る女子数人と、SHR前に談笑をしていた。

因みに、IS学園は転入するにはかなり条件が厳しかったりする。試験はもちろん、国の推薦がなければ、いくら能力があっても入れないのだ。そう考えたら、たとえ代表候補生であつたとしても、おいそれと転入など出来ないはずである。

何か理由があるのかと、満は一夏にほど近い場所で話を聞きながら、そんな事を考えていた。

「あら、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「このクラスに転入してくるワケではないのだろうか？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

すると、彼よりも更に一夏に近い場所に居た、1組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコットがその話に参加してくる。更に、窓側の最前列にある自分の席に行つたはずの筈まで、それに入り込んできた。

そんな様子を見て、満は内心で苦笑いを浮かべる。彼女達の態度があからさまだつたからだ。筈に至つては、セシリアが一夏の近くに居ることが気に食わなかつたのだらう。彼女の想いを知つていたら、見て分かる。

だが、当の一夏は全く気付いていない。どこまで鈍感なのだろうか。

「どんなやつなんだろうな」

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは」

「ふん……」

だから、一夏はなんとなしに件の人物のことを気にかける。すると、箒がそれに問い掛け、一夏は素直に答えた。瞬間、箒の機嫌が悪くなる。本当、分かりやす過ぎるだろうに、一夏は理由が分からないのか頭に？ を浮かべていた。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！ そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこの私、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスで私と一夏さんだけ（・・・）なのでですから」

そんな彼に気付いているのか、箒はフンと1つ鼻を鳴らしてから、不機嫌な様子を前面に押し出して一夏へと言葉をかける。更に、セシリアが箒の言葉に乗っかってきた。だけ という部分を強調して。

「……あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が（・・・）、直接頼まれたからな」

「あら、篠ノ之さんはイスラंकでしたわよね？」

「ら、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

それを聞くと、箒が反応してセシリアを睨み付け、そう言い放つのだが、セシリアも退かずに真っ向から箒の視線を受け止め、皮肉気に反論を返した。その後も、2人してギヤイギヤイと言い合っている。

因みに、クラス対抗戦で優勝すれば、食堂のデザート半年フリーパスが貰えるため、周りの女子は一夏に一心の期待を寄せていた。そのことで、2人もヒートアップしているのであると、一夏は考える。

そんな彼の心情が読めたのか、満は苦笑いを隠せなかった。

「まア、今のところ専用機を持っているのは1組と4組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ」

そんなこんなで、周りを女子に囲まれながら、一夏が思い思いの言葉をかけられていると、教室の入り口からフと声が聞こえた。

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

それに、一夏が反応する。どうやら、その声の主とは知り合いみたいだ。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

それも、かなり気心が知れているらしく、2人して親しげに話している。

その様子を見て、一夏に想いを寄せる2人は気が気でないのか、それぞれ分かりやすい反応を示していた。

耐えられなくなったのか、一夏へと2人が詰め寄ろうとした瞬間、鈴の頭が出席簿で叩かれる。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません」

それを行ったのは、ご存じ織斑教諭。いつものように鋭い目線でそのまま鈴をバツサリと口撃した。

その言葉を聞いた鈴は、先ほどの勢いはどこへやら、すごすごとドアから退く。

「またあとで来るからね！　逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

それから、ドアから教室の外側に出ると、鈴は一夏へとなにやら釘を刺していた。

が、返事を聞く前に、織斑教諭の一言で慌てて2組へと戻って行く。

「……一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で」

すると、それを皮切りに一夏へと詰め寄る箒とセシリア。更に後詰めで女子達が彼の周りに群がり、質問が集中放火。

「（あー……、ご愁傷様だな）」

もはや見慣れた感すらあるその光景を見て、満は内心で合掌した。

「席に着け、馬鹿ども」

その直後に、再び出席簿が火を吹く。

クラスの大部分の女子が、それにより頭を押さえて渋々と席に着いていった。

「（何というか、まア……。兎に角、ご苦労様です）」

これもまた見慣れた光景になりつつあるので、満は苦笑いを浮かべながら、今度は内心で織斑教諭へと労いの言葉を送る。

そして、SHRが開始され、そのまま今日の授業が始まるのであった。

因みに1限目だけで、箒とセシリアの2人は、山田教諭から注意

5回、織斑教諭から出席簿が3回与えられたことをここに追記しておく。

午前中の授業が全て消化され、今は昼休み。満は、今朝の一件で再び詰め寄られた一夏を見捨てて、1人で食堂へ赴こうとしたのだが、それが見つかってしまい目論見が潰れてしまった。

一夏の背後に居る2人の黒い雰^{オーラ}囲気を読み、彼は一夏の誘いを断ろうとするのだが、なし崩し的に話が進んでしまい、結局同行するはめになる。

お人好しの彼からしたら、2人のために身を引きたかったのだが、頼まれたら断らない（・・・）性格のせいで、こうなってしまうた。

「待ってたわよ、一夏！」

そんなこんなで、更に女子数名を加えた一団は、そろそろと食堂へと移動する。

そして、食券を買って厨房の方へ向かうとすると、件の転入生が目の前に立ちふさがった。

「まア、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

それから、食券を出してから昼食を受け取る間も2人は親しげに話しており、それは席に着いてからも変わらない。もはや、2人だけの空間と呼べるようなモノを作り出していた。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！ 一夏さん、まさかこちらの方と、つつつ……付き合ってたっしやるの!？」

それに疎外感を感じてか、箒とセシリアが多少棘のある声で訊きに行く。

他のクラスメートも、興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……」

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ!」

その言葉に鈴がなにやら反応を示すが、一夏は何の気なしに幼なじみだと言い放つ。そしたら、鈴の機嫌が明らかに悪くなった。

「（これはもう確定だな……）」

近くでそれを見ていて、満は内心で溜め息を吐きながらそんな事を思う。鈴の態度があのだ二人に似て、あからさまだったからだ。溜め息は勿論、一夏に対して。

「幼なじみ……」

昼食を口に運びながら、満が一夏に呆れていると、話を聞いているた箒が怪訝そうに呟く。

どうやら、一夏の紹介の言葉の中にあつたあるフレーズが気になっているようだ。

そんな彼女に、一夏は少ばかり言葉を考えてから、ある程度の説明をする。

その中であつた、ファースト幼なじみとセカンド幼なじみという言葉に、箒はなにやら優越感を感じていたようだ。満は内心でツツコミを入れていた。わざわざ英語に直す必要はあるのかと。

まア、空気を読んでそれを口にすることはなかったが。

それから、1人蔑ろにされたセシリアが会話に割り込み、鈴が自信満々に自分は強いと発言した後、怒りに震える箒とセシリアを気にもせず、彼女は一夏へとESの訓練について話を持ち掛ける。それに対し、箒とセシリアは当たり前で噛み付くのだが、とうの鈴はどこ吹く風だ。

それから、一夏の周りはギヤイギヤと姦しくなっていくのだが、中心である一夏は何か別のことを考えているのか、その箸が止まっ

ている。

「御馳走様……」

「え？」

そんな彼等を余所に、満は昼食を完食すると、そう言ってお盆を持ち上げた。

その声が聞こえたのか、思考の海から戻ってきた一夏が、間拔けな声をあげて立ち上がった満へ視線を向ける。

「休憩時間は有限なんだ。早くしないと、織斑教諭からお咎めが来るぞ」

一夏がそうだったためか、彼の周りに居た3人だけでなく、他の女子達も満へと視線を向けた。

それを一瞥すると、満は食堂に設けられている時計を指差しながらそう言い放つ。

因みに、彼女達は話に夢中だったためか、殆ど昼食を食べていない。

「なアツ！？ お前だけズルいぞ！」

「そんなことを言われても知らん。俺はお咎めを受けたくないから、先に行かせてもらっぞ」

それに対し、いち早く一夏が反応するが、満はバツサリと切り捨てた。彼は基本的人好しであるが、流石にそこまで面倒はみきれない。

スタスタとその場を離れていく最中、背後では慌てて食事を再開

する気配を感じる。織斑教諭のお咎めがキツいということは、満もこれまでの学園生活から分かっていたが、目にしていなくても、一夏達の様子が頭に思い浮かんできたので、苦笑いを浮かべた。

こうして、昼休みは終わりを告げるのだった。

余談だが、結局一夏達は間に合わず、彼を含む十数名に対して、織斑教諭の出席簿が火を吹いたことを、ここに追記しておく。

その日の授業が全て終わった放課後。

あいも変わらず、満は一夏に勉強を教えてあげていた。

近くには、箒とセシリアも居る。本来ならば、彼女達はある程度の知識があるため、勉強など必要ないのだが、少しでも一夏の傍に居たいと適当な理由をでっち上げて参加しているのだ。

無論、満はそのことに気付いているのだが、言ったところで何かが変わるワケでもないの、何も言わないでいる。

「じゃあ、ここはこうなるのか？」

「いや、その考え方も正しいが、ここをこうしたら、もっと楽になるぞ」

彼がそんなことを考えていると、一夏から質問が投げかけられた。それを満は、複数思考 によって受け答えする。

その答えは的確で、教えを受けている一夏は勿論のこと、箒やセシリアも感嘆の声をあげていた。

「……じゃあ、切りも良いし、今日はここまでにしておくか」

「あれ？ 今日はいつもとより早いんだな」

周りのことも気にしながらだが、淡々と授業を進めていた満は、一夏の言つとおりいつもより早めにそれを切り上げる。

「ああ、これである程度の基礎知識は教えて終わったからな。後は、それを定着させるだけだ。それに、お前はこれから特訓もしなければならぬし」

それを不思議に思つて、一夏が尋ねてくるのだが、満は飄々とそれに答えた。

実は、箒やセシリアのことを思つてのことなのだが、当たり前でそれを口にしたりはしない。

「そうか。じゃあ、これからアリーナに……」

「ストップ。特訓について、少し提案があるんだが、良いか？」

満の答えを聞き、納得のいった顔を見せた一夏は、さっそく本日使えるアリーナへ向かおうとするのだが、それを遮るように満は声

をかけた。

そのため、一夏は立ち上がろうとしていたのを一旦中断し、席に再び着いてから満へと向き直る。

「お前、クラス代表決定戦が終わってから、箒ちゃんと剣道の訓練はしているのか？」

「いや、あれからは全く」

「そうか……。なら、これからした方が良い。今からでもな」

「は？ 何でだよ。クラス対抗戦もあるんだし、ISの訓練を積んだ方が良くないか？」

「戯け、俺達の立場を忘れたのか？ いくらIS学園（こい）がいかなる干渉を受けないとしても、それは完璧じゃあない。不測の事態に備える意味でも、生身での訓練は必要だ」

「でも、俺は専用機を持つてるぜ」

「ハア……。お前は常にISを展開しておくのか？ それに、生身の訓練だからって、ISに全く関係がないワケでもないだろ。そこからでも、十分ISの戦闘技術に発展出来る」

「それは……。」

それから、軽く問答が繰り返られるのだが、満の言うことも一理あるためか、一夏は何も言い返せなくなった。

「……まア、それも1つの考え方だと思って、頭の隅にでも置いと

いてくれ。嫌々やってたら、意味がないしな」

「いや、お前の言うことは最もだ。サンキューな、満！」

それを見計らい、満は最後にそう言い放つ。

すると、一夏は表情を引き締めて満の考えに賛同してきた。

「と言うワケで、箒ちゃん。悪いけど、申請してきた打鉄の使用はキャンセルして、剣道の訓練に付き合ってやってくれないか？」

「は？ いや……、まア、私は構わんが……」

「サンキュー、箒！」

急にやる気を出し、テンションが上がっている一夏を少しばかり見やった後、満は箒へと視線を移し、勝手に申し訳ないがと付け加えてから1つお願いをする。

対する箒は、先の問答で少し呆けていたが、声をかけられたことによつて再起動を果たし、曖昧ではあるが了承の意を示してくれた。

「後、ISの訓練も必要なことには変わらないからな。アリーナの使用時間を考えると……、剣道は1時間くらいにしておけよ。それから、セシリアにISの訓練を付き合ってもらえ」

「分かった！ そうと決まったら行こうぜ、箒！」

「あ、ああ！」

そして、話が纏まったのを確認すると、一夏は箒へと声をかけてから、勢い良く教室を後にする。

それに続き、幕も若干展開について行けてないものの、なんとかその後を續いていった。

「……」

「何してるんだ、セシリア。お前も行かないのか？」

「……はっ！？ いえ、私は……」

「訓練に参加しなくても、見るくらいは別に良いだろ？ それに、見るのも立派な訓練だ」

「……はい！」

それから、これまでの展開に全く付いて来れず、固まっていたセシリアへ、満は声をかける。

それによりセシリアは復活するのだが、どこか寂しそうに言葉を返してきた。

その中に込められた意味を満は察してやり、穏やかな声色でそつと彼女の背中を押してあげる。

すると、セシリアはパツと表情を明るくさせ、急いで一夏達の後を追って行った。

「さて、じゃあ俺は俺のやるべきことをするか」

すぐに見えなくなった後ろ姿に、満は苦笑いを浮かべると、そう呟いてから勉強道具一式を鞆へと詰め込み、立ち上がる。そして、彼は職員室へと向かうのであった。

あれから夜も更け、夕食も食べ終わった満は、1人で寮の廊下を歩いていた。

「（ふむ……、今日もなかなか良かったな……）」

その道中、放課後に職員室まで行った後にあった出来事を思い出しながら……。

「む？」

そんなこんなで歩いていると、吹き飛ばのようにドアが開いて1人の女子が飛び出してきた。出てきた時と同じように激しい音をたててドアを閉めると、ボストンバッグを片手にすごい勢いで彼の方に走ってくる。

「どいてー!!」

「おっ」

その怒鳴り声に従って、満は壁に寄った。そんな彼を一瞥もせず
に、その女子は走り去っていく。どすどすと足音が聞こえてくるよ
うな力強さだ。

「（今は……、転校生の凰だな。一体、なにがあっただろうか。
……泣いてた、よな）」

一筋の涙。それが彼女の瞳から零れ落ちていた。怒鳴り声だと満
は思ったが、実際には涙声だったのかもしれない。躍動的だったツ
インテールも元気なくシュンとしていた。足音の力強さも今考えれ
ば、子供が地団太を踏んでいたように思える。

彼女の今の心を、状況が理解出来ていない満なんかが分かるはず
もない。

だが、他人が涙を流すのを放っておけないのは……無意識なんだ
ろう。

「話くらい聞いてみるか」

彼女が出て来た部屋を見やり、満はその部屋の前に行って、ノッ
クをした後ドアノブを握り、ドアを開けた。そして、部屋を覗く。
すると、そこには呆然とした顔で突っ立っている男子生徒が居た。

「一夏……桜が散ったばかりなのにもう紅葉か？」

「あ。満……」

「六久だと？」

頬にぱつちりとビンタのあとが残っている一夏を見て、満はから

かいを含めた口調で話し掛ける。

それに気付き、一夏は彼の方へと視線を向けた。

その隣には着物のような寝巻を着た筈の姿もある。

それを見て、満はなんとなく話が読めてきた。

「すぐそこで鳳とすれ違つてな。ちよつと気になったから来てみたんだ。また厄介事みたいだな」

「ははは……でも、意味がわからないんだ。いきなり筈と部屋をチエンジさせるとか、昔の約束は覚えているかとか、なんとか思い出して言つたら……何が気に入らなかったのか、このありさまだ」

自分の頬を指差して笑いながら一夏はそう言う。

見るからに痛そうだが、満はそれには触れなかった。

「さっきすれ違った時、鳳は泣いてた。あれは悔しかったんじゃないかな、悲しくて泣いたんだと思う。確証なんてないがな」

「……そうなのか？」

「そうなんだよ」

一夏の頬の紅葉に関してはスルーして、満は本題に入る。

「で、だ。鳳が泣いていたのは明らかにお前との会話が原因だと俺は考えている……。それ以外ありえないっていうのは、お前も分かるだろ？」

「……ああ。理由がわからないのが厳しいとこだけだな」

一夏も馬鹿じゃない。自分が原因になっていると知って、自分から謝ろうという気持ちはあるみたいだ。

「ポイントは 約束 っていうのだろうな。結局なんだったんだ？」

「えっと『鈴の料理の腕が上がったら毎日俺に酢豚を奢ってくれる』っていう奴なんだ。それを言ったら……こっ、バシーンと」

「……ハア」

それから軽く質問をして、話の核心へと迫って行った後、最後に一夏が言った言葉を耳にして、満は重い溜め息を吐く。

それもそうだろう。日本的な言葉に言い換えれば、毎日私の味噌汁を云々 といったことと同義なのにもかかわらず、一夏は全く気付いていないのだから。

満は内心で、IS学園の一夏ファンの女子達に同情した。

「それだ。絶対になんか違うぞ。もっと良く考えてみる」

「そんなこと言われてもなァ……」

それから、満は何とか矯正しようと言葉をかけ、一夏は呻りながら真剣に考え始めるが、どうしても答えに辿り着けない。

「どうしてもわからないなら、本人に聞くしかない。しっかり謝ってから聞けよ？」

「……だな。ちゃんとしたタイミングがあれば聞いてみるよ」

それを見かねて、満は一夏へ妥協案を提示した。

それに一夏も同意する。

「よし……じゃあ、俺は帰る。箒ちゃんも巻き込まれて大変だろうが、一夏を支えてやってやれ。色々と思うところはあるかもしれないがな」

「あ、ああ」

それから、満は苦笑いを浮かべながら箒へとそう言い、彼等の部屋を後にする。

「（泣くほど悲しかったってことは、一夏と交わした約束がそれだけ嵐にとって大切だったってことだ。自分と一夏を繋ぐ他人には邪魔されない一本の線……だからこそ、一夏には憶えていて欲しかったんだろうな……）」

そして、自身の部屋への帰り道（？）の途中、鈴の涙の理由について考えた。

そこから辿り着いた答え。そうだった繋がり（……）を持てる一夏達を、満は少し羨ましく思えた。

その後、一夏が嵐に口論の末「貧乳」と言ってしまったことを満は聞く。

思わず溜め息を吐いた彼はおかしくないだろう。

こうして結局、2人の仲が修復されないまま、クラス対抗戦は始まってしまっただった。

第6話・転入生はセカンド幼なじみ・（後書き）

ハイ、今回はここまでです。

これを読んで気付かれた方も居られると思いますが、この作品の一夏はちよつと改造されます。

と言つても、原作より少し強くなるぐらいですがね。

後、この話で自分がストックしている文章の底が見えてきてしまったので、次話あたりでアンケートをとりたいと思います。

では、後書きはこれくらいにして、次話にてまたお会いしましょう

m (— —) m

第7話 クラス対抗戦・顕現する力 - (前書き)

またまた更新が遅くなって申し訳ありませんorz

本当に忙し過ぎて、ストックしてある文章を弄る暇すらないんです

(苦笑)

と、言い訳ばかりの作者が書く拙作ではありますが、今回も楽しんで頂けたら幸いですm(_____)m

最後に、後書きに簡単なアンケートがありますので、一応目を通して置いて下さい。

第7話 クラス対抗戦・顕現する力 -

目の前の対象を、撃つ、斬る、穿つ、壊す。

どれだけやりたくない事だとしても、そうしなければならぬ状況だから、彼は心を削りながらその作業をこなしていく。

たった1人の戦場。どうしようもないはずの数の差。それでも彼は、不敗を貫いた。

表 では洗練された元軍人を。裏 ではISや、彼と同じような力を持った者達を、数え切れないほど打ち破ってきた。

『蒼き鎧を光らせて、奴は静かにやって来る』

いつからか、彼が関わる 裏 の戦場に流れだした噂である。

死 を振り撒く死に神。戦闘を重ねるにつれ、彼はそのような存在になっていた。

それでも彼は止まらない。自らの意志を貫く為に、命 を守るただ1つの機械 へと成り果ていく。

そして、いつしか 闇 に生きる人々は、たった1人で戦い続ける彼のことを、こう言うようになった。

1人で1個大隊にも勝る戦力。 虐殺の兵隊 と……。

暦は5月。世間では、GWなる長期休暇が終わった頃。

その時期に、IS学園では1つのイベントが催されていた。

それはクラス対抗戦。

満が所属する1年1組の代表である一夏も、当然それに参加している。当日に発表された対戦表を見ると、第2アリーナ第1試合は、なんと一夏vs鈴という2人の今の関係を知る者からしたら、何者かの作為すら感じられる組み合わせになっていた。

噂の新入生同士の試合とあって、アリーナは全席満席。それどころか、通路ですら立ち見の生徒で覆い尽くされている。

そんな中、その立ち見の生徒達の中に、満は居た。周りは女子ばかりなので、一際目立ちそうだったが、彼は自身の持つ様々なスキルを無駄に使い、余り目立たなくしている。

因みに、箒やセシリアからはピットで。他のクラスメート達からは隣の席で観戦しないかと誘われたが、彼はそれをやんわりと断っていた。なんとなく、1人で観戦したい気分だったからだ。

思えば、それは虫の知らせだったのかもしれない。膨大なまでの戦闘や、陰謀・策謀に関わって来た彼だからこそ、無意識に感じられるほどの。

「（……第3世代の シェンロン 甲龍 か。中国の最新鋭IS……。一夏は各国の最新鋭を相手にしなければならぬ運命にでもあるのか？）」

それはともかく
閑話休題、アリーナ内に視線を向けると、既に空へと上がっていた鈴のISが目に入った。

それを見て、満は内心でそんなことを考える。クラス代表決定戦

でも、イギリスの最新鋭である ブルー・ティアーズ と闘ったことを考えると、強ち間違っではないかもしれない。

そんなこんなで、会場は未だに姿を現さない一夏を、今か今かと待ちわびているのであった。

鈴から遅れて数分。一夏もアリーナ内へと姿を現した。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

その瞬間、場内にアナウンスが流れ、それに促される形で2人は対峙する。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

距離にしておよそ5メートル。それくらいの間合いで、2人は開
ブンチャンネル
放回線にて話し出した。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる（……………）」

軽く牽制の言葉を交わした後、鈴は脅してもなんでもなく、本気だといった感じの声色で、一夏に警告じみたことを告げる。

それは間違っではないことだ。ISは兵器なのだから、使用者
ユーザー
に危険が伴うのは至極当然。

なのに、使用者に絶対の安全性を謳っているとは、正気を疑う。確かに、他の現行兵器よりは幾分か安全ではあるが、まるでISのみが優れていると刷り込まれているようだ。

『それでは両者、試合を開始してください』

瞬間、鈴の警告？が告げられたのが合図になったかのように、ア
ナウンスと試合開始のブザーが辺りに鳴り響く。

「でりゃあー！」

それと同時に、2人は互いの武装を展開し、一気に距離を詰めてぶつかり合った。

初手は互いに上段からの振り下ろし、音を立てしのぎを削る二つの刃。形状から言えば通常の日本刀をISサイズにスケールアップしたような雪片型式に対し、甲龍の双天牙月 は馬鹿げた、
といていいほどに巨大な青竜刀 というにはあまりにもかけ離れた形状ではあるが だ。両端に刃の付いた、というより刃に持ち手の付いたそれは、容易く相手の獲物を折ってしまいそうだが、

雪片式型 難なく耐える。

がっちり固定されたかのような拮抗状態、一夏は刃をずらし、滑らせるようにして 双天牙月 をいなした。

巨大な獲物を揮う 甲龍 の力が真下に振るわれ、宙に浮いているために空を斬る。それでも鈴は体勢を崩さなかったが、それを薙ぎ払うように一夏が放つ、返す刀での横薙ぎの一撃。

それはまさに、箒との剣道の特訓による成果であった。

もし、一夏があのまま剣道から離れた帰宅部であつたら、ここまですり雪片式型 を扱えなかっただろう。たかが数日ではあつたが、もともと素質があつたのか、それとも何か他に理由があるのか。兎も角、近接での戦闘はなかなか様になっていた。

対する鈴も、さすが代表候補生といったところだろう。

横薙ぎに來た一夏の―撃を、片方の刃で受け流し、そのまま直ぐに反撃に出て來たのだ。

縦横斜めと、自在に武器を操りながら、鈴は一夏を攻め立てる。

それに対し、一夏もISの訓練にてセシリアに習った三次元躍動クロス・グリッド旋回リターンを駆使し、鈴の攻撃を悉く捌いていった。

ただ、スピードにおいて圧倒的に有利であるはずの 白式 は、今のところ 甲龍 の二刀によって、そのアドバンテージを消されている。

重さ に比を置いた鈴の剣と、 迅さ（はやさ） に比を置いた一夏の剣。

迅さ と 重さ 。互いに使う術理が違うが故に、その剣舞は激しさを増しながらも噛み合ってしまった。

最新鋭技術の固まりであるはずのIS同士の戦いでありながら、その戦いは原始的な斬り合いのみ。

大空を制し、重力に逆らえる機動性がありながらも、両者はアリアルナ中央にてひたすらに斬り結ぶ。

互いに一歩も引かぬのは意地故にか。絶え間なき剣舞は大地を抉り空を斬り裂いた。

それがどれだけ続いたのだろうか。未だ互角に見えていた試合であつたが、互いに一度距離をおいて、仕切り直しの状況になつた時、徐に 甲龍 の非固定部位の中心の宝玉に光が灯る。

一夏はそれを、何がしかの遠距離兵装発射の前兆と判断した。

これまで拮抗していたかのように見えるこの試合、しかしそれは鈴が 甲龍 に搭載されているであろう射撃兵装を一切使わず、一夏と同じ土俵に立ち続けていたからだ。

それは一夏とて重々承知している。ならばこそ、そのような前兆を気につけぬはずもなかつた。

だが、その警戒をあざ笑うかのような、見えざる一撃が彼へと与えられる。

「ぐあつ！　なんだ！？」

警戒していたはずの一夏を突如として襲つた一撃。あれほど警戒していたにもかかわらず、射線や火点は少しも見えなかつた。まるで殴り飛ばされたかのような衝撃によつて暗闇に傾きかけた意識を慌てて取り戻し、一夏は先の一撃の正体を考察しようとする。

しかし、悲しきかな。幾ら満に教えてもらつていても、一夏のIS 関連の知識はまだ基礎の段階。各国が躍起になつて開発している、独自の特殊極まりない兵器の正体に思い至れるわけがなかつた。

「今のはジャブだからね」

そんな愚考の合間にも、不可視の一撃は放たれ続ける。まるで地雷が爆発したかのように突然爆発する大地。それだけでなく、不可視の一撃が至近を通り過ぎたのだろうか、顔面近くの空気が抉られるような感触さえあつた。

そして、その不可視の『拳』により、一夏は地表へと打ち付けられる。

それは、試合前に鈴が警告した通り、白式のシールドバリアを貫通して、一夏本人へとダメージを与えていた。

「なんだあれは……？」

第2アリーナ一夏側のピット内で、リアルタイムモニターを見ていた箒がそう呟く。

「衝撃砲 ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。私のブルー・ティアーズと同じ、第3世代型兵器ですわ」

それに答えたのは、同じくモニターを見つめるセシリアだったが、箒はその説明を途中から聞いていなかった。モニターには、苦戦する一夏が映し出されている。

「（一夏……）」

一夏がダメージを受けるたび、箒の胸はズキリと痛んだ。
セシリアの時よりも激しい戦闘を目の当たりにして、彼女は一夏の勝利よりもただただ無事を願うのみになっていた。

そんな箒の願いとは裏腹に、鈴の攻撃は更に激しさを増す。

「よくかわすじゃない。衝撃砲 龍砲 は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

全くもってその通りだった。砲弾だけならまだしも、砲身まで目に見えないのは一夏にはかなりキツイ。

しかも、この衝撃砲は砲身斜角がほぼ制限無しで撃てるようなので、真上真下は勿論のこと、真後ろにまで展開して撃ってきた。

一夏は、ISのハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせていたが、それでは撃たれてから分かるようなモノだったので、遅すぎる。

唯一の救いは、射線が直線にしか来ないことだが、それでも操縦者の鈴の能力が高く、無制限機動と全方位への軸反転などの基礎の全てを高いレベルで習得しているため、一夏はただかわすだけで精一杯になっていた。

「（どこかで先手を打たなくては……）」

展開から砲撃までのタイムラグを見破り、なんとかそれをかわしてはいるものの、段々とジリ貧になっていく戦況の中、一夏はそんなことを考えながら、先週のことを思い出す。

箒との剣道の訓練には慣れてきたものの、セシリアとのISの訓練ではなかなか成果が感じられなかった時だ。

距離をとられて良いように弄ばれたため、一夏は遠距離での攻撃手段を欲しがっていた。

すると、徐に現れた満に遠距離兵装　主に銃器について　のノウハウを聞かされた上で、お前にそんな器用な事が出来るのかと言われる。

それに、セシリア戦の後に織斑教諭から聞いていたが、白式
バズロケットは拡張領域に空いているはずの処理を、全て基本装備である　雪片に振るっている完全近接特化型だ。

どっちにしろこのままいくしかない、一夏は落ち込んだ。

そんな彼に、満はまた話し掛ける。ならば、その1つを極めてみせろ……と。

更に、彼はセシリアとの訓練の必要性も説明してくれた。

確かに、一夏は遠距離での攻撃手段は無いが、それでもそういった相手に対しての戦い方の経験を積めるから、この訓練は必要だそう。

それを聞き、ISの訓練に自信を無くしていた一夏は、再びその闘志に火を灯す。

それから、急加速急停止といった基礎移動技能の訓練を一夏は

徹底して行つた。

更に、近接を極めるならと、箒が再び 打鉄 の使用許可を申請し、ISの訓練にも参加してきた。

その時に、剣道だけでなくISにまで関わってきたため、セシリアと一悶着あつたが、そこはセシリアとの訓練時間の方を長くすることと落ち着いた。

「……ハハッ」

なぜ一悶着あつたか、朴念仁である一夏は理解していなかったが、その時の光景を思い出して、思わず笑いを零す。

「（あとは……気持ちで負けないってくらいだな）」

そして、その後に積んだ訓練のことも思い出し、内心で決意を固めた。

普通に考えて、見るからにその実力差は歴然としている。得意であるはずの近接にまで、持つて行かせてもらえてないからだ。

しかも、鈴はセシリアと違って、戦闘に入ると冷静になるタイプ。そういう人間は基本的に強い。

そんな相手に、実力差を 何か で埋めるなら、それは心しか有り得ない。気持ちだけは何にも負けないという、そんな意志を抱いて、彼は鈴へと視線を向けた。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

真剣に見つめる一夏。そんな彼の気迫に圧されたのか、鈴は曖昧な表情を浮かべる。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

それを隠すように、鈴はまくし立てたかと思うと、両刃青竜刀を一回転させて構え直した。

それから、彼女は再び衝撃砲を放とうとするのだが、その砲火が吹く前に一夏は加速姿勢に入り、イグニッション・ブースト 瞬時加速 を行使する。

これは、ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出し、その際に得られる慣性エネルギーを使って爆発的に加速する技能だ。出しどころさえ間違えなければ、代表候補生クラスとも渡り合える。

この奇襲は1回限りだ。失敗すれば、後は衝撃砲でジワジワとなぶられるだけ。

それを分かっているからこそ、一夏は同時に 雪片式型 を振りかざし、単一仕様能力である 零落白夜 を発動させた。

そして、交錯する2機。一夏の刃が鈴に届きそうになった瞬間……

突然アリーナ全体に大きな衝撃が走り、ステージ中央に ナニカ が降ってきた。

時間は少し遡り、鈴の衝撃砲に一夏が苦戦している頃。

「（何をやってるんだ……）」

その光景を見て、満は一夏の動き1つ1つにヤキモキしていた。

「（たとえ不可視だからといって、直線にしか来ないなら、幾らでも対応策はあるぞ）」

それは、自分ならどう対応するかといった考えから、こぼれ落ちてきた感情である。

確かに、砲撃自体のスピードはなかなか早い。砲身も不可視である。射角は無制限。でも、だからといって、死角がないワケではない。

たとえ真後ろにも撃てようと、その砲撃は相手から自分への直線上にしか来ないのだから、展開から砲撃までのタイムラグを使つて容易に近付けるはずだ。鈴が動きを読むことも考えられるが、そこから辺の駆け引きはセシリアとの模擬戦で培えているはずである。

なのに、一夏はタイムラグを見破ったものの、それを回避にしか使っていなかった。

それが満を悶々とさせる。

「（む……、イグニッション・フースト瞬時加速か……）」

そんな時間が暫く続いていたが、不意に一夏が起こした行動に、

満はやっと胸の中のモヤモヤが晴れた気がした。少なくとも、悪手ではなかったからだ。

今までずっと圧され気味だった一夏であったが、雪片の特性を考えればこれで少なくともイーブンに近い状態へと持っていけるだろう。そうなれば、これからの展開もまた違ってくるかもしれない。

満がそんなことを考えているうちに、一夏の刃は鈴の目の前まで迫っていた。

だが、それが届くことはない。

「な……何だ？」

何故なら、いきなりアリーナの遮断シールドを貫き、ナニカがステージへと乱入してきたからだ。

「（……あれは？）」

もくもくと煙が上がっているステージ中央。そこに居るナニカを、満はその異常な視力で捉えていた。

煙の間から見える姿はまさに異形。深い灰色をしたそれは、手が異常に長く爪先より下まで伸びている。しかも、首というモノがない。肩と頭が一体化しているような形をしていて、更に全身装甲フルスキンであった。

「む！？」

満がそこまでナニカの容姿を確認すると、徐にアリーナの遮断シールドが再びおろされる。しかも、ご丁寧にステージは見えないようにされているという特典付きで。

瞬間、満は行動に移った。現状、何かが起こっているのは分かり

きつたことだったからだ。

間一髪で、観客席と通路を繋ぐドアが閉まりきる前に、満は身体を滑り込ませる。無駄にスキルを使っていたため、誰にも気付かれず、見咎められもしていなかった。

それから、休む暇もなく立ち上がると、彼は次々とロックされる前にドアを潜り抜けて行く。

「使いたくはなかったんだが……、仕方がない」

途中、彼はそう呟くと胸元から何かを取り出した。それは、Xの形をした蒼いネックレスであった。

そんなモノで何をするのかと思われた瞬間、満がそれを握り締めると、空中にモニターのようなモノが映し出される。そのモニターの中にある鍵盤のようなモノを彼が叩いていくと、今度は目の前にステージの現状の様子が映し出された。

そう、これが満の持つ力の一端。今この瞬間、彼はIS学園の監視モニターと自身の力を同期させていたのだ。

その力は凄まじく、それに彼の技術が合わさって、誰もがそれに気付けないでいた。それは、IS学園の電子機器全て（……・・）と、どこかで様子を窺っている篠ノ之束も例外ではない。

「（……何が目的だ？）」

人に見付からないよう、辺りを気にしながら走り、モニターを見ていた満は映し出される侵入者に思考を傾ける。

見る限り、侵入者の目的はIS学園への攻撃ではなさそうだった。もしそれが目的なら、今こうして一夏達とは戦わないで、なりふり構わず学園の施設へとあのビーム兵器を放っていただろう。

教師陣に捕縛されるのを忌避したとも考えられるが、それならば一夏達と闘う理由はないはずだし、そもそも捕縛される可能性を考

慮していたら単騎で突っ込んで来ることなんてしないはずだ。

「（まさか……）」

それに、戦闘の様子を見てみると、なにやら引つ掛かる部分が見受けられる。

そこから、1つの考えに至った満は、自身の力に侵入者の生体反応を探らせた。

「（やはり……か）」

返って来た答えは、『生体反応無し』。つまり、アレは無人機ということである。それにより、満の頭の中には4つの可能性が浮かび上がった。

「（Dr・ケイン達はまず有り得ない。あの人達がこんな事をするはずがない……。アイツ等……も有り得ないな。もし送ってくるなら、こんな完成度の低い（……）ヤツではなく、少なくとも学園に甚大な被害を与えられるようなモノのはずだ。じゃあ、他に無人機を造れるような奴が居るのか？ それとも、まさか篠ノ之束が送ってきたのか？」

その4つの中から考察しながらも、満は足を止めずに走り続ける。彼の頭の中には、学園の構造全て（……）が入っていたため、思考に耽りながらも、誰にも見られずに目的の場所へと辿り着いた。途中、人には見付からないとはいえ、監視カメラまでも誤魔化せるワケではなかったので、力を使ってハッキングをし、自身が通る道にあるそれら全てを姿が撮される前に壊して行きながら。

無論、それすら誰にも気付かれていない辺り、彼の凄さが窺える。

「まア、誰の差し金から知らないが、一夏は俺に初めて出来た友人だからな……。何かされるのを黙って見ていられる程、俺もまだ人を捨ててはいらないらしい……」

満の辿り着いた場所は、ステージ内を見ることが出来て、尚且つ見咎める人が誰も居ない所であつた。まア、このように緊急事態のため、人は全て対応に追われているのだろうが。

それはともかく
閑話休題、そこに辿り着いた彼は、ステージで一夏達と戦闘を繰り広げている無人機を見やると、一言そう呟いて、腕を顔の前で×の字に交差させた。

そして、それを振り抜いて腰溜めに持っていくと、彼の姿が瞬間的に変わる。

それは蒼い衣であつた。顔は見えるものの、額から頭部にかけて全てを覆うフルヘルメット。肩や身体、脚に展開されている蒼いアーマー。背にはこれまた蒼い、羽を思わせるような非固定浮遊部位。アンロック・ユニット

その全てがシャープで、全身像を見るとISよりも一回りから二回りほど小さく見える。

「シフト・ファースト……。モードワン」

それから、満が何か呟くと、更にその姿が変わっていった。

蒼だけでなく、白や紅もそのアーマーに混じっていたのだ。

「この行動は……、間違いなんかじゃない……」

姿の変化が終わると、彼は右腕を変化させ武装し、ステージに居る無人機へと狙いを定める。

すると、ジェット機が動き出す前に聞こえるような音が、その右腕から聞こえてきた。

「この力は、お前なんかより遥かに強いぞ」

そして、誰に言うのでもなくそう言い放つと、無人機に対して攻撃を放つ。

瞬間、ISを超える力の一端が、この世界へと顕現した。

「くっ……！」

一撃必殺の間合い。だが、一夏の斬撃はスルリとかわされてしまった。そんなやりとりがもう4回も繰り返されていた。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

それに焦れた鈴が、一夏へと罵声を浴びせるのだが、言われた一夏はたまったもんじゃない。

普通ならかわせるはずのない速度と角度で攻撃しているのに、敵は全身に付けたスラスタで尋常じゃない回避をしてのけるのだ。零距离から離脱するのに、1秒とからない。

しかも、どれだけ鈴が注意を引いていても、一夏の攻撃には必ず反応して、回避行動を優先する。その動きは機械じみていて、明らかにおかしかった。

「なあ……鈴、あいつの動き、何かおかしくないか？」

「はあ！？　こんなときに、いきなり何言ってるのよ！！」

「いや、あのIS……徹底的に同じ行動しかとらないよな」

「確かにそうだけど……」

ここまできて、一夏は疑念を抱く。

敵ISの行動パターンは単純だった。接近戦では多数のスラスタによる高い機動性でよけ、敵機が離れたところにいるのならばビームを放つ。確かに、シンプルな行動パターン故に隙は少ないが、あまりにも同じ行動を取り過ぎていた。

「アレって本当に人が乗ってるのか？」

「は？　人が乗らなきゃISは動かないわよ！　無人機なんてまだどこも実用化していないから、そんなの有り得ないわ！！」

「そうなのか？」

「そうよ！ それに、無人機だったら何だって言うの？ まさか、勝てるとも言っワケ？」

「ああ。人が乗ってないなら（・・・・・・・・）容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

だからこそ、一夏は1つの可能性に辿り着く。それは、凝り固まってない素人故の考えであつたが、皮肉にも正解だつた。

そして、その仮説が正しいのであれば、敵に勝てると一夏は鈴に言い切る。

雪片式型 の威力は、零落白夜 も含めて恐らく高すぎるのだ。訓練や学内対戦でおいそれと全力を使うワケにはいかないが、無人機が相手なら最悪の事態を想定しなくても済む。故に零れ出た言葉だ。

「全力も何も、その攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対に有り得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましようか」

しかし、先程までのやりとりを見ていたら、全力を出そうが関係なさそうなので、鈴が事実をそのままに口にした。

それを聞いても、一夏は何か策があるのか攻撃を当てると言い切り、鈴は一夏のそれに乗ることにする。

戦闘が始まる前、制止の言葉が2人にかけられたのだが、周りへの被害を考えてあえてそれを無視した。今考えれば、愚かだったのかもしれない。命 のやりとり。それを甘く見過ぎていた節があ

った。

だが、相手が無人機となれば話は変わってくる。自分達の 命 が危ないのは変わらないが、少なくとも相手の 命 を奪うことはしなくても良い。

樂觀視し過ぎている感じもするが、格好付けて闘い始めたのだから、生きて帰らねばただの馬鹿だ。

「俺が合図したら、アイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ 良いけど、当たらないわよ？」

「良いんだよ、当たらなくても」

方針が決まったところで、2人は作戦を話し合う。

一夏からもたらされた言葉に、鈴は少しばかり怪訝な表情を浮かべるも、策があるのだろうと思い、それを実行することにした。

「じゃあ、早速」

『一夏あつー！』

作戦も決まり、一夏が再び突撃姿勢に入ろうとした瞬間、アリーナのスピーカーから大声が響く。甲高いハウリングが尾を引くその声は、箒のモノだった。

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

再び響き渡る大声。彼女は一夏のことか心配だったのだろう。肩で息をしているその表情は、怒っているような焦っているような、

不思議な様相をしていた。

「……」

いきなり起こったその出来事に、一夏は思わず固まってしまった。
しかし、それはいけなかった。

気が付けば、敵ISは箒に興味を持ったようで、砲口のついた腕を彼女の方へと向けていた。

「箒、逃げ」

その光景を見て、一夏は箒へと逃げるように言おうとするが、今からでは確実に間に合わない。

「鈴、やれ！」

「わ、分かったわよ！」

ならば、自分が助けるしかない、一夏は突撃姿勢に移行、瞬時に加速した。

一夏からのいきなり合図に戸惑うものの、鈴も事前に聞いた作戦通りに、両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える。
最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。
そして、その射線上に躍り出る一夏。

「ちよつ、ちよつと馬鹿！ 何してんのよ！？ 退きなさいよ！」

「良いから撃て！」

「ああもうつ……！ どうなっても知らないわよ！」

一夏の行動の意味が分からなかった鈴は、衝撃砲を撃つのを躊躇うが、彼が構わず撃てと言うので、半ばヤケクソ気味にそれを放った。

一夏の考えは単純であつた。

イグニッション・ブースト
瞬時加速 の特性を考えて、衝撃砲の力を使って相手の反応を上回るスピードを出そうとしたのだ。

「（俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人すべてを……守る！）」

その目論見は成功したようで、一夏はかつてないスピードで敵に向かう。

その手に持つ 雪片式型 は、彼の想いに反応するかのように、強い光を放っていた。

そして、放たれる必殺の一撃は、敵ISの右腕を斬り落とす。

「クソッ！」

だが、そこまであつた。その反撃で左拳をモロに受けた一夏は、思わず悪態を吐く。

ハイパーセンサーで周りを探ってみたが、もう1つの 策 の方は、間に合わなかったみたいだ。だからこそ、この一撃で決めておきたかつた。

しかし、後悔しても後の祭り。拳から離れたが、敵の右腕から熱源反応を感知しているのを考えると、どうやら零距离でビームを叩き込むつもりらしい。

「「一夏っ！」」

その様子を見て、箒と鈴が彼の名を叫んだ。
でも、それに反応する余裕は今の彼には無い。

『ふむ……、諦めるのは勝手だが、その前に右に避ける』

「…………え？」

半ば諦めた状態で、少しでも目の前の恐怖から逃れるために瞳を強く瞑っていた一夏へと、何者かが声をかけてきた。

それは口元に布でも当てているのか、酷くくぐもっていて正確な声は分らない。

いきなりのことに一夏は間抜けな声をあげるも、急に背中に悪寒を感じたために、その声の言う通りに右へと身体を傾けた。

瞬間、彼の横にレーザーでも、ましてやビームでもない ナニカが通り過ぎて行き、敵ISへと向かっていく。

その ナニカ は、文字通り敵ISの頭の部分を 消し飛ばした。

それにより敵ISは態勢を崩したが、まだ機能は生きているようで、再び右腕を一夏へと向けようとしているが、もう遅い。

「お…………うおおお！」

一瞬だけ呆けてはいたが、完全な勝機を一夏が逃すはずはなく、彼は雄叫びをあげながら敵ISへと斬りかかった。

相手の遮断シールドはもうない。そのため、彼の斬撃をモロに受けることとなった敵ISは、小さな爆発を起こして地面へと落下する。

「お…………終わったの？」

それから暫く、いきなりの展開だったためか、時間が止まったかのような空気が流れていたが、鈴がボソツと口にした言葉により、固まっていた空気が解けた。

「ああ、そうみたいだな」

それにより、復活した一夏が言葉を口にして、張り詰めていた空気が霧散する。

敵ISが倒れたためか、遮断シールドも解除されており、山田教諭からの通信も滞りなく聞こえていた。

「ふう。何にしてもこれで終わ」

『敵ISの再起動を確認！ 警告！ ロックされています！』

それを聞くのもそこそこに、やっと闘いが終わったことを認識すると、一夏は一息吐こうとする。

が、その途端、白式から警告のアラームがもたらされた。

それにより、敵ISへと視線を向けてみると、片方だけ残った左腕を、最大出力形態に変形させた無人機が、地上から一夏を狙っている。

「!？」

次の瞬間、彼へと迫り来るビーム。それにためらいなく飛び込むと、一夏はそのまま無人機へと迫り、手に持つ刃でその装甲を斬り裂いていた。

「しつこいやツだったが……終わったみたいだな」

一夏が無人機を完全に斬り裂く様子を見た満は、力を解除してからそう呟く。

彼は無人機は頭を潰せば止まると思っていたのだが、それでも機能停止に出来なかったために、少しだけ焦っていたのだ。

そのため、しつこく一夏を狙う無人機を仕方なく消し去ろうとしたのだが、彼が射線上に現れたためにそれが出来なかった。

それにより、彼の焦りは頂点に達していたのだが、結果は一夏が無人機を撃墜して終わり。

焦っていた自分をらしくないと思いながら、満はアリーナを見つめていた。

「さて、ここももう危ないだろうから……」

が、それも束の間。満は踵を翻すと、足早にその場から立ち去る。勿論、誰にも見つからないようにだ。

腐ってもIS学園は全世界からエリートを集めた場所である。

何時までもそこにいたら、自分にとってデメリットなことしか起こらないと判断したからだ。

そして、彼は何食わぬ顔でクラスメート達に混じり、先の出来事について話ながらアリーナを後にする。

こうして、波乱に満ちたクラス対抗戦は、幕を閉じるのであった。

第7話 クラス対抗戦・顕現する 力 - (後書き)

ハイ、今回はここまでです。

自分では、また変な感じになってしまったと思っているのですが、如何でしたでしょうか？

この話にて、やっと明かされた主人公の 力。

まだ一部だけですが、使われるのにどれだけ時間がかかっているんだと（苦笑）

また御指摘があれば仰って下さい。

時間はかかるでしょうが、修正致します。

後、アンケートの件なのですが、今後の更新の方針についてです。

自分がストックしているのは、あと1話と、前に後書きで書いた閑話の分だけになっています。

なので、そのストックを使い切った後についてのことです。

1、文字数は少なくても良いから、なるべく早く更新する

2、時間がかかるのが前提なら、第2話くらいの文字数にする

この2つから選んでいただき、感想覧にご記入して下さい。

後、何か他に提案があるなら、それを書いて頂いても構いません。

アンケートは、自分のストックが尽きる時まで続けさせてもらいます。

では、長々とした乱筆・乱文で申し訳ありませんでした。

今回の後書きはこれくらいにして、また次話にてお会いしましょう

m () m

第8話 事後処理（前書き）

またまた遅くなってスイマセン（苦笑）

ストックしているモノなのに、これだけ時間がかかっているとなると、それが尽きたらどれだけ時間がかかるのやら……。（。。；）

ではでは、このような拙作ではありますが、楽しんで頂けたら幸いです。

後、アンケートにご協力をお願いしますm（| |）m

第8話 事後処理

幼き頃、名前を与えられてからも暫くは、家族の死に目がたびたび夢に出てきていた。

それに慣れるはずもなく、その夢を見てしまった日は、1日を台無しにしているようなモノであつた。

そんな彼に、ある日、数多く居る様々な分野の 天才 の内の1人が話しかけてくる。

「どうかしたか？」

「夢を見たんだ……。あの日の……家族みんなが居なくなつた日の……」

「そうか」

声をかけられた彼は、何の抑揚もなくただ淡々とあつたことだけを話した。

彼もその家族にも、戸籍などはあつただろう。

だが、世間一般では 白騎士事件 の犠牲者は0とされている。

それは、都市部などの人口密集地においてなため、山岳部などは含まれていなかったが、世界的にも概ねそのような流れが出来上がっていた。

しかし、彼や他の犠牲者にも、戸籍などのその存在を証明するようなモノはある。それが残っていたら、ISを認めた世の中になつてしまった世間的にも色々とマズい。

よつて、彼等はこの世から抹消された。初めから（……）居なかつたとされたのだ。

彼の家族も近所付き合ひはあつただろうが、そういった者達にも

何らかの対応がなされ、完全にその存在がなかったモノとされる。彼はその幼き頭でも、それがどういことなのか、ある程度は理解していた。そのため、夢で見る家族の死は2つの意味があるのだ。

肉体的な 死 と、世間的な 死 。

みんなが居なくなつた日と表現するのも、それが理由なのである。

「厳しい言いようだが、恨んでも悔やんでも、死んだ者達は甦よみがえらなぞ」

「それは分かっているつもり。どんな人だろうと、死んでしまえばただの骸だから」

話が逸れたが、それが分かっているためか、彼に話しかけてきた者は同情するでも慰めるでもなく、ただ事実を突き付けた。

対する彼は、それに反応することなく淡々と自分なりの答えを返す。自身を助けてくれた老人以外には、子供らしく敬語は使わなかったが、声の抑揚がないためにそうは感じなかった。

「……お前はそんな小さな手で骸を抱いた。故にその重さを知っている。だが、お前が背負い込もうとしている 命 の重さは、そのの比じゃない。生き残った者としてそれを背負うには、強さが必要だ」

「強さ……」

彼は自身の家族の亡骸と対面している。それをその手に抱き、自ら叩いてもいた。

それを知っているからこそ、その 天才 は彼がしようとしていることを見抜き、導こうとする。

「貴方は……？」

「何、少々 剣 を嗜んでいる者だ。」

そこまできて、やっと彼はその 天才 に興味を持ち、視線を合
わせて話しかけた。

それに対し、その 男 は飄々と答えを返す。

「いくら強大な 力 を持っていようと、個人で世界の流れを変え
ることは出来ん。それでもなお、その手で何かを救い、守りたいと
思うなら付いて来い。お前には、俺の とっておき を教えてやる」

その後、じつと自分を見つめてくる彼にそう言い、男は踵を翻し
て背中を向けた。

その背中がとても大きく見えて、少しだけ彼は呆けてしまうのだ
が、慌ててそれに付いて行く。

こうして、彼は闘い方を覚える第1歩を歩み始めるのであった。

「う……」

謎のISの乱入により、波乱の内に幕が閉じたクラス対抗戦。

あの後、意識を失った一夏は、幾らか時間が過ぎ、空が茜色に染まった頃に、漸く目を覚ました。

「ここは……？」

現状を把握出来なかったため、彼はキョロキョロと辺りを見回す。そこは白を基調とした部屋であった。

それにより、そこが保健室だということに気が付く。カーテンで仕切られたその空間に、彼は狭さ故の息苦しさや安堵の両方を感じた。

一見矛盾しているようなそれを、一夏はボンヤリとした意識で感じながら、情報の整理を始める。

「（ええと、どうなったんだ……？ 俺の攻撃は当たって、それから）」

「気がついたか」

すると、周りの空間と仕切るために使われていたカーテンが、何者かによって徐に引かれた。

彼は確認するまでもなく、その人物が誰なのか気付く。今まで何度も聞いてきた声。自身の姉である織斑教諭だったからだ。

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れる。」

「はあ……」

未だはつきりしない意識で、織斑教諭の言うことを聞いてから、一夏は生返事を返す。

「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかもお前、ISの絶対防御をカットしたな？ よく死ななかつたものだ」

そんな彼のことなど意にも介してないのか、織斑教諭はそのまま話を続けた。

対する一夏は、その話の中にある1つの事柄に、疑問を持つ。ISの絶対防御についてだ。

これはシステムの根茎的に、カット出来るはずのないモノである。あの時は無我夢中だったために今ひとつ覚えはないが、何故そのようないことが出来たのであろうか。

「まア、何にせよ無事で良かった。家族に死なれては寝覚めが悪い」

少しばかりそのことに対して思考が偏りかけたが、次に織斑教諭が告げてきた言葉を耳にして、一夏はそれを放棄する。今、目の前に居る彼女の表情が、いつもよりずっと穏やかだったからだ。

世界でたった2人だけの家族。その自分にしか見せたことがないかもしれない。そんな表情だ。

「千冬姉」

「うん？ なんだ？」

「いや、その……心配かけて、ゴメン」

その表情を見てしまったからか、一夏は何となくだが謝らねばならない気持ちになって、小さいながらも大切な姉へと謝罪の言葉を告げる。

それを聞いて、織斑教諭はキョトンとするが、すぐさま小さく笑った。

「心配などしていないさ。お前はそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな」

そして、そのままそんなことを言ってくる。変な信頼の置き方ではあったが、弟である一夏には、それが単なる照れ隠しであったことが分かっていたため、別段気にはならなかった。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻って良いぞ」

それから、織斑教諭はそう言い残し、スタスタと保健室を後にする。その後ろ姿は、いつものように凜としていた。

「あー、ゴホンゴホン！」

それと入れ違いになるように、誰かが保健室を訪れる。

まア、先の織斑教諭のように、一夏はその姿を見なくても誰だかは見当はついていたが。

「よう籌」

「う、うむ」

織斑教諭によって半分だけ開いていたカーテンが全開にされる。と、同時に一夏はそこに居るであろう人物へと軽く会釈をした。間違っていたらただの間抜けだが、案の定そこに居たのは篠ノ之箒その人だったので良しとしよう。

そのポニーテールの幼なじみは、腕組みをしながら鼻を鳴らす。それから、一夏は彼女からクラス対抗戦が無効試合になったことや、あの無人機に自分が勝った　箒からはあんなの勝ちとは言わないと言われたが　ことを聞いた。

その際、例の如く素直になれない箒の癩癩が少しばかりあったが、これまた例の如く朴念仁である一夏はその理由に気付けない。

「……。一夏」

「ん？」

「その、だな。戦っているお前は……か、かか、かつ……………格好良か……な、なんでもない！」

癩癩を起こした女の子と、朴念仁な男の子の微妙に齟齬をきたした会話が一段落した後、保健室を後にしようとした箒が、一大決心をして一夏へと本心を告げようとするが、途中で恥ずかしくなってそのまま部屋を出てしまった。良いところまではいけていたのが惜しい。

が、肝心の一夏は、一番重要な部分だけ（・・）を聞き逃していた。ここまできたら神懸かりと言えよう。

朴念仁、ここに極まれり　だ。

「よう、体の方は大丈夫なのか？」

「満……………」

それから、箒と更に入れ違う形となって、一夏の前に満が現れる。起き上がっている一夏を目にすると、満は軽い感じで簡単に一夏へと話し掛けた。

「命に別状はないそうだ」

「そうか……。まア、災難だったな」

その軽い問い掛けに対し、一夏もそれに合わせて返す。先ほどまでとはまた違った雰囲気、一夏は何故か心地よさを感じた。

因みに、満は先ほど顔を真つ赤にしていた箒とすれ違っているのだが、あえてそれには触れないでいる。箒の想いと一夏の鈍感さを考えれば、理由は容易に分かったからだ。それに、今の一夏のことを考えてのことでもある。それ故の、会話の軽い入り方だ。

「全くだ……。何せあんな無……」

「ストップ！ 一応、今日のことは秘匿事項だそうだから……。観客席に居た生徒達には、詳しく通達されていない」

「お、おう。そうだったのか……」

「ああ、すまないな。だが、お前も面倒事になるのは嫌だろう？」

それはともかく
閑話休題、満の言葉を聞いて、一夏はそのまま愚痴を零そうとするのだが、満はそれを遮った。あの出来事が秘匿事項とされていたからだ。

一応、満も事の顛末は知っているのだが、彼は観客席に居た（……）ことになっている。そんな彼がその事について会話して

いたら、普通に怪しまれるだろう。

だからこそ止めたのだが、そこに嘘はなかった。

何故なら、彼は観客席に居た生徒達には（・・・・・・・・・・）
（と言っているだけであって、自分は知らない（・・・・・・・・・・）
とは一言も言っていない。所謂、言葉のマジック というものだ。

「ところで、鳳とは仲直り出来たのか？」

「いや、あれでうやむやになっちまってな……。まだキチンと謝れてない」

これ以上その話題に触れるのは拙いと判断し、満はそれとなく話題を転換する。

その新しい話題に対し、一夏は少しばかり暗い表情になるのだが、先ほどの話題を続けて檻褸を出すワケにはいかなかったので、満は仕方のないことだと割り切った。

「まア、頃合いを見計らってキチンと謝るつもりだけだな」

「そうか……。また言い合いにならないよう気を付けろよ」

「うるせー」

不意に表情から暗さを無くした一夏が、小さく微笑みながら満へと自身の考えを告げてくる。

それを聞き、怪我人だからと精神面を気遣っていたのが杞憂と判断したのか、満は軽くからかいを込めた返答を返した。

対する一夏も、それが分かっているのか、軽く憎まれ口を叩いてくる。

そんなやりとりをしていたのだが、暫くすると、一夏がウトウト

としました。

「ん……、急に眠気が……」

「疲れているのだろう。すまないな、気を利かせるべきだった」

「いや、謝る必要はないだろ」

その様子を見て、満は苦笑いを浮かべながら一夏をベッドへと横たわらせる。

「これ以上は邪魔だろうから、俺もそろそろお暇する。お前はゆっくり休んでおけ」

そして、そう言い残してから、満は保健室を後にした。

その後ろ姿を見送ってから、一夏は眠りに落ちていく。特に抵抗をすることはなく、ベッドの心地よさを感じながら、彼はそのまま意識を手放すのであった。

IS学園の地下。そこには、一定レベル以上の権限を持つ者しか入ることの出来ない空間がある。

クラス対抗戦に乱入したあのISは、機能停止したのを捕縛されたと、すぐさまここに運び込まれて解析が行われた。

それが開始してからかなりの時間、織斑教諭はアリーナでの戦闘映像を何度も見ている。

「……」

室内は薄暗く、ディスプレイを見つめる織斑教諭の表情は酷く冷たい。

「織斑先生？」

と、そこへ横から声がかかった。声の主は同じくこの部屋に居た山田教諭。

その表情は、普段とは打って変わって鋭いモノで、行動も心なしかキビキビとしていた。

「どうかたか？」

「このISの解析結果が出ました。これは 無人機です」

呼ばれたため、ディスプレイから視線を外した織斑教諭を確認すると、山田教諭はそこで行っていたことの結果を口にする。

それにより、織斑教諭の表情も少しは変化すると思われたが、相変わらず冷たいモノのままだった。

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術。リモート！遠隔

コントロール

スタンド・アローン
操作と独立稼働。

そのどちらか、あるいは両方の技術があつた謎のISに使われている。

その事実は、すぐさま学園関係者全員に箝口令が敷かれるほどだったのだが。

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑君の最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていましたから。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか……やはりな」

まあ、そのようなことは大して気にするようなことでもなく、山田教諭はそのまま結果を言い続ける。

それに対し、織斑教諭は1つ質問を投げかけるのだが、返ってきたのは彼女の予想通りのモノであつた。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ　　な」

どこか確信じみた発言をする織斑教諭に、山田教諭は怪訝な表情をする。

が、織斑教諭はそれを軽く受け流すと、戦闘映像が流れるディスプレイへと視線を戻した。

その顔は、教師というより1人の戦士。かつて、世界最高位の座にあつた現役時代を彷彿とさせる表情だった。

伝説の操縦者。^{ブリュンヒルデ} 彼女は、ただただ映像を見続けているのであった。

「……………」

それから暫くして、誰も居なくなつたその空間に、1つの物陰が入り込む。

「（やはり……か）」

その物陰の正体は六久 満。彼は、誰も居なくなつたのを見計らい、システムをクラッキングしてこの部屋へと忍び込んだのだ。

IS 学園にとって、重要施設と言えるであろうこの場所は、警備システムなどの質が他と比べて極めて高い。

そのような場所に、誰にも気付かれず忍び込める彼の能力の高さは、言うまでもないだろう。

「（Dr・ケインやアイツ等の線は完全に消えたな。この程度のも

ノを、危険を冒して送り込むようなことはしない)」

人間にも、機械にもバレないという確信はあるが、それでも危ないことには変わらない。それでも忍び込んだのには、理由があった。それは、あの時に至った考えを、更に絞り込むためだ。

「(だとしたら、他にISのコアを創れるような奴が居るということとか？ もしそうなら、表では有り得ない。すぐにニュースになって世界中に知れ渡るはずだ。俺達と同じ裏なのか？ いや、質が低すぎる(……)。……まア、そこら辺は今度Dr・ケインに調査してもらおう)」

自身の恩人達を疑うようなことはしたくなかった。

だが、これ(……)は争いから逃げ出した自分の目の前に再び現れた、新たな争いの火種。それに対して、過剰に反応して原因を考察するのは仕方のないことである。

「(もし、篠ノ之 束だとしたら、何を考えている？ 俺の正体など絶対に知らないだろうが、こんなモノを送り込むなんて、嫌がらせにしても程がある)」

最後に残っていた可能性を考えていると、満は無意識に力が入っていた。

篠ノ之 束は六久 満の偽造された経歴を絶対に見破れない。それは、彼女程度では調べられないと確信を持って言えるからだ。

なのに、彼が居るIS学園いそがくえんにあのようなモノを送ってきたとなると、それは無意識に(……)ということ。

ならば、彼女は嫌がらせに関しても 天才 だと言えるだろう。

「(……こんな所で考えていても仕方ないか)」

それから少し時間が経ち、粗方調べ終わった満は、思考を一旦中断して、自身がここに居たという形跡を完全に消し、その部屋を後にするのだった。

目覚めると、何故かその場に居た鈴と、後からやってきたセシリアの言い合いに巻き込まれ、随分と眠ったはずなのに未だに疲れを感じていた一夏は、やっとのことで自室へと戻って来ていた。

その際、例の如く癩癩を起こした箒とのいざこざが多少あったが、今は彼女が作ってくれた手料理を食べている。

調味料を入れなかったのか、味がしない料理ではあったが、せっかく作ってくれたということで、一夏はそれを完食した。

「あのー、篠ノ之さんと織斑君、いますかー？」

その後、鈴との一件の話で再び箒が癩癩を起こすのだが、それを遮るかのように、山田教諭が2人のもとを訪ねてくる。

「どうかしたんですか、先生」

「あ、はい。お引越しです」

「はい？」

「……先生、主語を入れて喋ってください」

「は、はいっ。すみませんっ」

そして、来訪の理由を箒に尋ねられたので、彼女は主語を抜いたままを話を切り出した。

が、それでは伝わるはずもなく、箒が鋭い視線を送ったため、山田教諭は小動物のように身を縮こませる。教師の威厳はどこへやら。

「えっと、お引越しするのは篠ノ之さんです。部屋の調整が付いたので、今日から同居しなくてすみますよ」

箒に指摘された通り、今度はきちんと主語を入れて話を進める山田教諭。

だが、彼女からもたらされた話により、箒は驚愕していた。

それもそうだろう。彼女にとっては、想い人である一夏と引き離されるようなことなのだから。

しかし、朴念仁を極めた一夏はその理由に気付けない。

なので、見当違いなことをのたまった挙げ句、箒を怒らせてしまった。

そして、そのままの勢いで引越しを始める箒と、それに着いて行く山田教諭。

それを見送りながら、一夏は箒が何故怒ったのかを考えるのだが、鈍感である彼にその理由が分かるはずもない。

「……まア、寝るか。考えても仕方ないし」

故に、彼はその思考を放棄した。

それから、シャワーを浴びて、歯を磨き、布団へと潜り込もうとする。

すると、先ほど出て行った篤が訪ねてきた。

「どうかしたのか？ まア、とりあえず部屋入れよ」

「いや、ここで良い」

「そうか」

「そうだ」

彼女の表情は不機嫌そのもので、黙ってその場に立っている。

「……篤、用がないなら俺は寝るぞ」

「よ、用ならある！」

少しの間、沈黙が2人を支配したのだが、なかなか喋らない篤を見て一夏はもう眠ろうとした。

それを聞き、篤は慌てて彼を引き留める。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

それから、彼女は少しずつ言葉を口にしていく。

因みに、学年別個人トーナメントとは、6月末に行う行事らしく、

クラス対抗戦とは違って完全に自主参加の個人戦だ。
学年別で区切られている以外は特に制限はないが、専用機持ちが有利なことは変わらない。

「わ、私が優勝したら……」

頬を紅潮させながら、箒は言葉を続ける。かなり恥ずかしらしく、一夏と目を合わせられていないが、鈍感オブ鈍感な彼はなぜそうなっているのか分からなかった。

「つ、付き合ってもらおう！」

「はい？」

そして、投下される爆弾発言。篠ノ之 箒が一世一大の大勝負に出た瞬間である。

だが、その発言が、後に学園全体に影響を及ぼすことになるだろうとは、その時の彼女は思ってもいなかった……。

「どうかしましたか？」

「いや、何やら今どこかで私にとって非常に不愉快な出来事があっ

たような気がしてな……」

同時刻、学園で一番有名な女教師が物凄い不機嫌になっていたと、その時に彼女と一緒に居たM少年が後に語っている。

第8話 事後処理（後書き）

ハイ、今回はここまでです。

この話で、本編のストックしていた文章は底を尽きました（苦笑）
残りは、ちまちまと書き足していつてる閑話のみになっております。

後、いきなり話が変わりますが、久しぶりにアクセス数を見てみたら、PVが10万、ユニークが1万を超えていました。

このような拙作が、それだけアクセスしてもらっているなんて、本当に感無量です。

それで、お祝い短編みたいな感じで、ネタが1つ思い浮かびましたけど、それは本編ではまだまだ見せられそうもない、自分が考える
デレた千冬　なため、書いて良いのか悩んでいます（苦笑）

と、ちょっと長くなってしまいましたね。

ではでは、後書きはこれくらいにして、次話にてまたお会いしましょうm（ー）（ー）m

閑話・警戒心を解きましょう・（前書き）

どうも、案の定力尽きました（苦笑）

何故か自分がイメージしてたのと違った感じになってしまい、更に最後の方はグダグダです（・・・；）

なので、こんな風にしたらどうだ？ とか、そういったアドバイスやご指摘があれば、遠慮なく仰って下さい。

いつになるか分かりませんが、必ず修正します。

後、アンケートに投票がなかったので、自由にやっていくことにしました。

なので、これからは確実に不定期更新になると思いますが、この拙作をどうぞよろしく願いますm（―――）m

では、今回も楽しんで頂けたら幸いです。

閑話・警戒心を解きましょう・

闘い方を学び、ある程度それが形になり始めた頃。その頃になると、彼は目上の者に対しては、誰にでも敬語で話すようになっていた。

「ねえ、師匠」

「うん？ 何だ？」

そんなある日、力を付けるにつれて、彼は1つの疑問を抱くようになる。

それを解消するために、自分に闘い方を教えてくれている 天才へと、その疑問をぶつけてみた。

「強い って、何ですか？」

「……なんだ、やぶからぼうに。いきなりどうした？」

「いえ、最近ずっとそんなことを考えているんです」

嘘偽りなく、ストレートにぶつけられたそれに、師匠である男は苦笑いを浮かべる。

だが、そんなことは意にも介さず、彼は男をジッと見据えて言葉を続けた。

「ふむ……。悪いが、俺はその答えを教えることは出来ん。俺自身、その答えを知っているワケではないからな。……いや、世界中の誰もが、その疑問に対しての明確な答えなど持ち合わせてい

ないだろう」

「??」

彼の真剣な眼差しに、男はそれが真面目な質問なのだろうと読み取り、表情を引き締めてからポツポツと自身の考えを口にする。

しかし、その意味が分からなかったのか、彼は眉を顰めて首を傾げた。

「強さ にも色々ある。単純に、腕力の強さ や 業の強さ。他には 権力の強さ とかな。頭の良さ っても、それに当てはまるかもしれん。だが、持っている腕力や業、権力が強ければ何をしてても良いのか? いいや、違う。頭が良ければ、何をしても許される? いいや、それも無い。人間の本質 とやらと一緒に、それは人類にとって 永遠のテーマ なんだろうな」

「そうですか……」

そんな彼に、男はその言葉の意味を告げた。それにより、ある程度は納得出来たのか、彼は男から視線を外して、1人で何か考え始める。

「故に、その 答え は人それぞれだと言えるだろう。だから、他人に自身の 答え を押し付けるなんて、してはいかん」

「わっ! わっ!」

1人で違う世界にトリップした彼を見て、師である男は再び苦笑いを浮かべると、その頭に手を置いて乱暴に撫で回した。さほど思考に沈んでいなかったのか、急にそんなことをされた彼は意識をそ

ちらに戻すも、されるがままになっている。

「だが、世の中には色々ある。間違った 答え を持っていて、それに氣付けていない奴も居るかもしれん。お前は 強さ を履き違えるなよ？ そして、そんな奴を見つけたら、それは違う と教えてやれるような男になれ」

「……ハイッ！」

ひとしきり撫で回し、彼の髪が滅茶苦茶になった頃。ようやく男はその手を彼の頭からどけ、フツと微笑みながらそう締めくくる。
その言葉を聞いた彼は、疑問の 答え は得られなかったものの、晴れ晴れとした表情をしていた。

満がIS学園に入学して、部屋割りが決まった時期。
その頃には、彼はもう学園で3年間過ごすことを受け入れており、それを快適に過ごすにはどのようにすれば良いかを考え始めていた。

だが、その矢先にいきなり躓くことになる。

理由は織斑 千冬教諭。彼女が明らかに彼を警戒していたからだ。様々な争いから逃げ出したからには、世間一般で言う 普通の少年らしい学園生活を送ろうとしていた彼からしたら、そういった感情は持つてほしくないモノである。

まア、ISという 兵器 を取り扱っている時点で、 普通 とはかけ離れていると言えるかもしれないが、そこはツツコミを控えておこう。

「（さて……、やるからには絶対に警戒心を無くさせなければ……）」

それはともかく
閑話休題、だからこそ彼の行動は迅速であった。

彼女が自身を警戒していることに確信を持った翌日には、行動を始めていた。

「織斑教諭……、少しお時間よろしいですか？」

まず、満がとうとうとした行動は コミュニケーション 。何事も、互いを知ることから始めるのが肝心である。

彼自身はそう思っていないかもしれないが、後ろめたいことのオンパレードなその過去は、勿論ある程度伏せておくつもりだったが。

「六久か……。私に何か用か？」

行動を開始した日の昼休み。満は職員室へと向かっていた。

そして、目的を遂行するために、早速そこへ向かう途中に居た織斑教諭へと話しかける。

声をかけられた織斑教諭は、一瞬だけ驚いた表情をするが、周りに気付かれることなくそれを掻き消すと、いつもの表情でそれに応

対した。

「ハイ……、少しお話をと思ひまして」

「（話だと……？ 何を考へてゐる？）」

返事が返つてくると、満はそのまま自身が話しかけた理由を織斑教諭へと伝える。

それに対し、彼女はその行動を訝り、内心で色々と疑いをかけるが、それを面に出すことはしない。

「それは急ぎなのか？」

「あー……いや、これと言つて急いでゐるワケではありませんが、もし時間があればと思ひまして……」

「（何か企んでゐるというワケではなさそうか……）」

少し間を置いた後、彼女は彼へと1つ問ひかけた。

その問いに、満は少しだけ考へる仕草を見せると、苦笑いを浮かべながら答えを返す。

それにより、彼女の中にあつた疑いは少しだけ晴れたのだつた。

「悪いが、これでも忙しい身なのでな。今は時間を持て余してない
い」

「そうですか……。なら、放課後はどうですか？ 急ぎではないんですが、なるべく早めにお話したいので」

「……どういふことだ？」

「あー……、相談……みたいなモノですね」

「（相談だと……？）」

だが、それくらいでは警戒心が解けるはずもなく、織斑教諭は満の申し出をバツサリと斬り捨てた。

しかし、それでも満は引かずに、尚も食い付いてくる。

それで彼女の心に再び疑念が浮かび、再び問いかけてみた。

それに対し、彼は苦笑いはそのままに、人差し指で頬を掻きながら弱々しく答える。

「……それは私でなければいけないことか？」

「ハイ……、織斑教諭でないといけません」

「……分かった。生徒からの相談を受けるのも教師の役目だ。だが、先ほど言った通り私は忙しい身でな。放課後というのは構わないが、遅くなるかもしれんぞ？」

「有難うございます。時間に関しては大丈夫です。放課後は一夏に色々と教えてやる約束をしているので、お仕事が終わったら何かしらの手段で連絡をください。俺から赴きます」

「……いや、18時までには終わらせる。その時間までに屋上に来ている」

「分かりました」

なかなか引かない満に、織斑教諭はついに折れて、彼の話聞く

ことにした。

その答えを聞き、彼はその表情を若干だが明るくさせ、そのままそこを後にする。

本来なら、織斑教諭は周りから絶大な人気があるため、1人だけに臍原をするワケにはいかなかったのだが、警戒する相手の本性を見抜こうと、あえて話をすることにしたのだ。

「（まずは第1段階クリアってところか……）」

無論、そういったところを満は見抜いていたが、それは気にすることではないとして、そんなことを考えながら昼食をとるために食堂へと向かう。

道中、放課後に話すだろうことを頭の中で整理しながら……。

その日の放課後。満は言われた時間帯よりも少し早めに学園の屋上へと来ていた。

そして、約束の時間ピッタリに織斑教諭は現れる。その時点で、

彼女は時間に厳しい人だということが満には分かった。

「さて……、来てやったぞ。で、何を話したいんだ？」

それから、彼女は単刀直入に話を切り出す。

あまりにもストレートなために、満は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「あー……、話したいというか……聞きたいというか……」

「何だ？ はつきりしろ」

会話のイニシアチブを取られてしまったかなと思いつつ、満はそれをどう取り戻そうかと思案する。

だが、織斑教諭はそれを許さんとはかりに、その時間を与えてくれない。

「……分かりました。では単刀直入に聞きます。何をそんなに悩んでいる（……）のですか？」

「……どういう意味だ？」

故に、ここまできたら自分もストレートにいくしかないと考え、満はそのままそんなことを口にした。

瞬間、織斑教諭の表情が若干固まる。

この場合、警戒心を持たれていることに気付いてない風に装った方が良くと考え、少し遠回しな言い方ではあったが、満の言葉は至極真っ直ぐであったため、織斑教諭はその裏にある真意を読み取れなかったようだ。

「そのままの意味ですよ。俺は、資格を持っているワケではありませんが、臨床心理士の心得があります。流石に心理学に精通しているとまではいきませんが、それでも貴女が何か悩みを抱えていることは分かります」

固まる織斑教諭に更に投げかけられる言葉。そこにも一切の嘘はなかった。悩み（・・・）と表現したのは、彼女にも色々なそれがあるのだろうが、今はその中に、確実に満のことがある（……………）と断言出来るためである。

警戒されていることに気付いてない風に装っているため、そのことを口にすることはしていないが、それでも口にしていない（……………）だけで、嘘は吐いていない。彼がよく使う、言葉のマジックである。

「……………仮に私が悩んでいるとして、何故それをお前に話さねばならんのだ？」

「あ……………、そう言われたらちょっと耳が痛いのですが、折角こういった知識があるので、カウンセラーにでもなってみようかと思ひまして。それに、明らかに悩んでいると分かる人が居るのに、それを放っておくことはしたくないというのもあります」

そんな中、織斑教諭は視線を一層鋭くし、更に声色を低くして威圧的に質問を投げかけてきた。

それに対し、満はそれを軽く受け流して、淡々と答えを返す。そこにも嘘はなかった。何故なら、彼は自分のことで要らぬ心労を彼女に与えたくはなかったのだから。

「……………分かった、ならばハッキリと言おう。私はお前のことで悩んでいる」

「……ッ!？」

普段ならそんな選択はしなかったのだろうが、状況が状況なため、彼女は満の言葉に乗ってきた。

もし仮に何か企んでいたとしても、それが分かった時点で押さえなければ良いだけだし、自分にはそれが出来ると判断したからである。

その言葉を聞いた満は、あからさまに息を飲んでいった。

因みに、これは演技ではなくガチである。自分の言葉に乗ってくるように仕向けはしたが、まさかここまでストレートに言われるとは予想だにしてなかったからだ。

「あー……、理由を聞きかせてもらえませんか？」

何を白々しい。そんなことなど確信に近い推測が出来ているのに、満はあえてそう問いかける。自分はまだ気付いていないと装うためだ。

「理由？ それは簡単だ。お前は15そこらのガキにしては、知識量がありすぎる。惚けさせはせんぞ？ クラス代表を決める時に、この私を言い負かした（……）のだからな」

それに気付いているのか、そうではないのか。今の織斑教諭からは読み取れない。

しかし、返ってきた言葉から、彼女は極度の負けず嫌いということとは分かった。

「……成る程。なら、カウンセラーをしようとしてた身としては、益々それを放っておけませんね」

そのことに、子供っぽいところもあるのだなと、満は内心で苦笑いを浮かべるが、それを面に出したりはしない。

そして、彼はここからが正念場だと気合いを入れて、そう言い放った。

その言葉に、織斑教諭は表情をしかめて彼を訝る。

「……と、いうことで、俺に聞きたいことがあればどうぞ。それで悩みが解消されるなら、質問に答えますよ」

明らかに警戒心を剥き出しにしている彼女を見て、内心で彼女らしくないと思いながらも、満は相手の瞳を真っ直ぐ見据えてそう口にした。

「そうか……、ならば遠慮はせん。お前は何者だ？ 何故それほど知識を持っている？ そして……」

「ストップ！ 質問は1つずつお願いします。でないと、答えが長々となってしまう」

「うん？ それくらいお前ならばどうってこともないんじゃないのか？ まあいい。じゃあ、まずは お前は何者だ？ と聞こう」

満が見据えるその先で、織斑教諭は瞳の奥に光を宿し、矢継ぎ早に質問を口にする。

それを、満は慌てて止めて、1つずつ区切るように頼み込むと、彼女は渋々だがそれを了承してくれた。

「それを答えるために、質問を促しているんですよ」

「フン、そうきたか……。なら次だ。何故それほどまでの膨大な知識を持っている？」

「その答えは簡単です。俺の周りには 天才 が沢山居ましたからね。そういった人達に、小さい頃から色々と教えてもらったんですよ」

「なに……？」

それから、1つ1つ区切りを入れて飛んでくる質問に、満は答えていく。

「お前はISの知識もあつたな。じゃあ、お前は束の知り合いなのか？」

「束って、まさか篠ノ之 束のことですか？ まさか。俺は彼女のような（…………）知り合いはいませんよ。言つたでしょう？ そういった人達に教わつたと」

その中で、 天才 という言葉に反応した織斑教諭が、篠ノ之束のことを引き合いに出してきた。

対する満は、おどけた様子でそれを否定する。

「人達だと？」

「そうです。各分野にて、 天才 と称される人達は居るでしょう？ あー、そうだな……。例えば、俺に臨床心理士としての心得を教えてくれた人です。名前は ヴィルヘルム・ヴェント」

「なっ!？」

満が徐に出した名前に、織斑教諭は驚愕の表情を浮かべた。それもそうだ。彼が口にした人物は、その道においての現在の第一人者。心理学にて 天才 の名を欲しいままにしている、傑物である。

因みに、満が何故そのような人物と知り合いなのかというと、裏 だけで生活していなかったからだ。

誰にも知られないアンダーグラウンドだけでは生活出来ない。

表 との繋がりは、生きていくためには必要だったのである。

まア、裏 から 表 にちよっかいをかけることは皆無であるが、一応は迷惑がからないようにと配慮はしていたが。

「なんなら今から教授に連絡して俺のことを聞いてみても良いですよ？ あの人は確かに忙しいけど、貴女ならアポ無しでも話は出来るはずだ。そこで俺の名前を出せば、あの人は喜んで話してくれると思いますよ」

「口裏を合わせている可能性も考えられる」

「だからこそ、今と言ったんです。連絡先も、貴女が調べてそこにすれば良い。そうすれば、俺が偽装する時間はないでしょう？」

真っ直ぐと織斑教諭を見据えて、満はハッキリとそう言い放つ。その目はとても澄んでいて、織斑教諭は彼が嘘を吐いているように思えなかった。

「……分かった。これに嘘はなさそうだな」

「俺は嘘は（・・・）吐いてませんよ」

真っ直ぐ自身を見据えてくる満の目を見て、織斑教諭は小さくそう締めくくる。

その様子は明らかにまだ疑っているのが見え見えで、満は苦笑いを浮かべた。

それから、彼は彼女から投げかけられる質問に、嘘は吐かずに答えていく。

そして、粗方それが出し尽くされると、最後に織斑教諭は今まで以上に視線を鋭くさせ、佇まいを正してきた。

その様子を見て、尋常じゃない何かを感じ、満も無意識に背筋が伸びてしまう。

「では、これが最後の質問だ。お前は 織斑の敵 か？」

「……え？」

夕日が沈みかけ、暗くなり始めた空をバックに、織斑教諭は真剣に問いかける。

が、満はその質問を耳にして、何故か肩透かしを喰らった気分になった。

「だから、お前は 織斑の敵 なのか？」

「クッ……クククッ……」

「何が可笑しい？」

「いや……、一夏も愛されているのだなと思ひまして……」

呆けた表情を晒す満に、織斑教諭は眉を顰めて再度同じ質問を投げかけてくる。

その裏に隠された心理を読み取り、満は笑ってしまった。
カウンセラーとしてはあるまじき行為ではあるが、それでも堪えられなかったのだ。

「フンッ！」

「ぐおお！？」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「いや……、照れ隠しにしては威力が強過ぎませんか？」

「どうやら、もう一発喰らいたいようだな」

「いえ、そのようなことはありません」

それが恥ずかしがったのか、織斑教諭はその鉄拳を満の脳天へと振り下ろす。

回避しなかった（……）満は、涙目になりながらも再びからかうような言葉を口にした。

それを耳にした織斑教諭が、不敵な笑みを浮かべて再度 拳 を作るので、満は慌ててそれを拒否する。

最早そこには、先ほどの緊張した空気はなかった。

「話が逸れてしまいましたね。先ほどの質問の答えですが、それだけはない と断言出来ますよ」

「ほう、何故そう言い切れる？」

「こんな生活をしていくんです。友人は大切にしないと。それに、

俺はアイツを裏切るようなことはしたくない」

適度に空気が和んだところで、満は先ほどの質問を真摯に答えた。対する織斑教諭は、何か探るような視線を向けてくる。

それを軽く受け流し、彼は真剣な表情で言葉を続けた。内心で、このことについては少しだけ嘘が混ざってしまっていると、悲しみに暮れながら。

「これで最後ですね？ まア、貴女が疑っていた俺本人の言葉なので、信じる・信じないは貴女の自由です。」

「何故そんなことを言う？ それだと、まるで今までの言葉が全て偽りだということに取られかねんぞ」

「それこそまさかですよ。でも、カウンセラーは 患者の心 をほぐさないといけませんから」

それを気取られなかったのか、その後の会話では織斑教諭の表情が心なしか柔らかくなっていた。

そして、それから更に2、3言葉を交わしてから、その日の邂逅は終わりを告げる。

「（さて……、思ったよりは上手くいったな）」

そのことに、満が手応えを感じながら。

初めての会合が終わった翌日。

その日も、満は織斑教諭の元へと訪れていた。

まさか昨日の今日でまた訪れるとは思ってもいなかったらしく、織斑教諭は何ともいえない表情になっている。

しかし、すぐさまそれを消し去ると、彼を適当にあしらおうとするのだが、満は相も変わらず食い下がったので、渋々相手をすることにする。

そんな日が続いた。そうになると、他の教員が黙っているはずもなく、ある日に彼は職員室へと呼び出される。

その時に、自身が 臨床心理士 の心得があることを開示し、その患者 として織斑教諭を選び、専属のカウンセラー紛いのことをしていると彼は言い放った。

だが、職員室に居た教員は誰もそれを信じようとしない。

それもそうだ。普段の彼女を見ていたら、そんなモノなど必要そうに見えない。

しかし、彼はそれについて納得させられるだけの材料を持っていた。

ああいった人ほど、ストレスを内に溜めやすい。その一言で、そこに居た全員を黙らせたのだ。

そこで、自分がその役に相応しいかを審査するべく、他の教員のカウンセリングをすることとなる。

その時に診断した、榊原 菜月 という、部活棟の管理を任されている教員を相手にした時、予想以上に 精神的に 疲れることとなったが、それを除けば満は概ね良好な学園生活を送っていた。

教員全員を納得させた後、織斑教諭から鋭い視線を叩きつけられたが……。

「さて、今日は何をお話しましょうか？」

そんなこんなで時は流れ、5月も半ば。

その頃になると、満は織斑教諭の仕事が終わる時間の大体を把握出来るようになっており、丁度それくらいの時間に彼女を迎えに行くようになっていた。

彼は、自らをカウンセラーと名乗るだけあって、口が上手く、更に聞き手としても優れていた。

そのため、織斑教諭はいつも、いつの間にか自身のストレスになっていることを聞き出され、気を遣われる。しかも、それに気付くのは全てある程度の時間が経ってからであつた。

それだと、普通は 機密情報を聞き出される と警戒するであろうが、何度かそういったことになりかけた時、彼自身から止められていたため、その心配はなかった。

そんなことが1ヶ月以上も続いたのだ。どんな堅物でも、ある程度は心を許せるようになる。

そのため、いつの間にか織斑教諭は、満との会話の時間が何よりも楽しみになっていた。

「ああ、今日はちょっと聞いてほしいことがあるんだ」

そして、その日も彼女は満と話す。

初めのうちは、主導権を取られることが妙に気に食わなかったが、

そんな感情はどこかに行ってしまった。

そんな自分をらしくないなと思いながらも、彼女の表情はどこか穏やかなモノであった。

閑話・警戒心を解きましょう・（後書き）

ハイ、何とも言えない感じの終わり方でしたね（苦笑）

前書きに書いた通り、アドバイスやご指摘があれば遠慮なく仰ってください。

因みに、この話で自分は千冬にフラグを建てたつもりです。

まア、まだ 恋愛フラグ ではありませんがね（苦笑）

後、前話の後書きで書いたお祝い小説。つまり、自分なりに考えたデレた千冬 なんですが、書いてみることにしました。
内容的にはかなり先のこと、満に 恋愛フラグ が建った千冬です。

と、また長々しくなってしまうでしたね（苦笑）

では、後書きはこれくらいにして、また次話にてお会いしまし

ようm（――）m

幕間・PV10万超記念・（前書き）

文字数や会話文は少ないですが、一応書けたので投稿します。

しかし、またイメージと違ったモノになってしまいました（苦笑）
これがスランプというモノなのでしょうか？

因みに、内容は時系列を完全に無視したモノなので、読まなくても
本編になんら影響はありません。

自分の考える「デレた千冬」を書きたかっただけなので、そんな
のは千冬じゃない と思った方は、ブラウザバックをおすすめしま
す。

と、前置きが長くなりましたね。

このような拙作ではありますが、今回も楽しんでいただけたら幸い
ですm（ ）（ ）m

幕間・PV10万超記念・

織斑 千冬。彼女は、第1回モンド・グロッソの優勝者にして、世界最強のIS操縦者である。それは、現役を引退した今でさえ言われており、半ば伝説的な人物として人々から尊敬と畏怖の念を持たれていた。

そのためかどうかは分からないが、彼女は 女 として扱われることはあっても、 女性 として他人から接してもらえたことが数少ない。年齢を重ね、大人になってからは、彼女の性格も相俟って更に拍車がかかっていた。

これは、そんな彼女が 女性 らしい一面を垣間見せるお話である。

「ちょっといいか？」

「うん？ 何ですか？」

ある昼下がりの、IS学園1年寮長室。

そこで千冬は、最早定番となった日常を過ごしていた。

「お前は写真の現像は出来るか？」

「いきなりですね」

「いいから答えろ」

「あー、必要な機材とかがありますが、なくても出来ないことはないですね」

そんなまったりと過ごしていたある日、彼女はその日も部屋に呼んでいた、自身の大切な者に対して、唐突に質問を投げかける。それを受けた相手は、苦笑いを浮かべた後に少し考える仕草を見せ、答えを返してからフツと微笑んだ。

「そうか、なら丁度良い。写真を撮るぞ」

「本当にいきなりですね。まア、俺は別に構いませんけど」

それを聞いた千冬は、ニヤリとした笑みを浮かべると、また唐突に話を切り出す。

それは今に始まったことではないのか、対する相手も慣れたような雰囲気ですう返すと、テキパキと掃除を終わらせて千冬の隣へと立ち並んだ。

因みに、この寮長室は千冬専用の部屋であって、この少年が生活している場ではない。

が、彼女は仕事関係などは完璧なのに、生活面といった部分は

物臭 という単語がピッタリなのだ。

そのため、少年はちょこちょこ彼女の部屋を掃除することが日課となっていた。

「ああ、カメラなんだが、データを残したくないのでな。デジタルではなく、一昔前のフィルムタイプのを頼む。購買に行けば、そのタイプのインスタントカメラがあるだろう」

「分かりました。それなら俺も現像出来そうですしね。じゃあ、今から買ってきて来ます」

話が逸れたが、これからのことを2人してサクサクと決めると、早速行動を始める。

普通なら渋るようなことでも、この少年はそんな素振りを一切見せずに応えてくれた。

そのことに、彼女は内心で微笑む。それは、彼の性格故か、それともそんなことを説明するでもなく、以心伝心が出来ているからか。自分も変わったなと思いながら、彼女は部屋を出て行く少年の背中を見ていた。その表情に、穏やかさを浮かべながら……。

それから数日後、千冬の部屋に新たな写真が飾られることとなる。その写真の構図は、至って普通の隣り合って写っているというモノだが、彼女を知る者が見たら大変驚くようなモノであった。写真の中の彼女の表情は、相変わらずの仏頂面であったが、見る者が見れば、それが普段より随分と穏やかなモノであることが分かるからだ。

しかし、それくらいならば、普通は取り上げたりはしないだろう。織斑 千冬 からしたら、これはとんでもないモノかもしれないが、女性らしいというにはまだインパクトが足りない。

そのインパクトのある答えは、もう一枚の方にあった。

フィルムは撮る前に言った通り、現像が終わってからネガごと受け取ると、証拠隠滅と言わんばかりに焼却処分している。そのため、真正正銘 世界に一枚しかないモノだ。

それは、彼女が常に肌身離さず持ち歩いている。だから、それを目にしようとするならば、彼女から奪い取らなければならない。ここまで言えば分かると思うが、それは常人からしたら不可能な事だ。そこまで大切にしている と言えば聞こえは良いが、のは、それが彼女の独占欲から来たモノであり、尚且つ他人に見られたくないというもある。

その写真には、彼女と少年の2人が写っていた。それは先程のモノと何ら変わりはない。

だが、その構図に問題があった。隣り合っていた先程とは違い、彼女より少しだけ背が高い少年は、彼女の後ろ側に立っている。そして、両腕を彼女の前に回し、何と後ろから抱き締めるような形になっているのだ。更に、少しだけ頬を赤に染めながら、その唇を彼女のこめかみに触れさせているではないか。

それだけを見れば、なんて暴挙を冒しているのだと思われるかも

しれない。写真に写る彼女が、鬱陶しい反応をしていたら、それが当たり前を考えになっていただろう。

しかし、現実とは違っていた。写真に写る千冬。彼女は満更でもない表情をしていたのだ。否、満更どころではない。とても幸せそう（・・・・・・）だ。

その頬に、普段では絶対差すことのないであろう赤みを見せ、いつも鋭く上を向いている眉尻は垂れ下がり、瞑っている目元と口角は互いに緩やかな弧を描き、抱き締められている腕に手を添えている。仮に、その写真の彼女に吹き出しを入れるとしたら、“キヤー”というのがピッタリと当てはまるであろう。それほどまでの喜びよう加減であり、これ以上の幸せなど有り得ないといった表情だ。もし、彼女の家族である 織斑 一夏 がその写真を見たら、あまりのことに現実逃避に走るであろう。それだけその写真は、インパクトのあるモノなのだ。

「フッフ……」

そんな写真を、今日も彼女は自室で眺め、穏やかな笑みを浮かべている。

IS学園では、いつどこでどのように目が光っているか分からない。そのため、その写真をひた隠しにしたい彼女は、それを自室でしか取り出していないかった。

「本当に……、私も変わったな」

それに写る少年を見ながら、彼女は表情はそのままに誰に言うでもなくそう呟く。

今まで 女 として扱われたことは多々あったが、ここまで 女性 として扱われたことはなかったと言い切れるから、それがとても新鮮で、心地良く感じれているのは当然のことなのだろう。

良い意味で、 織斑 千冬 という存在は、この少年に変えられたのだ。

「まア、それも悪くはない……か」

昨年までの自分なら、まず抱くことはなかったであろうモノを感じながら、彼女はゆつくりとその時間を楽しむ。

周りから何を言われようが関係ない。今の自分は、とても幸せなのだ。

それを与えてくれた少年は、もうすぐここに来るだろう。公私混同をするつもりはないので、普段の学園生活では出来ないが、この場では彼の前で 自分 をさらけ出すことが出来る。

普段と同じ仏頂面ではあるが、見る者が見れば分かるであろう変化を見せながら、彼女は持っていた写真を懷に仕舞うのであった。

幕間・PV10万超記念・（後書き）

ハイ、何を伝えたいのか分からない内容だったような気がするのは、自分だけでしょうか？（苦笑）

と、まア自分が考える　デレた千冬　は、このような感じだと思つて下さい。

普段は何時も通り凜としているが、フとした拍子に自分をさらけ出している　と表現したつもりなんですが、上手く伝わりましたかね？（苦笑）

因みに、これは自分の経験談なのですが、ああいった　普段から凜としている女性　ほど、その内に脆さを抱えているものです。

ただ、それを表に出さないだけで、強くはないのです。
なのに、周りは気付かずになんかそういうイメージを持つから、ドンドンと辛い状況になっていくと。

だから、一度その壁を越えて内側に入ってみたら、結構甘えん坊だったりするんですよ？

けど、流石にそれはやり過ぎかと思って、あれくらいに自重しましたが……。

と、また後書きが長くなってきましたね（苦笑）

では、このような拙作をここまで読んで頂き、誠に有難うございましたm（――）m

今回はこれくらいにして、また次話にてお会いしましょう。

第9話 ボーイ・ミーツ・ボーイ・少年の日常・（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません（苦笑）

何とか7月中にと頑張った果てに、最後は力尽きましたorz
なので、色々と変な文章になっているかもしれない。

ところで、話が変わりますが、自分は前回の自分なりに書いた
デレた千冬に関して、かなりの批判を覚悟していたのですが、そん
なことはなかったので少し安堵していたりします。

まア、その変わりに賛同もなかったので、別にどうでも良かったの
かなと落ち込んでいますが（苦笑）

まア、自分で言っておきながら難ですが、そんな話は置いといて、
今回は何時もより少しだけ長めになっています。なんと、第2話以
来の1万字超え！

でも、クオリティは遥かに下かもしれません（苦笑）

と、これ以上長くなるといけないので、前書きはこれくらいにして
おきます。

m では、拙作ではありますが、楽しんで頂けたら幸いですm（――）
（――）

第9話　ボーイ・ミーツ・ボーイ - 少年の日常 -

『諸君に問う。ISという兵器が登場してから、一部の者は優遇され、一部の者は冷遇を受けて、辛酸を嘗め尽くしている。ISを維持するために“女尊男卑”が更に進行化し、それは……政治・経済の場さえも侵食し始めている。このままでは、人々は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。それを許して良いのか？ 世界はこのままで良いのか？ ……答えは“否”だ。諸君……、これを“良い”としないのであれば……、皆で世界を“正常”に戻そう』

ISが世界的に認められてから少しした後。様々な軍や企業からあぶれた者達は、この声明を機に一斉蜂起した。

銃声は新たな銃声に埋もれ、爆風は更なる爆風によって掻き消される。戦う者も、巻き込まれた者も関係なく、様々な命が散っていった。

本来、抑止力として働くであろうISは、条約という鎖に縛られ、全く機能しない。これは、何たる皮肉だろうか。

圧倒的な力が使用されない戦場は、何時しか泥沼となつて世界に蔓延っていた。

それに便乗するような形で、裏の者達も様々な暗躍をみせる。そのため、表も裏も関係なしに、戦火は際限なく広がっていった。

「止める！　こんな事をしなくても、もっと他に道はないのか!？」

そこに舞い降りるのは、絶対的な力を持った蒼。

それは、散りゆく命が認められないのに、自らも命を刈り取らねばならないジレンマを抱えた、もがき苦しむ者だった。

『What are you fighting for?』

何のために戦うのか。彼自身が 戦場 へ問いかけ、また彼自身にも問いかけられた言葉である。

その 答え は、十人十色だった。家族のため・食べるため・生きるため……。彼の場合は、 命 を守るため。それらは、得てして 願い とも取れただろう。

戦場 では、そういった様々な 答え が交錯し、時には成就されずに散っていった。

「何で現在を懸命に生きている人達を巻き込むんだ!？」

見方によれば、それらは美しく映ったのかもしれない。

だが、巻き込まれた者達 からすれば、そんな事はなかった。

そういった 答え とは無関係な 命 さえも、それらと共に散ってゆく。堪ったモンじゃない。

彼は、それが堪らなく悲しかった。

「こんな事をしていて、本当に世界が変わると思っっているのか……！」

しかし、そんな事などお構いなしに時は流れ、彼が 戦場 を重ねる度に散ってゆく 命 も増えていく。

それでも、 何もしないよりはマシだ と自身を奮い立たせ、彼は世界中を巡っていった。

「この先に……、本当に 光 はあるのか……？」

その果てには、 絶望 しかない気付かないままに……。

6月の頭の日曜日。

六久 満の朝は早い。辺りにはまだ暗闇が残る午前5時。彼はその時間帯に必ず目が覚める。それは、眠りに就くのがどれだけ遅くなるうとも変わらなかった。小さい頃から続けてきた習慣というモノだろう。身体 がそれに慣れているのだ。と言っても、人間の三大欲求にもある通り、睡眠 は大切なモノなので、彼はなるべく6時間は眠るようにしているが。

「よっ……と」

目覚めると、彼はまず寝そべったまま手足を宙に浮かせ、ブラブラとばたつかせる。これは、眠っている時に滞ってしまった血流をなるべく正常に戻すための行為だ。別に必ずしもやらなければならぬというワケではないが、毎朝の儀式的な感じでやっている。

それに5分ほど費やすとベッドから起き上がり、坐禅を組んでイメージトレーニングを始める。

彼は争いから逃げ出してはいるが、それと鍛錬を積むこととは何

ら関係はない。それに、逃げ出したものの、未だに兵器に関わってしまっているの、鍛えておくに越したことはないのだ。

イメージするのは 戦場に居る自分。初めのうちは、逃げ出した輩が何をと自嘲していたが、緊張感を張り巡らすにはそれくらいが丁度良い。

「さて……と」

15分ほどすると、坐禅を解いて寝間着からトレーニング用の服へと着替える。イメージトレーニングだけで強さを獲得、又は維持することが出来ると思っほど、彼は慢心していない。日々の積み重ねが大事なのだ。

「（今日も1日、頑張りますかね……）」

ここは、かつて自分が居た 戦場 とは全く違う。仮初めではあるが、平和な場所なのだ。それを十分に噛み締めながら、彼は何時ものように外へと出て行った。

「フツ……フツ……」

外に出て、彼がまずするのはランニングである。

因みに、これには彼なりの 凝り が施されていた。

ただ走っているだけでも効果はあるのだが、それだけでは薄いと感じた彼は、自身の 力 を使って、身体に負荷を与えているのだ。イメージするのは 重石。それを引きながら走っているとイメージし、 力 がそれを彼の身体に擬似的に経験させている。

初めのうちはかなりしんどかったが、慣れた今はそんなことはなく、イメージしている 重石 の重さも、大の大人を引いているのと変わらないほどに成長していた。

「……ハッ！……フッ！」

そんなランニングを30分ほどした後、彼は人気のない所まで移動して箒から貸してもらった竹刀を手を持つ。

それから、それを型に沿いながら軽く振り始めた。振り始めは軽い風切り音だったが、やがてそれは鋭い音に変わり、最終的には圧縮された空気が撃ち出されているような音へと変貌する。

因みに、ここで 型 と表現したのは、それなりの理由がある。

型 というのは、全ての 武術 の流派に共通してあるモノであり、かなり大切なモノなのだ。

だが、日本という国の中で言うと、江戸末期 から 明治初期 にかけて、その重要性はあまり語られなくなった。

何故なら、 型 というモノを突き詰めていくにはセンスと時間 が必要なので、それで強くなれる人が限られていたからだ。

それにより 型 にかえられる時間は次第に薄れていき、 武 の動きは変わっていった。これが、 武道 の始まりである。現代 という 剣道 ・ 柔道 ・ 合気道 というのは、明治以降に生まれたのだ。

この 武道 と 武術 は同じようで大きく違っている。近頃、 剣道 と 剣術 の違いを問われると、相手の命を奪うための 剣 が 剣術 だと勘違いしている人も居るようだが、それは全く違うのだ。剣道だって、防具無しで打ち合えば痛いし、打ち所が悪ければ命に関わるだろう。

なら何が違うのか？答えは、 武術 とあるように、 術 とは本当に 術 のような体の動かし方をするところだ。

その 術 のような体の動かし方は、現代の 武道 では完全に失われてしまっている。

ただ、ここで勘違いして欲しくないのは、作者は別に 道 の人達を決して弱いとは思っていない。実際に、剣道や柔道の全国優

勝者など、かなりの強さなのだろう。

だが、昨今の二次創作などに偶にある、剣道の全国優勝者が過去の戦場にトリップして無双する というようなモノには、ちょっと待てと言いたい。

戦場に出ているのだから、それなりに 武術 を積んでいるであろう人達に対して、そう簡単に無双することが出来るなど、作者には到底思えないのだ。

理由として、現代の剣道の達人が、柔道の達人と 素手 でやり合ったら、剣道の方が負けるであろうが、昔は違う。昔の剣客は、素手でも物凄く強かったというエピソードが沢山あるのだ。

ここで、 そんなのはホラ話だ といった声もあがりそうだが、それにもハッキリと 違う と言える。事実、そんな妙技を 決まった条件下ではあるが 使える人間が、現代にも居るからだ。

それを実戦で使えたら という条件が付くが、昔の達人のエピソードは、強ちホラ話とは言い切れない。

科学なんかでは解き明かせないモノは、まだ沢山あるのだ。

「ツエア！」

話が大きく逸れてしまったが、 剣術 を嗜む満は、その 型 を大切にしており、それをしっかりとこなしてからシャドーへと移る。その動きは、まるで舞を踊っているようなモノであった。それを午前7時まで続けて、彼のトレーニングは終了する。

これが六久 満の起床からの流れであった。

トレーニングが終わると、彼は自室へと戻り、シャワーを浴びてから食堂へと向かう。これは、日によって自分で作ったりとまちまちであるが。

「悪い、満。今日はちよつと休みを貰うわ」

「む？」

入学してからよく連んでいる一夏と朝食を食べていると、彼は不意にそんなことを言われた。

因みに、2人は朝から結構な量を食べている。

「何だ？ 体調でも悪いのか？」

「いや、久しぶりに家を見て来ないといけないと思ってな。ついでに友達ん家にも寄ってこようかと」

「そうか……。まア、俺は別に構わんよ。強制するような事でもないしな」

かなりの量の料理を消化しながらも、最低限のマナーは守りながら2人は会話をしていた。

その会話は、今まで毎日してきた、一夏の訓練と勉強についてのことである。クラス代表に決まってから、一夏はなるべく己を鍛えようと、休みの日でも精力的に活動していたのだ。

が、流石に自宅をいつまでもほったらかしにしておくわけにはいかないらしく、今回は学園の外へと出ることにしたようだ。

対する満も、強制的に鍛錬を積ませるのはよくないと思っており、それに反対する素振りは見せない。

「サンキューな、満！」

「いや、礼を言われるようなことではないだろ？　ところで、箒ちゃんやセシリア、鳳にはそのことをもう言っているのか？」

「いや、朝飯食い終わってから言おうと思ってる」

「そうか……。まア、頑張れ」

「？　何を頑張るんだ？」

それから、自分以外にはもうそのことを伝えているのか気になった満は、それを一夏へと尋ねるのだが、一夏はあっけらかんと答えを返してきた。

その答えを耳にした瞬間、満は近い未来に一夏は理不尽な目に遭うだろうと確信し、彼へ同情の言葉を投げかける。

勿論、朴念仁を極めた一夏がその言葉の意味を理解することなど出来るはずもなく、頭に？を浮かべながらその日の朝食は幕を閉じるのであった。

朝食を食べ終わると、満は学園内を宛もなく歩き回り始める。無論、それが日課というワケではない。

何時もなら、この時間帯は一夏に勉強を教えるか、彼のISの訓練を見学しているのだが、彼が学園外に出て行ったため、文字通り予定がなくなったためだ。

途中、どこから一夏の悲鳴らしき叫び声が聞こえてきたが、幻聴だと無視することにした。

「すみませんね、手伝ってもらって」

「いえ、俺が好きでやっている事ですから。それに、俺だって男なんですから、力仕事くらいいつでも頼って下さい」

「ウフフ……。ハイ、有難うございます」

歩き回る最中、フラつきながらいかにも重そうに資料を運んでいた山田教諭を手助けしたり、彼から見たら用務員らしくない用務員を手伝ったりと、人助けに奔走する。

これは、IS^{（イ）}学園に入学してからの日課に近い事柄であり、日常

的に彼は困っている人を手助けしていた。

勿論、恩着せがましくではなく、ただ純粹にだ。それが幸をそうしてか、彼は学園内の教職員や同級生・上級生に関係なく、多くの人達からなかなかの人気者になっている。織斑教諭のカウンセラーとして比較的簡単に認められたのも、この要因が大きい。

そんな感じで、彼は休日の午前を過ごしていくのであった。

interlude in

「で？」

「で？ って、何がだよ」

所変わってIS学園外。場所は五反田家。この家の長男である五反田 弾 は、中学時代の一夏の友人であり、中学3年間よく連んでいた。

一番身近な友人という事もあり、一夏は家の様子を見るついでに

彼の家へと寄ったようである。

「だから、女の園の話だよ。良い思いしてんだろ？」

「してねえつつの」

そんな友人の部屋にて、彼等は格ゲー対戦の真っ最中であつた。その最中、弾が一夏へと軽く問い掛ける。

因みに、この弾は他の男の例に漏れず、IS適性はなかった。

そのため、IS学園の実態はよく知らず、女の園と思っているようである。

体験してみたらたまつたモンじゃないと、一夏は何度もそれを否定してきたのだが、どうやら効果がないようだ。

と言つても、それは彼が超が付くほどの鈍感な朴念仁であり、それを弾も知っているからこそ、その否定を信じないのだが。

「嘘を吐くな嘘を。お前のメール見ているだけでも楽園じゃねえかなにそのヘヴン。招待券ねえの？」

「ねえよバカ」

一夏の鈍感が治らない限り、体験させないと弾は納得しないのだろつ。

だが、弾はIS学園に入学することは出来ないのです、この擦れ違いは永遠に続くと思われる。

しかし、もし仮に体験出来たとしても、五反田 弾 という男なら本当に楽園と思つてしまうかもしれない。

「前から言ってるけど、最初は本当に動物園のパンダみたいな扱いだつたんだぞ？ 満が居なかつたらと思うと、ゾツとしねえよ」

「満って、あの世界で2番目にISを動かした奴のことか？　メルでも名前出てたけど、仲良いの？」

「ああ、IS学園（あんな場所）でたった2人だけの男だからな。入学早々に話し掛けた。実際、俺に勉強を教えてくれたりアドバイスをくれたりと、なかなか良い奴だったしな。すぐに仲良くなったよ」

「へえ……。つうかそいつも女の園を満喫してんだよなア。何でそいつが動かせて、俺は動かせなかったんだよ……。チクショー！」

そんなことが頭に浮かんでくるも、すぐにそれを掻き消して、一夏は満を掛け合いに出して今まで再三してきた説明をまた始めた。が、弾はそれを全く意に介していない。

「だからそんな良いモンじゃねえんだって。それに、アレだ。鈴が転校してきてくれて助かったって感じてるし。満が居るにしても、話し相手本当に少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ……」

そんな弾を説き伏せるために、一夏は今度は鈴の名前まで掛け合いに出した。

朴念仁な彼は、それで幾分か説明もつくだろうと思っているようだが、実際は違う。

中学の頃から、鈴の態度はあからさまだったみたいで、彼女の想いを知っている弾は、その名前を聞くと徐にニヤニヤとニコニコの中間みたいな表情を浮かべた。

「うん？ 何だ？」

「いや、お前……鈴のことは」

「お兄！ お昼出来たよ。さっさと食べに来なさ」

その表情が気になり、一夏は何かと問い掛ける。

それに対し、弾はそのまま鈴の話題を広げていこうとするのだが、突然の来訪者によってそれを遮られた。

ドカンとドアを蹴り開けてきた少女。彼女は弾の妹、五反田蘭。彼等より1つ下の、有名私立女子校に通う中学生である。

「い、一夏……さん！？」

「あ、蘭。久しぶり、邪魔してる」

やはり女子というのは、自宅だとラフな格好になるのだろうか。

現在の彼女の服装は、ショートパンツにタンクトップという機能性を重視したモノであり、髪型も肩まであるそれを後ろでクリップに挟んだだけの状態である。

少し前までの一夏なら、そのような格好の女の子を見たらどきまぎしていただろうが、それはIS学園の女子達にも当てはまっていたため、今ではもう慣れてしまっていた。

だからだろうか。彼の反応は淡泊なモノだ。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？」

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見に来たついでに寄ってみた」

「そ、そうですか……」

話が逸れたが、一夏の姿を確認した蘭は、慌ててドアの影に隠れ、少しでも身嗜みを整える。何を今更といった感じだが、彼女は一夏に少しでも良い自分を見せたいのだ。

この反応を見る限り、彼女が一夏に特別な感情を抱いているの是一目瞭然だが、鈍感王の名を欲しいままにする一夏は全く気付かず、ただ何故ここに居るのかを淡々と口にするに止まった。

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ」

「……なんで、言わないのよ……」

「い、いや、言ってなかったか？　そうか、そりゃ悪かった。ハハハ……」

「??」

そのやりとりを見ていた弾が、マナーを無視して部屋に来た妹を窘めようとするが、それは視線による一閃によって遮られる。どうやら、彼は家庭内でのヒエラルキーの底辺に居るらしく、それだけで黙らされてしまった。

まるで射殺す（いころす）かのような視線を送り、何やら小声で話し合う兄妹の横で、一夏はどうしたのかと首を傾げる。

「あ、あの、良かったら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……」

そんな一夏に気付かず、兄妹の睨み合いは続いていたが、徐にそれが終わると、蘭が少しだけ頬を赤に染めてそう切り出した。彼女の言つとおり、昼食はまだであつた一夏は、素直にその言葉に甘えることにする。

その返事を聞いた蘭が、パタンとドアを閉め、そそくさと部屋を後にしたのを見送ると、一夏達も昼食を食べるために部屋から出るのであつた。

五反田家は食堂を経営しているらしく、必然的に一夏はそこで昼食をいただくことになる。中学時代によく遊んでいたためか、それが分かつている一夏は、勝手知つたるなんとやらと、迷うことなく五反田家正面の食堂へと入っていった。

すると、そこでいつの間にもやら可愛らしい服装に着替えた蘭が目に入る。どうやら、一夏が居るといふことで、目一杯のおめかしをしたようだ。

「あの……、一夏さん。ゆっくりしていった下さいね」

「着替えたんだな。どっか出掛ける予定？」

そんな彼女を交えた昼食。目の前に出された定食を、一夏は黙々と食べていた。

そんな折、蘭が彼へと話し掛ける。それを受けて、明らかに格好が変わっていたため、一夏はそれからくる疑問を尋ねてみた。いくら鈍感王でも、明らかに格好が変わっていたら気付くモノは気付くようだ。

「あつ……、いえ、これは、その……ですねっ」

が、彼がいけるのはそこまで核心に気付くことはない。蘭も蘭で、先ほどの霰もない姿を見せたくなかったと素直に言えば良いのに、何かが邪魔をしてそれを口に出ることが出来なかった。

「あつ！ デート？」

「違います！」

「えっ？」

故に、一夏は地雷を踏む。自分に向けられる好意に対して、神憑りの鈍感さを誇る一夏に、蘭の心情など分かるはずもなかった。テーブルが割れんばかりの勢いでそれを叩いて即時否定をする蘭。まさかここまで否定されるとは思ってもいなかった一夏は、少しキョトンとして彼女を見る。

「お前って学校でもその調子なんだろうな」

そんな2人のやりとりを近くで見聞きしながら、弾はお茶を啜って一夏へと言葉を投げかける。中学時代と同じ、否、それ以上の朴念仁と化した友人に呆れ果てているようだ。

「うん？ 何のことだよ」

「何でもねえよ。鈴も気の毒に……」

呆れられているのは分かるものの、その理由が分からない一夏は弾へと説明を求める。

対する弾は、この朴^{バカ}念仁に何を言っても無駄だと思ったのか、もう1人の友人である鈴に同情していた。

「??」

「それより一夏。鈴と、えーと、誰だっけ？ ファースト幼なじみ？ と再会したって？」

説明がなく、更に何故に鈴の名前が出て来るのか分からない一夏は、暫く思案顔を見せていたが、どれだけ考えても彼が答えに辿り着くことはない知っている弾は、話題を変換しようと彼へ話を振る。

「ああ、筈な」

「ホウキ……？ 誰ですか？」

「ん？ 俺のファースト幼なじみ」

「因みに、セカンドは鈴な」

「ああ、あの……」

見事にそれに引つかかった一夏は、自身の1人目の幼なじみの名前を口にした。

IS学園に通っているということは、女子だということが当然なので、一夏に想いを寄せる蘭が反応を見せる。

その後、一夏が箒と少し前まで同居？していたことを何となしに口にしたため、蘭が過剰な反応を見せた。それにより、彼女の怒りの矛先が、弾へと向けられる。

哀れ、ヒエラルキーの底辺に居る弾は逆らえるはずもなく、逃げの一手として一夏と外へ遊びに行くようにしたもの、ただの時間稼ぎにしかならなかったのだった。

i n t e r l u d e o u t

昼食を食べた後、満は再び暫く人助けを続ける。と言っても、これは彼が困っている人を探したワケではなくて、頼まれたからであるが。

その内容は様々で、中には裁縫を頼まれたりもした。流石に、その時は満も少しばかり驚きの表情を浮かべた。

「……随分と疲れているようですね」

「うん？ 別にそんなことはないが……」

そして、夕日が辺りを照らし始めた今、彼は織斑教諭と話をしている。

因みに、その相手をしている場所は、彼女の部屋である寮長室だ。クラス対抗戦が終わってから、ここで話をすることが多くなっていた。

無論、そうなると周りが五月蠅かったのだが、それは織斑教諭がごり押しで封じ込めてしまった。まア、その代償として満はハーブを集めて、彼女の診察環境をより一層良くしたと、周りに見せなければならなくなったが。

それはともかく
閑話休題、生徒は休日なのにも関わらず、そのような時間まで働いていた教師という職業は、やはり大変なのだなど、彼は内心で關心していた。

が、織斑教諭の小さな変化を見逃さず、それに対して言及はしておく。

それを耳にした織斑教諭は、彼の目を見据えながらいつもの仏頂面で何でもないので返した。

「一応、それなりの時間を過ごしてきたんです。変化が見極め難くても、分かるんですよ。それとも、自覚がないだけですか？」

「ふむ……、お前がそう見えるのなら、本当にそうなんだろうな……」

その返答に、満は一瞬だけ顔をしかめるも、それを悟られることもなく再び問い質す。

そんな彼の心遣いを感じた織斑教諭は、本当に自覚がなかったのか、小さくそう呟いた。ある程度、彼の言葉を受け入れるくらいは、信頼を寄せているようだ。

「精神の疲れは分かりにくいですからね。心当たりはありますか？」

「それはありすぎるな。まア、強いて挙げるならこの間のクラス対抗戦のことか……」

そのことに、満は内心で若干の安堵を覚えるも、心のケアをするために続けて質問を投げかける。

対する織斑教諭は、ニヒルに笑うと皮肉氣に一言口にし、最後に自身が今一番気にしていることを挙げた。

「ストップ！ それって機密事項じゃないんですか？」

「なに、私が良いと言うのだから別に良からう。まア、他言しないように誓約書は書いてもらうが」

「……面倒事はなるべく避けたいのですが」

「何だ？ 私の心のケアをしてくれるのではなかったのか？」

挙げられた理由が理由なため、満は慌ててそれを止めるも、織斑教諭は意にも介さない。更にはニヤリと不敵な笑みを浮かべて逃げ道を塞ぐうともしてきた。

「……分かりましたよ」

「よし。なら、これにサインをしろ」

それから、少しばかり睨み合いが続くものの、最後は満の方が折れて溜め息を吐く。

彼のそんな様子を見て気分を良くしたのか、織斑教諭はその笑みを深くしながら、1枚の紙を取り出した。

それを見て、彼は最初からこうするつもりだったんだなど、内心で苦笑いを浮かべる。

「……これでお前に話しても何ら問題はないな。早速だが、この間のあの謎のIS。あれは無人機だったのだ」

一字一句間違い無くサインされた誓約書を見て、問題が無いことを確認すると、織斑教諭は訥々と語り出した。

「……あまり驚かないのだな」

「いや、噂にも挙がってましたからね。俺自身、あれは何かあったと思ってたんで、心構えは出来ていましたから」

が、自身の言ったことを無言で受け止めている満に対して、彼女は少し顔をしかめ、1つ問い質す。

対する満は、分かっていたことではあったものの、自身は知らない身としていたはずなのに、薄い反応をしてしまったことに内心で焦りながら、それをおくびにも出さずに返答を返した。勿論、その返答に嘘はない。

「フン、まあ良い。続けるぞ？　それで、その対応に追われていたのが原因だと思われる」

それを若干訝しむものの、信頼を得ていたためか、彼女は流ししてくれる。そのことに、大きく安堵する満。無論、それを悟られるようなことはしないが。

「で、だ。それに対してのお前の意見が聞きたい」

「俺の？　一介の学生でしかない俺の意見なんて、参考になるんですか？」

「一介の学生らしからぬ知識量を持っていて何を言う。なに、聞くのは私だけだ。会議で発表しようとか思っとらん」

「……分かりました」

そして、続けられる会話。そこから暫くの間、満は無人機がどのような動きをしていたか等を織斑教諭から聞き出していた。まあ、彼自身は知っていることだらけであったが、怪しまれないように真剣に聞き取っていく。

「有難うございます。で、結論から言わせてもらいますと、それは普通の企業が創ったモノではないですね」

「何故そう言い切れる？」

「それは簡単ですよ。もし普通の企業が創ったのなら、まず間違い無く世間に大々的に発表しているはずですから。それに、もし仮に性能を確かめてから発表しようとしていたとしても、IS学園を襲撃するのはおかしい。ましてや、シールドで外を遮断していたクラス対抗戦を狙うっていうのはね」

そう、彼自身あの時から何故IS学園（この場所）を襲撃したのか、疑問に思っていたのだ。

ISが出現してから広がっていった 女尊男卑 という風潮。その理由は、ISが女性にしか扱えないというところに集約される。

仮に、普通の企業がそういったモノを創るとしたら、開発チーム、特に上層部には女性はいないだろう。何故なら、無人機そんなモノが完成したら、自分達の優位性がなくなってしまうから。そこまでいかなかったも、弱くなるのは分かりきったことだ。そんなことも分からない阿呆が居ると思えない。

だから、開発者、若しくは開発チームは男性に絞られる。開発する動機は簡単だ。

『女尊男卑 という馬鹿げた風潮をなくしたいから』
これだけで十分それに値する。

しかし、もしそうだとしても、襲撃の件に関しては説明がつかない。何故なら、IS学園（こんな場所）を襲撃するよりも、自分達の国に技術を提出して、開発・研究をそちらにシフトしてもらった方が効率的だからだ。技術を独占したかったということも考えられるが、それだと理由が弱い。

「だから、アレを送り込んできたのは、何か後ろめたいことがあるような輩だと思います。それに、使われてコアは未登録のモノだったんでしょう？ そこから考えられるのは……」

「分かった、もうそれ以上は言わなくても構わん……」

織斑教諭から無人機に関しての情報を聞き終えてから、満は自身の考えをつらつらと述べていく。

そして、篠ノ之 束に関して言及しようかといったところで、織斑教諭はそれを遮った。

彼女自身、その考えには至っていたものの、心のどこかでそれを否定していたようだ。

親友である篠ノ之 束が何を考えているか分からない と言つても、昔から殆ど何を考えているのか分からなかったが でいたから、それが想像以上に負担になっていたらしい。

「（あー……、やっぱりこれを話したのは失策だったか？）」

臨床心理士として、心のケアをするはずが、余計な負担を負わせてしまったことに、満は酷く後悔する。

それから彼は、必死にその負担を軽くしようと、その日の残りの時間を全て彼女に宛てた。

こうして、彼の休日な終わりを告げていくのであった。

第9話 ボーイ・ミーツ・ボーイ・少年の日常・（後書き）

ハイ、今回はここまでです。

ただの日常生活の回なのに、どれだけ時間がかかっているんだって
いうね（苦笑）

ところで、いきなりどうでも良いことですが、サブタイトルのサブ
タイトル（？）のネタが早くも尽きてしまっていたりします（苦笑）
本当にグダグダな作者でスミマセン。

後、仕事を立て込んでいるので、次の更新もまた遅くなると思われ
ます。

なので、この場を借りて先に謝罪をしておきます。

このような拙作でも拝読して下さっている皆様、大変申し訳ござい
ませんm（――）m

では、後書きはこれくらいにして、また次話にてお会いしましょう。

拙作を拝読して下さっている皆さん、お久しぶりです。

本当に久しぶりすぎる更新で、申し訳ありません。

ただ、これほど長い間更新停止状態だったのに、拙作はまだ200件以上のお気に入り登録がされていました。

それは単純に考えれば、200人以上の方が拙作を楽しみにしてくれていたということなので、自分は感無量です。

さて、今回の話は何と3万字超えという長文になっています。

内容はまた原作再構成に近いモノとなっておりますが、それをもっと短く纏めたらもう少し早く更新出来たかもしれませんね（苦笑）

例によって長くなりすぎそうなので、前書きはこの辺りで。

では、このような拙作ではありますが、楽しんでいただけたら幸いですm（ー）m

さて、唐突であるが、織斑 一夏 と 六久 満 は、現在の世界にとってイレギュラーである。それは世間的にも周知の事実であるし、彼等も 一夏はどうか分らないが 十二分に理解している。

そこに問題はないのかと問われれば、答えは否だ。

ISは、今まで女性にしか扱えないとされてきたが、それを根本から覆したイレギュラー。それが2人揃って日本という国に居るのだ。

ISというモノが世界中に行き渡り、各国で研究・開発が進められている現在、他国からしたらそれは面白くないだろう。

そうなれば、どうなるか。答えは簡単だ。多少無理矢理にでも自国に引き入れたら良い。この考えに尽きる。そんなことをしたら非難を浴びることは分かりきっているが、それがどうでも良くなるくらい、彼等は異常なのだ。

だが、そこで問題になってくるのが、彼等の後ろ盾である。

織斑 一夏 の方は政府の他に、未だに世界最強の呼び声高い織斑 千冬 がそれとして着いている。彼を手に入れようとすれば、高い確率で彼女を敵に回してしまうだろう。流石に、世界各国からの非難の対応と同時に、世界最強を相手取りたいと思う輩は居なかった。

しかし、もう1人のイレギュラー、六久 満 はどうだろう。

彼は 織斑 一夏 と違って、政府以外の後ろ盾は 表ではだが ない。しかも、その日本政府というのは、少し圧力をかければ折れてしまうような弱腰だった。当の日本がそれを聞けば否定するかもしれないが、白騎士事件 の後の対応を見れば、明らかに分かるような事だ。アメリカを始めとする先進諸国に言い寄られ、自国にしか負担がかからないような条件で、IS学園という機関と、

それに追隨する規則規定を作ったのだから。

そんな弱腰な後ろ盾しかないのなら、諸外国はどうするだろうか？

「ク……、やはり 鴨が葱を背負ってる と思われる、か……」

答えは簡単だ。 織斑 一夏 よりも 六久 満 を狙う。ただそれだけ。

彼は、周りに迷惑をかけないため、偽造戸籍上でも自らを孤児としていたのだが、それが裏目に出たのだ。

孤児ならば、適当な理由をでっち上げさえすれば、諸外国の非難も何とか出来るかもしれない。後ろ盾である日本政府は弱腰だから、何とでもなる。

ISを起動してしまってから、学園に入学するまでの短い期間に、そんな事を考えている国々から送られてくるエージェントから数度の襲撃を受けた満は、それを去なした後に、苦笑いを浮かべながら呟いた。

それから、少しばかり周りを見渡す。

あえて相手の誘いにノリ、人通りの少ない場所へと入り込んでいたため、怪しい輩が居たらすぐに分かるからだ。

最も、彼の視力は異常で、2 km先まで見渡せるので、ISでならまだしも、人が扱う狙撃銃ならば、十分に射程圏は見渡せるのだが。

「…… 普通 に過ごすというのは、難しいモノだな……」

そして、見渡す限りでは狙撃手は居ないことを確認すると、満は弱々しくそう呟き、空を仰ぐ。

周りに乱立する建物の中から見えるそれは、現在の彼の心情とは違って、雲一つ無い蒼い模様をみせているのだった。

6月の月曜日。つまり、その週の最初の授業が始まる日。IS学園に入学してからおよそ2ヶ月が経った満は、その日の朝もいつも通り、朝食を摂るために学食へと赴いていた。

「で、アイツったらそんな事を言うのよ。鈍感にも程があるって思わない？」

「……」

だが、その日はその いつも と少しだけ違っていた。

普段なら、入学してから仲良くしている一夏と、その一夏に想いを寄せている3人娘の4人が、彼と一緒に食事をしているのだが、今はその内の3人が居ない。

なんと、朝の鍛錬を終えた満に、3人娘の内の1人から、2人きりでの朝食を誘われたからだ。

最初は彼も訝しんだのだが、何か相談事でもあるのだろうと思い、その申し出を快く受けた。頼み事をされたら、基本的に 断らない

彼からしたら、当然の事だろう。

「ちよつと、聞いてんの？」

「ああ、ちゃんと聞いている」

余談だが、この会話はきちんと朝食を食べ終えてからしている。満自身、物を口にしながら喋るような、マナーの悪いことはしないし、彼を誘った 凰 鈴音 自身も、そうだったことは徹底していたからだ。

今現在は、食事を終えて食後の一服と、互いに茶を啜りながら会話をしている。

いつも より少し早めに学食へと赴いているので、それくらいの余裕はあるのだが、先程からずっと黙っている満に痺れを切らしたのだろう。彼の目の前に居る鈴が、険しい剣幕で問い掛けてきた。満はそれに、内心で溜め息を吐きながら、それをおくびにも出さずに返答を返す。

「あー、一夏が鈍感なのは今に始まったことじゃないし、鈴もそのことは十分に知っているだろう？」

「う……、それはそうだけど……」

因みに、彼等はクラス別対抗戦が終わるまでは、特にこれといった接点がなかったのだが、話に拳がっている朴念仁（一夏）経由でそれなりに話すようになっていた。今では、彼女の要望により、気軽に 鈴 や 満 と名前で呼び合うような仲になっている。

話が逸れたが、周りに他の生徒が増え始めた中、茶を啜りながら始まった会話は、彼の予想通り相談事 というより愚痴だであつたので、とりあえず自身の考えを答えとして返した。

「それに、だ。何故俺にそんな話を話す？」

「何故って、一夏以外に男なんてアンタしか居ないからじゃない」

それから、更に疑問に思っている事を問いただしてみても、返ってきた答えが余りなモノだったので、満は内心で頭を抱える。無論、カウンセラー紛いな事をやっているために、それをお首にも出すワケがないのだが。

「俺は一夏とは違う。と、言うより、アイツみたいに鈍感ではないと思っっている。だから、そんな事を言われてもなァ」

「そんなの分かっているわよ。けど、何かアドバイスとかないの？」

「俺は色恋沙汰には疎い」

「いいい、色恋だなんて！ 別に私は一夏のことなんか……」

「まさか、バレてないとも思っていたのか？ 端から見たら、分かりやすいぞ？ まァ、一夏は当たり前で気付いてはいないようだな」

一夏ほど鈍くない。そんな当たり前のことを言いながら、満はストリートに言葉を吐く。

すると、鈴は顔を真っ赤にしながらそれを否定するのだが、対する満は、少し呆れたような表情で言葉を続けた。本格的なカウンセリングではないため、少し気が抜けていて、それが表情に出てしまったようだ。

「な、ななな、な……！」

「何で素直に気持ちを伝えないんだ？」

「そんなの……、恥ずかしいじゃない。それに、女は男から告白されたいもんなの！」

「朴念神　誤字にあらず　のアイツが、そんなことを思うか？　ストレートに気持ちを伝えないと、気付きもしないだろうに」

「うるさいうるさいうるさい！」

そんな満の言葉を聞いて、鈴は耳まで真っ赤にして言葉に詰まるのだが、彼はそんなことなどお構いなしに、今度はいつも3人娘に抱いている疑問をぶつけてみる。

すると、彼女は目線を泳がせながらと、語気を荒げながら返答を返してきた。

その返答が余りにも理に適っていないため、満は苦笑いを浮かべながら自分の考えを口にするのだが、鈴はそれを理不尽に突っぱねる。

「あ、アンタ！　まさか私の気持ちをアイツに暴露するなんてことは」

「それこそまさか、だよ。そんな野暮な真似はしない」

「それは本当でしょうね？」

「嘘は吐かん」

更に、目つきを鋭くして、疑惑を持った眼差しで満を睨みながら問いただしてくるのだが、彼はそれをバツサリと切り捨てた。色恋沙汰に疎いのは疎いのだが、一応、空気は読めるからだ。

「なら良いわ。じゃあ、私の気持ちに気付いてるんだから、これからは私の手助けをしてよね」

「戯け、自分の考えだけを押し通そうとするな。それに、最終的に選ぶのは一夏だ。アイツの幸せを願う者としては、誰を選ぶのが構わない。だから、誰かを贖はんかしないで、平等に手を貸すつもりだ」

「フン、まア分かったわ。だけど、私に一杯力を貸してよね」

「（コレは分かってないな……）」

食堂に人が増え始めたため、2人は手元にある茶を一気に飲み干し、この場はこれで最後と言った感じで言葉を交わす。その中で、満は全員平等に接すると言ったつもりなのに、まるで分かってないような返答を鈴はしてきた。

その事に満は内心で頭を抱えるも、ズンズンと1人先に行く鈴の後ろ姿を見ながら、追いかけてから説き伏せようとしても意味は薄いかと思い、そのまま自分も朝食をのせていたお盆を食堂のカウンターまで持って行く。

こうして、珍しい組み合わせの2人の朝の会話は、ひとまずの終わりを見せるのであった。

朝食を食べ終わり、鈴と別れた満は、一度自室へと戻っていた。

朝の鍛錬が終わってから直接、食堂に行っていたため、勉強道具一式を詰めた鞆を持って来ていなかったからだ。仮にそれを持って行かなかったとすると……、そこから先は彼が所属するクラスの担任を知っているなら、想像するに容易いはずだ。満は自ら折檻を受けるような、伊達や酔狂を持ち合わせているワケもないので、そのような事は絶対にしない。

「ん？ 満も今から登校か？」

「ああ、お前もか？」

と、いうことで、彼が鞆を持ってさあ登校だと部屋を出た所、一夏（ニブチン男）と出会った。

先ほどの鈴との会話があったため、満は苦笑いを浮かべそうになるが、それをこらえて、飽く迄自然に朝の挨拶を交わす。

「ああ。ちょうど良いや、一緒に行こうぜ」

「そうだな」

そして、別の予定があるはずもないので、一夏はそのままの流れで一緒に登校しようと提案してきた。満もそれを断る理由がないので、すんなりと受け入れる。

それから学園に着くと、周りが妙にざわついていた。更に、登校中から感じていたことだが、視線が一夏へと集中している。

当の一夏はそれに気付いている節は見当たらない。否、視られているのは気付いているが、何時ものことだと思っているようだ。

「おはよう。何盛り上がってるんだ？」

故に、彼は教室の戸が開くと、何時ものように朝の挨拶を口にする。

「あーっ！ 織斑君だ！」

瞬間、一夏が存在に気付いた女子の内の一部が、彼等の居る場所
教室の出入り口付近 に雪崩れ込んで来た。

「ねえねえ、あの噂ってほんと もがっ！」

そして、その中の1人が一夏へ何か尋ねようとするのだが、すぐに他の女子に取り押さえられ、一夏から引き剥がされる。

「い、いや、何でもないの。何でもないのよ。あははは……」

「バカ！ 秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし……」

それから、もう1人が大の字になって通せんぼし、一夏と満を教室の中へと入れないようにしてきた。

妙に息のあった連携ではあるが、巻き込まれた形の満からしたら、たまったもんじゃない。

「噂って？」

そうこうしている内に、一夏が先ほど一番に話し掛けてきた女子に尋ね返していた。どうやら、流石の一夏も先ほどの言葉は聞き逃さなかったらしい。

普通ならそれが当たり前なのだが、朴念神である彼にしたら珍しいことである。

「う、うん！？ 何のことかな！？」

だが、そんな珍しいことがあったとしても、一夏が一夏であることは変わらない。

そのため、追及しようとしても、更に連携を決められてすぐに撤退されてしまった。

「??？」

状況が全く飲み込めないためか、啞然としながら立ち尽くす一夏。

「……ハア。お前、また何かやらかしたのか？」

「へ？ 何で俺が問題児扱いになってんの！？」

「じゃあ、問題児ではないとでも？」

「……………」

その隣で、右手で目元を覆いながら、満は一夏へとツツコミを入れる。彼女達の行動を見たら、原因の一端は一夏にある事が、分かりきったことだからだ。

その言葉に、一夏は素早く反応して反論するのだが、かの有名な“燕返し”の如く鋭く返された更なるツツコミに、何とも言えない表情になって黙ってしまった。

「席に着け、ホームルーム H Rを始めるぞ」

暫くの間、2人は互いを見据えていたのだが、それは織斑教諭が現れたことで終わりを告げ、急いで言われた通り、自分にあてがわれた席に着く。

因みに、互いを見据えていた時、それを見ていた一部の女子が異常なほど興奮していたことに、彼等は気付いていない。どこからか、薄い本がどうだとかいう会話も飛び交っていたのだが、幸か不幸かそれにも気が付かなかった。

「では山田先生、H Rを」

「は、はいっ！」

それともかく
閑話休題、織斑教諭が現れたことにより、生徒全員が素早く席に着いて、H Rが始められる雰囲気となる。

2、3の連絡事項を言い終えると、織斑教諭は山田教諭へとバトンタッチした。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！」

『えええええっ！？』

バトンを受け取った山田教諭の開口一番の台詞に、クラス中が俄かにざわつく。それもそうだ。ここに居るのは殆どが噂好きの十代乙女。その情報網をかくぐって、いきなり転校生が現れたのだから。

「（転校生ということは、またどこかの代表候補生ということか）」

ざわつく周りを意にも介さず、満は1人そんなことを考える。別に彼は噂好きとはいえないので、それは至極真つ当だといえよう。

「失礼します」

ほんの少しだけ間が出来た後、山田教諭に呼ばれたのか、件の転校生が教室へと入って来た。

その姿を見て、周りのざわつきがピタリと止む。

何故なら、その転校生が、男物の制服を着ていたから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

教室へと入って来た転校生は、教壇へと上がり、にこやかな顔でそう告げて一礼する。

満を除くクラスの殆ど　一夏も含む　が呆氣にとられているのか、今のところ何の反応はない。

「お、男……？」

そんな中、誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々が居ると聞いて、本国より転入を　」

やけにシンとした教室に、その呟きは良く通ったのか、それを耳にしたシャルルは、その人懐っこそうな顔に嫌味のない笑顔を浮かべて、自分のことを軽く説明する。

礼儀正しい立ち振る舞いと、中性的に整った顔立ち。濃い金髪を首の後ろで丁寧に束ねて、体つきがともすれば華奢に思えるくらいのスマートさとくれば、大半の人の印象は、誇張じゃなく　貴公子といったところだろう。

事実、呆氣にとられていた人達が、その姿に見惚れている。

「（男？　なら、何故これまで騒がれなかったんだ？　隠していつい最近見つかったとしても、おかしな点がいくつもあるな……）」

その中で、満は1人だけ冷静にその転校生を 観察 していた。話を聞く限り、おかしな点がいくつもあつたからだ。

疑わしき点を見付けてしまったら、警戒をしてしまう。

自身が未だに奇特的な境遇だとしても、 普通 を目指している彼からしたら、これは直したい癖みたいなモノなのだが、どうも上手くいかない。

「きゃ……」

そのことに、彼は内心で苦笑いを浮かべていたのだが、それも束の間。周りの女子達の変化を見極めて、これから来るであろう衝撃に耐えるために、すぐさま耳を塞いだ。

『きゃああああああ つ!』

次の瞬間、巻き起こるソニックウェーブ。これは比喻でも何でもなく、実際に起こっていたと言っても過言ではない。何故なら、女子達が叫んだ瞬間に、窓ガラスが揺れたのだから。

「男子! 3人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれて良かった!」

それがひとまず収まると、次は女子一同の歓喜の言葉が次々と繰り出され、それはあつと言う間に伝播する。

先ほどの叫びといい、これだけ大きな声を出しているのに、隣のクラスや他の学年からまだ誰も覗きに来ないのはHR中だからだろう。

と言うより、仮に抜け出して来たとしても、織斑教諭に地獄を見せられるだけなのだから、そのようなことをする輩はまず居ない。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

その織斑教諭は、クラスの女子の反応を見て本当に鬱陶しそうに、そうボヤク。その途中、鋭い視線で満を睨むのも忘れない。恐らく、耳を塞いでいることに対しての注意だろう。

その視線を受けると、満は苦笑いを浮かべてすぐに手を耳からどけた。彼女を不機嫌にさせる必要など、今この場にはないのだから。

「ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

満が手をどけたのを見届けると、彼女は視線を通常時に戻し、手をパンパンと叩いてから行動を促す。どうやら、そこまで不機嫌にはならなかったようだ。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

そのことをゆっくりと安堵している暇はない。何故なら、もう行動が促されているので、そのまま教室に居ると、女子達と一緒に着替えなければなくなるからだ。

そのため、急いで男子専用の更衣室へと向かおうとしていたら、不意に織斑教諭が一夏へとそう言い放った。

それが耳に入った瞬間、満は内心で眉を顰める。何故、一夏個人に名指しで指名したのだろうか、疑問に思ったからだ。

「君が織斑君？ 初めまして。僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから……満！」

「っ！？ あ、ああ。今日は第2アリーナ更衣室が空いているはずだ」

それに思考が傾きかけるも、一夏から名前を呼ばれて意識を覚醒させた満は、一夏の席の辺りに居る2人へと近付き、そのままの流れで行動に移す。

一夏は状況に付いて来れてないシャルルの手を取ると、満の後ろに付いて教室を出た。

それにより、満は先ほどの疑問を頭の隅に追いやることに成功する。今この時に追及するような事柄ではないのは分かっているので、良いことなのだろう。

すぐ後ろでは、一夏がシャルルへと一通りの説明をしていたのだが、その時のシャルルの様子がおかしいと思い、満は再び内心で眉を顰めた。

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも六久君や織斑君と一緒に！」

しかし、それも束の間。その思考は耳に入ってきた、各学年各クラスから情報先取のため送られた尖兵の言葉により、一時中断を余儀無くされる。複数思考を使うという手もあるのだが、このために使うのは何か馬鹿馬鹿しく感じたので、止めておいた。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

そうこうしている内に、周りは武家屋敷と化している。今にもホラ貝を取り出しそうな雰囲気醸し出しながら、目の前には人が波のように押し寄せて来ていた。それにのまれたら最後、遅刻して彼等の担任からの厳しい折檻が待っている。

「織斑君や六久君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああ！ 見て見て！ 織斑君と手！ 手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！」

だが、そのようなことは武士と化した周りの女子には関係がない。興奮している彼女達は、今は話題の転校生と、数少ない男である満や一夏しか目に入っていなかった。

「こっちだ！」

「おう！」

「わわっ！？」

勿論、彼等にそれに付き合う義理などあるはずもなく、いち早く逃げ道 と言うのも難だが 確保した満の一言により、包囲網を突破してそのまま駆け出した。

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

「そりゃ数少ない男子が増えたからだろ」

「……？」

そして、目的地である更衣室へと向かう途中に、再び一夏とシャルルが話し出す。

状況が飲み込めていないシャルルに一夏が説明をするのだが、それを聞いたシャルルは意味が分からないという顔を浮かべた。

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦出来る男って、今のところここにいる3人しかいないんだろ？」

「あつ！ ああ、うん。そうだね」

「……………」

それを見かねたのか、一夏が更に補足をして、それによってやっと得心がいったように、シャルルは肯定の言葉を口にする。

一夏はそれを見ても何も思わなかったようだが、満は違った。シャルルの反応が明らかにおかしかったので、警戒するレベルを僅かばかり上げたのだ。走るペースを少しだけ落として、話し込む2人と併走しながら、横目でチラリとシャルルの顔を窺う。

今は一夏の馬鹿話により落ち着いてはいるが、満からしたら明らかに怪しいとしか言いようがなかった。

「……馬鹿なこと言ってないで、さっさと走るぞ。遅れるわけにはいかないだろ？」

しかし、満はそれを言及することをしなかった。

今はそつとしておいて、自分で色々と調べてから話を聞けば良いと、若干ながら樂觀的な思考が働いたからだ。

それが彼にとって良いことなのかは分からないが、IS^{二二}学園での生活によって、彼にも変化が現れてきているようだ。

「それとも、俺だけ先に行っても良いのか？」

そのことに、彼はまだ気付いていない。

だが、気付く気付かないは別にどうでも良いことだろう。

少しずつ現れた変化を表にだしながら、彼は横を走る2人に声を掛けた後、悪戯な笑みを浮かべて走るペースを再び上げた。

その背を追うように一夏達が走るペースを上げると、3人はほぼ同時に更衣室へと辿り着く。

「ゴメンね、いきなり迷惑かけちゃって」

「良いって」

「気にする必要はないよ」

武士と化した女子達を振り切り、満達はやっと更衣室へと辿り着くのだが、それなりの距離を走ったためか、シャルルが膝に手を着いて息を整えていた。

そして、少し整い始めた頃に、徐に謝罪の言葉を口にする。どうやら、先ほどの騒ぎは自分に責任があると感じているようだ。

それに対し、満や一夏の反応は淡泊なモノであった。彼等もあんなことは経験しているため、気にしても無駄だと分かっているからだ。

「それより助かったよ。学園に男が2人だけってのは、少ないからな。ちよつと辛かったんだ」

「そうなの？」

「ああ、さっきの騒ぎを経験したんだ。自然と分かるだろう？」

「は、ははは」

ただ、それだけだとシャルルがまだ気にする可能性があるため、一夏が絶妙なタイミングで違う話題へと逸らす。そういった空気を読む力は、随分とあるようだ。

そんな一夏の思惑　かどつかは分からないが　通り、シャルルがその話題にノってくる。

ただ、未だによく分からないといった様子だったので、満がフオロ―を入れておいた。

すると、少しばかり苦笑いを浮かべながら、乾いた笑い声をシャルルがあげる。どうやら、十二分に理解出来たらしい。

「これからよろしくな。俺は織斑　一夏。一夏って呼んでくれ」

「六久　満だ。好きに呼んでくれて構わない」

「うん。よろしく、一夏、満。僕のことシャルルでいいよ」

「分かった、シャルル」

「了解。シャルルと呼ばせてもらうつよ」

それにより、場の空気が完全に変わったのを見計らって、一夏は自己紹介を始める。本当に、そういった空気を読むことには長けているようだ。

そんな一夏を皮きりに、満やシャルルも自己紹介を済ましておく。満が初めから名前を呼べているところを見ると、シャルルのコミニケーション能力はなかなか高いようだ。

「うわっ、時間ヤバいな！　すぐに着替えちまおうぜ！」

「わあっ！？」

そうこうしている内に時間はかなり経っていたらしく、一夏が備え付けの時計を見た瞬間に叫び、慌てて服を脱いで上半身が裸になる。

それに続くように、満も服を脱いだ。

ところが、シャルルはいきなり驚いたような声をあげると、手で顔を隠して一夏達に背を向けるだけであった。

「早く着替えないと遅れるぞ。うちの担任はそりゃあ時間につるさい人で」

「う、うんっ？　き、着替えるよ？　でも、その、あっち向いてて……ね？」

「??　いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……」

「……………」

その様子を見て、一夏は何も思わなかったのか、ただシャルルに早く着替えるよう促すだけであった。明らかにおかしい反応だったのにも関わらずだ。

その代わり　　と言つては難だが　満は横目で再びシャルルを観察している。今現在の世界においての一夏や自分の価値は知っているつもりなので、この時点で2つほど仮説を立てておいた。無論、それは自身の中でだけであり、まだ誰にも言うつもりはないが。

「何でもいいけど、急げよ」

満が色々と考えている最中も、2人は話していたようだが、それも一旦の区切りを見せる。

因みに、満は考えながらも体を動かしていたので、ちゃっかり着替えは終わらせていた。

それに気付かず、一夏は再びシャルルへと話しかける。

「な、何かな!？」

だが、そのシャルルは既に着替えが終わりかけていて、一夏がそちらを向いた瞬間には、上半身の方のスーツの裾を整えているところだった。

「うわ、着替えるの超早いな。何かコツでもあんのか？」

「い、いや、別に……。は、ははは」

「……………」

それを見て、心底驚いた風にシャルルに尋ねる一夏。

シャルルは何でもないように答えていたが、明らかに動揺しているのが分かる。

満自身もちょうど視線を外していたため、着替えている様子は見えていなかったのだが、様子がおかしいので気付かれないように再び

視線を送っていた。

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなア。引っかけた？」

「ひ、引っかけた？」

2人はそんな満の様子に気付かないで、再び話し出す。

既に着替えていないのは一夏だけだというのに、口だけを動かして手を動かしていないところを見て、満は内心で溜め息を吐いた。更に、それだけならまだしも、馬鹿なことまでのたまう始末だ。シャルルがそれを聞いて顔を真っ赤にしている。

それは、満が立てた2つの仮説が信憑性を帯びてきたことに繋がるのだが、今はそのことを考察している時間はないため、満は声をかけることにした。

「馬鹿なこと言っていないで、さっさと着替えろ。着替えてないのは、もうお前だけだ」

“ゴン”という音が聞こえるくらい、少し強めに一夏の頭を叩いて満は彼の口を止める。

それに対し、一夏は抗議の視線を満に送るのだが、着替え終わっている彼の姿を見て、顔に焦りの色を浮かばせた。

「時間がないんだぞ。それとも、俺とシャルルだけで先に行つていようか？」

それは、図らずもシャルルを助ける形となるのだが、そんな事は関係ない。

「それはないぜ！？　ちょっと待っててくれよ！」

「待っているから急げ」

慌てる一夏に、満はニヤリと嫌な笑みを見せながら、彼を急かす。そんな様子を見てクスクスと笑うシャルル。

そして、一夏が着替え終わると、3人は急いでグラウンドへと向かうのだった。

「遅い！」

その後、かなり急いで第2グラウンドへと向かったのだが、時すでに遅し。

そこには、織斑教諭（鬼）が腕を組んで待っていた。

「くだらんことを考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

雰囲気からして制裁の1つは覚悟していたのだが、どうやら一夏がまた馬鹿なことを考えていたようで、矛先は彼にだけ向いていた。

「もし遅れたらアレより酷いことになるから、気を付けるよ？」

「そ、そうだね。絶対に遅れないよう気を付けるよ」

その様子を見ながら、満はシャルルにそう耳打ちすると、そそくさと列へと並ぶ。

それに付き従うように、シャルルも少し引きつった笑みを見せながら列に並んだ。

「おおー、むつくー。随分と遅かったねー」

そんな満に声をかける人物。

ご存知、1組のマスコット？、のほほんさん こと布仏本音だ。

相変わらずのポワポワした口調と笑顔で、隣に並び立った満に話しかけてくる。

彼女とは、一夏の代表決定祝賀会の中からそれなりに話すようになったのだが、それは満にとって新鮮な驚きの連続であった。

こういった手合いとの交流が今までなかったのもあるが、どこか抜けているようで、偶にしっかりと芯を捉えた発言や行動をする彼女に、満はこれまでに何度も驚かされている。

「他のクラスの女子に追いかけられていたんだ」

それはそうと、話しかけられたのなら無視をするワケにもいかなないので、満は遅くなった理由を端的に話した。

他に一夏が理由でもあったのだが、それはあえて言わないでおい

た。

「やっぱりー。男の子の転校生が来たんだもんねー」

それを聞いたのはほんさんは、変わらないのほんとした口調で言葉返す。

どんな時でもブレることのない彼女に、満は心に言いようのない暖かさを感じた。

「それより、あまり話すのは止めておこう。でないと、ああなる」

「わー、そうだねー。あれは受けたくないよー」

しかし、それにいつまでも浸って、話を続けるワケにもいかないで、満は会話を止めようと提案する。

丁度その時、彼等の前の方でセシリアと鈴が織斑教諭から出席簿を喰らっていたので、それを引き合いに出した。

のほほんさんは相変わらずの口調ではあったが、声の端々に嫌そうな雰囲気を感じ取れ、そのままそれに賛同し、会話はそこで終了を見せる。

「では、本日から実習を開始する」

「はい！」

蒼天の下、セシリアと鈴に出席簿を喰らわせた織斑教諭だったが、その後はまるで何事もなかったかのように授業を開始した。

今回は1組と2組の合同なので、人数は単純計算でいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っている。

「まずは戦闘を実演してもらおう。 鳳^{ファン}！ オルコット！」

「はい！」

「専用機持ちならすぐにはじめられるだろう。前に出ろ」

基礎からではなく、いきなり戦闘の実演ときた。授業を受けている生徒のほとんどが、操縦時間のあまり取れていないのに、これはどうだろうか。確かに、見ることも大切な訓練だが、明らかに専用機持ちが優遇されているように感じる。

だが、これは仕方がないと何も言わない。今この場では織斑教諭が絶対の権力者であるから。

「めんどいなー。何で私が……」

「ハア、何かこういうのは見せ物のようで、気が進みませんわね」

呼ばれた2人は渋々といった感じで、やる気なく前に出る。いくら専用機が特別だといっても、メリットばかりではないようだ。

「お前ら少しはやる気を出せ。 アイツに良いところを見せられるぞ？」

そんなやる気を見せない2人に、織斑教諭はボソツと何かを呟く。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まア、実力の違いを見せる良い機会よね！ 専用機持ちの！」

それを耳にした瞬間、2人は先ほどとは打って変わってやる気を見せ始めた。

小さく呟いただけだったので、ほとんどの生徒は織斑教諭が何を言ったのか気付かなかったが、満は違っていた。

「（一夏をダシに使うとは……。大切にしているのか、そうでないのか分からないな）」

彼は一応、読唇術も修めている。

そのため、織斑教諭が何を言ったのかを知ることができ、内心で苦笑いを浮かべていた。

「それで、お相手は？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は」

そんな彼の心情は織斑教諭には気付かれなかった。

と、言うより、気付かれていたら、彼に出席簿が降っていただろう。

それはともかく

閑話休題、周りを置いてきぼりにして、前に出た2人はドンドンとヒートアップしていくのだが、織斑教諭がそれに釘を刺した。

「（む？ 何か嫌な予感が……）」

それから、2人が闘う相手の名前を言おうとするのだが、それより先に満は何かを感じ取り、視線を上に向ける。

すると、空気を裂くような音を立てながら、何かが墜ちて来ているのが目に入った。

それはまだ距離があり、彼の視力があるからこそ気付けたのだが、あのスピードだとこちらに突進してくるのも時間の問題だ。

「一夏！ こっちへ来い！」

「え？」

案の定、すぐに他の生徒達も気付くくらいの距離に、その飛行物体は墜ちて来ている。

その落下地点を瞬時に計算すると、一夏が居る辺りだと分かったため、満は慌てて彼へと叫んだ。

しかし、一夏はまだ気付いていないのか、間抜けな声をあげるだけ。

「戯け！ 呆けていないで早く動け！」

「ああああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

「うわああああーっ！」

それに焦った満は、一夏へと怒鳴りながらも近付こうと、周りに居た女子達を掻き分け進もうとする。

その頃になると、飛行物体からの声も聞こえるようになっていたため、ようやく一夏もそれに気付いた。

が、いきなりのことだったためか彼はその場を動くことが出来ないでいる。

「くっ！？」

結果、一夏はその飛行物体の突進を受け止める形となり、凄まじい音をあげながら砂塵を巻き上げた。

そこから巻き起こる衝撃をモロに受けた満は顔をしかめるも、腕を前に出して顔を隠しながら、吹き飛ばされずにしっかりと地面に立っている。

「一夏！……って」

砂塵がおさまり、視界があげると満は一夏へと駆け寄ろうとしたのだが、途中で歩みを止めて何とも言えない表情を浮かべた。

「あ、あのう、織斑くん……」

何故なら、そこには山田教諭を押し倒したかのような体勢で、そのたわわに実った母性の塊を揉みしだいている一夏が居たから。

さっきのような状況で、よくもまあそんな体勢になれたなど、満は内心で呆れ果てる。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑君は仮にも教師と生徒ですね！……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはとても魅力的な」

普通なら、すぐにでも離れなければならないのに、未だに山田教諭の母性の塊を揉みしだいている一夏。

そんな彼に対し、頬を薄く染めながら山田教諭は妄想を繰り広げている。

「ハッ！？」

少しの間、そのような状況が続いていたのだが、一夏が何かを感じ取ったらしく、急にその場（山田教諭の乳）から離れた。

すると、次の瞬間、先程まで一夏の頭があつた位置に、2つの光が通り過ぎる。

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

その光の出どころは、セシリア・オルコットであつた。

今現在の彼女は、笑っているのに笑っていないという、器用な様相を呈している。

「うゝ あ!？」

そんな彼女に苦笑いを浮かべていると、次は何かが組み合わせる音が聞こえてきたので、一夏はそちらに視線を向け、顔を青くした。

「一夏アアアアアア!!」

何故ならば、鈴が手に持つ 双天牙月 を組み合わせ、自身に振りかぶっていたからだ。

「……………」

そして、投げられる生身の人間に対して巨大すぎる武器。

いつものようなら、素直になれない娘達の理不尽な嫉妬だと言えるのだが、今回は一夏の自業自得である。

そのため、満は何故か合掌をしなければならぬと思い、一夏に向けて手を合わせた。

「はっ！」

しかし、次の瞬間、2発の銃声が辺りに響き渡ると、今まさに一夏の命を刈り取るうとしていた 双天牙月 は彼に届くことなく地面に突き刺さる。

「（ほう……）」

その出来事に周りがついて行けていない中、満は一夏を救った射手に視線を送り、内心で感嘆の声を漏らした。

その視線の先に居るのは山田教諭。

いつもの小動物的な雰囲気は形を潜め、しっかりと両手で銃器をマウントしている。

しかも、うつ伏せに倒れたまま上体だけを僅かに起こしている様子を見ると、あの体勢で先程の射撃を敢行したに違いない。

「織斑君、怪我はありませんか？」

「は、はい。有難うございます」

そのような状態であれだけの精密射撃を行うことはとても難しく、なまじそれを理解出来ているため、周りは啞然としていた。

そんな中でも、穏やかに一夏へと怪我はないかを尋ねる山田教諭に、彼はその表情を驚愕に染めながら小さく返す。

「山田先生は元代表候補だ。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

未だに生徒達が啞然としている中、織斑教諭はそれぐらい当たり

前だと言わんばかりに話を進める。

それに続くように、彼女に評価された形となった山田教諭は、パツといつもの雰囲気に戻ってそれを謙遜した。

「（やはり、それなりじゃないと、IS学園（こんな場所）の教師なんて勤まらないよな……）」

その状況を見て、満はそんなことを考える。

言葉が悪いが、常日頃から生徒にナメられているように見える山田教諭だが、そんな人間がIS学園（兵器を扱う場所）に勤められるはずがない。少なくとも、それ相応のスキルが必要なはずである。その点において、山田教諭は先程の技量を見れば申し分ない。表の、それもあまり戦闘に関わることが少ない平和な場所から考えたら、十二分である。

「さて小娘ども。さつさとはじめるぞ」

満がそんなことを考えていると、織斑教諭が先程のことから未だに抜けきれていない専用機持ち2人に話しかけた。

「え？ あの、2対1で……？」

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

それにより、やっと意識をこちらに戻した2人は、彼女の言葉に初めは戸惑いを見せるも、次に言われた言葉により、不快感を露わにする。負ける という言葉が、癪に障ったのだろう。

「では、はじめ！」

それを意にも介さず、織斑教諭は頭上に掲げた手を振り下ろし、模擬戦の開始を宣言した。

その号令と同時に、セシリアと鈴の専用機2人は飛翔して行き、その後に続くように山田教諭も空中へと躍り出る。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

そして、一定の高さまで上昇すると、対面する形でお互いに言葉を掛け合った。

その時の山田教諭は、言葉こそいつものようであったが、目つきは鋭く冷静なものになっている。

こうして、生徒対教師の模擬戦が始まるのだった。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

先制攻撃をしたのはセシリア・鈴組であつたが、それは簡単に回避された。

そんな空中での戦闘を見ながら、織斑教諭はシャルルにISの解説をするよう促す。

戦闘を見ることも訓練の内なのに、それを妨げるようなことをしても良いのかというツツコミはしてはいけない。

「山田戦闘の使用されているISはデュノア社製 ラファール・リヴァイブ です。第二世代開発最後の機体ですが」

「ねーねー、むっくー。あれはさすがにりんりん達が勝つよねー？」

「む？」

促されるままにシャルルがすっかりとした声で説明を始めるのだが、その最中に満に話し掛けてくる声があつた。
のほほんさんである。

「きちんと聞いておかないと、お咎めがくるぞ？」

「うーん、それは怖いけど、知ってることだからねー。それより、りんりん達のが気になるのだよー」

「それは分かったが、なぜ俺に聞く？」

「てひひ、むつくーは物知りだからねー」

今は授業中なため、織斑教諭からのお咎めがくるかもしれないので、満は軽く注意をするのだが、のほほんさんには暖簾に腕押しだった。

理由を聞いてみると、自分が頼りにされているということが分かり、彼は内心で頭を抱える。

「……分かった。じゃあ今の戦闘の解説をするよ」

「おおー！」

「あれは十中八九、山田教諭の勝ちだ」

「えー、何でー？ りんりん達は専用機だし、2対1なんだよー？」

「その 2対1 というところがミソなんだ」

少しの間だけ葛藤するも、実戦訓練なのだから、そういったことも大切だという答えに辿り着き、満は空中で繰り広げられている戦闘の解説を始めた。

それにより、のほほんさんはテンションが上がったのか、満面の笑顔を浮かべて手を前で合わせ、その意外と大きい母性の塊が少し強調される。

「それはどういうことー？」

「戦闘の入り方から見て、セシリアと鈴は連携を取らず、個々の力

で押し切ろうとしているのが分かる。何故なら、鈴の機体は近接戦闘も出来るのに、いきなり衝撃砲を使って中距離から遠距離の戦い方をしてるからな。セシリアも、それに構わずいきなりビットを使っているし」

「なるほど」

だが、悲しきかな。満はその年代からすると少し枯れていると言えるほど、そういったことに興味を示さないので、それに構わず解説を続けた。

すると、彼の言うとおり、空中ではセシリアと鈴が山田教諭に翻弄され始めたので、それを見てのほほんさんは感嘆の声をあげる。彼の近くに居る女子達も、その解説が耳に入っていたのか、驚嘆の声をあげていたので、それほどまでに山田教諭は普段と違っていたのだろう。

「それに、2人はナメてかかっている節が見受けられたからな。故に、ああなる」

その様子に苦笑いを浮かべると、満は更に解説を続けた。

その直後に、空中では互いの位置を確認していなかったセシリアと鈴がぶつかり合い、完全に体勢を崩していた。

それが目に入ると、彼は内心で呆れ混じりの溜め息を吐く。

「そういった隙を突けば、いくら機体性能に差があろうと、2対1でも勝つことは出来る。まア、それなりに経験の差がないと無理だねどな」

「凄いねー！ むっくーの言ったとおりになったやー！」

そんな2人に、山田教諭は容赦なくグレネードを撃ち込んでいた。完全に体勢を崩していたので、鈴はそれに対応することが出来ず、セシリアも集中力を乱しているのでビットで迎撃することも出来ない。

そのため、モロにその攻撃を喰らうハメとなり、2人は仲良く撃墜される。

その様子を見て、のほほんさんは目をキラキラとさせて満を見ていた。

「さて、これで諸君にもIS学園こいの教員の実力が理解出来ただろう。以後、敬意を持って接するように」

撃墜された2人がいがみ合い、周りからの代表候補生の株ひしひしがギョングюнと下がっている中、それを無視して織斑教諭がこの模擬戦の締め言葉括る。

その言葉は、普段の山田教諭を思っているもののようにも聞こえ、満は内心でそんな彼女に微笑んでいた。

「ああ、それと、六久。解説ご苦労だったな。だが、今は授業中で、折角デュノアが説明をしていたのに、それを聞いていないのはいただけないが」

しかし、それも束の間、模擬戦が締めくくられてすぐに、織斑教諭は鋭い視線で満を睨み付ける。

「私の授業では勝手は許さん。六久と解説に耳を傾けていた奴等は、罰として、この授業が終わったら使用したIS全ての片付けを命ずる。いいな？」

「……分かりました」

それから、ニヤリとした笑みを浮かべ、彼等に罰を与えんと言ってきた。

今回は理不尽ではなく、確かに満が授業の妨げと言えるような行為をしたのは事実なので、彼は苦笑いを浮かべながら黙ってそれに従う。

のほほんさんや周りに居た女子達が、少しばかり申し訳なさそうな雰囲気になっていたが、彼はやんわりと気にしないように言っただけで、理由の大半は自分にあるから、罰の片付けは自分一人でやると言った。

初めはそれだと申し訳なさすぎると殆どの女子が聞き入れなかったのだが、満は女の子に力仕事をさせるワケにはいかない。これは一夏譲りの言葉なのだが、と、断固として譲らなかった。最終的には女子達が折れる形となった。

「話は纏まったな？ では、次はグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること。では分かれる」

その様子を見て、話がついたと判断した織斑教諭は、手を叩いて生徒の意識を切り替えさせ、次の授業内容へとシフトしようと声を出す。

その言葉を聞いた瞬間、案の定、一夏やシャルルへと人が集まった。

その状況を見かねたのか、或いは自らの浅慮に嫌気が差したのか、どちらにせよ、それにより織斑教諭の機嫌が悪くなり、彼女の鶴の一声によって漸くそれが収まったのは、いつものことだろう。

その後は、一夏のグループが何か色々やっていたが、つつがなく授業は進み、時間内にきちんと予定されていた全ての行程を終えることが出来た。

因みに、その後の片付けは、これも鍛錬になると満が張り切り、

有言通り1人で昼休みが始まる前に終わらせ、色々と驚かれたことをここに追記しておく。

「……………」

昼休み、満は屋上へと来ていた。理由は一夏から誘われたからなのだが、最初はまだ学園生活に慣れていないだろうシャルルのためだと聞いていた。

しかし、ついて来てみると、いつもの3人娘は居るし、その内の筈は何か不機嫌だしと、色々と言いたいことがあったのだが、今はそれも落ち着いて皆で昼食を食べている。

筈が不機嫌なのは、おおかた一夏が何か約束をしたのだが、それが自分の思っていたのと違った結果になっていたからだろう。

「…………ハア」

それはともかく
閑話休題、昼食を食べているのなら、いつもは合間に軽く会話な

どをして盛り上がっているのだが、今回はそれが無い。
それどころか、満は溜め息を吐いて一夏をジト目で睨んでいるほどだ。

「あ、あーん……」

普段の彼からしたらそんなことはしないのだろうが、何事にも理由はある。

その理由は、今、目の前で繰り広げられている光景にあった。

「い、いいものだ……」

「だろ？ うまいよな、この唐揚げ」

「唐揚げではないが……うむ。いいものだ」

その光景とは、一夏の食事シーンだ。
今は筈が朝に作ったという弁当を食べている。それだけなら、特にこれといったことはなかったのだろう。
しかし、その おかず を自分が使っている箸で彼女に食べさせているのだから、話が変わってくる。

「一夏あー!!」

「一夏さん!!」

「（未だに自分の境遇を理解出来ていないのか？ だとしたら、朴念仁どころじゃないぞ）」

その砂糖のように甘い、ピンク色の空気を醸し出す2人を見て、

セシリアと鈴が一夏へと食ってかかっていた。

その様子をジト目のまま見つめ、満は一夏に対して内心で呆れ果てる。

「満、どうかしたの？」

「む？ ああ、今この場に俺は居て良いのかなと考えていた」

「は、ははは……」

そんな彼に、あの場に混ざっていなかったシャルルが、一夏に視線を向けているのを不信に思ったのか、声をかけてきた。

満はそれを聞き、シャルルへと視線を向けて真顔で答える。

すると、シャルルは何と返せば良いか分からなかったのか、苦笑いを浮かべた。

「ああ、そう言えば、実戦訓練の時はすまなかった」

「へ？ 何のこと？」

「いや、折角シャルルが機体の解説をしてくれているのに、それを無視するような形になっていたからな」

「ああ、そのことが。大丈夫だよ。僕は気にしていないしね。それに、後から聞いたんだけど、物凄く良い解説だったらしいじゃないか」

「あー、知識だけの、頭でっかちの戯れ言だよ」

そんなシャルルを見て、何とか場違い感を紛らわした満は、フと

午前中の実戦訓練のことを思い出し、その場で謝罪の意を示す。

それを聞いたシャルルは、初めは何のことか分からず困惑するも、どういうことか理解すると、その人懐っこい笑みで気にするなど答えを返した。

満のそういった部分や、シャルルの心の広さは美德として捉えられても良いだろう。

「知識だけでも、凄いことだよ。どこでそれだけのモノを覚えたの？」

「ふむ。環境が良かったと言っておこう」

笑みはそのままに、シャルルは少し踏み込んだことを聞いてくるのだが、そこはあまり触れてほしくないところなので、満ははぐらかした。

しかし、余りにも自然に言葉を紡いだため、シャルルは不信に思っていない。

「さて、そろそろ助け舟を出さないとヤバそうだ」

「え？」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべていた満だったが、一夏の方へと視線を向けると、それを苦笑いへと変えてそう呟く。

その呟きを聞いたシャルルは、何のことか分からず、彼の視線を追うと、そこには3人娘に詰め寄られてるからか、若干表情が青ざめている一夏が居た。

「うわぁ……」

「戯け、そんないっぺんに食えるワケないだろう？」

何とも言えない状況に、シャルルは思わず声をあげて少し退くのだが、満はツカツカとその中に入って行き、詰め寄る3人娘を一夏から引つ剥がし、呆れ混じりにそう言い放つ。

「そ、そういやさ、実戦訓練の山田先生、凄かったよな」

「「ぐっ！」」

それを機に、何とか話題を逸らそうと一夏が苦し紛れの言葉を發した。

明らかに無理矢理すぎるのだが、余り触れてほしくなかったのか、セシリアと鈴の2人は苦い顔をする。

「あれは油断していただけですわ！……などと言っても、ただの言い訳にしかありませんわね」

「そうよね。悔しかったのは確かだし、放課後は特訓しないと」

「そう言えば、一夏さんは近頃メキメキと力を着けてきていらっしやるわね」

「満が何か入れ知恵してるみたいだけど……」

「（おいおい……）」

明らかにおかしいにもかかわらず、2人はその話題に乗った上、何故か満まで巻き込まれそうな形で話が進んでいった。

「と、言うわけで、満。放課後、空けときなさいよ?」

「わたくし達の訓練、手伝ってくださいますわよね?」

「……ハア。分かったよ」

予想通り、2人して顔を見合わせていたセシリアと鈴は、息ぴったりに満に詰め寄ると、有無をいわさない様子で彼の言質を取ろうとする。

そんな状況を作り出した一夏を、満は初めの内はジト目で睨んでいたのだが、少しだけ間をあげると、溜め息を吐いてそれを了承した。

「ただし、時間制限はあるがな」

「え? 何でよ?」

「そう言えば、六久さんは放課後は織斑先生のカウンセリングをしてらしたわね」

だが、彼はただでは転ばない。

時間に限りがあると言つて、少し回りくどい形で織斑教諭のカウンセリングの話題へとすり替える。

鈴は分からなかったようだが、セシリアがそれを読み取ってくれたようで、不自然にならない形で話がそちらへとシフトしてくれた。

「ああ、そついやそつだったな。まさか千冬姉にそんなのが必要だったとは……」

「あー、良く言われるが、ああいう人ほど何かと溜め込んでいるモ

「なんだよ」

すると、話題に挙がった織斑教諭の実の弟である一夏が真っ先に食いついてくるのだが、それが周りから良く言われることだったので、満は苦笑いを浮かべる。

「やっぱり、教師ってストレス溜まりそうだなア。千冬姉でも例外にはならなかったのか」

「そう思ふのなら、なるべく問題を起こさないよう気を付けるんだな」

「理由が俺にピンポイント!? てかまた問題児扱いされんの!？」

「では、問題児ではないと言えるのか？」

「「「ああ」」」

「……声を揃えられるほど納得出来るんだ」

そんな彼に気付かず、一夏は更に言葉を続けるのだが、それを耳にして、満は内心でニヤリと悪巧みを思い付いたような笑みを浮かべた。

初めは、一夏への忠告じみたことだけで済ますつもりだったが、先ほど巻き込まれたことの仕返しも兼ねて、彼を弄ることにしたのだ。

それから始まった一夏弄りに、彼は盛大なツツコミを見せるのだが、満の切り返しにより3人娘が声を揃えて同意したかのように唸る。

それを見て、シャルルは頬をひきつらせながら、小さく言葉をこ

ぼした。

「お前は未だに自分の境遇を理解出来ていないだろう？　それが織斑教諭のストレスになってるんだよ」

「何だよソレ。俺だって分かってるつもりだぞ？　IS学園（こんな場所）で数少ない男なんだし」

「いや、分かっている。今のお前は、言葉1つでも大変なことになるかねないんだぞ？　だが、どうせ何も考えずに相手に何か言ったり、約束したりしてるんじゃないのか？」

「ぐっ！」

「「「うんうん」「」」

ある程度の時間が経つと、満足した満は思考を切り替え、話を一夏への忠告へとシフトする。

それに納得いかなかった一夏が初めの内は反論してきたのだが、満の切り返しに心当たりがあるのか、言葉を詰まらせた。

満が内心でやはりな、と思っていると、彼の言葉に賛同するかのようになり3人娘が頷いている。

それを見て、一夏が更にへこんでいた。

「常に考えて言葉を選べとまでは言わない。ただ、自分の言ったことには、少なからず責任が伴うことを、お前は自覚しなければならぬ。今はまだ大丈夫だが、いらぬ火消しのために織斑教諭に迷惑をかけたくないだろう？」

「……おう」

「まア、これは 男 に言えることだから、俺も余り偉そうには出来ないのだから」

完全にへこんでしまった一夏を見て、満はこれ以上は酷かと判断し、その話を締めくくることにする。

一夏に同意を求めるような問いかけをしてから、今までの話の全てが自身にも当てはまるとし、とりあえずは話を終息させた。

「千冬姉のこと、頼むな？」

「別に俺に頼まなくても、あの人は大丈夫なことはお前が一番知っているだろう？ それに、俺は好きでやってるんだ、だから気にするな」

その後、一夏が何やら真剣な表情で織斑教諭のことを頼んできたので、満は苦笑いを浮かべながら少し遠まわしに受け入れる意を示した。

それと同時に、昼休み終了の予鈴が鳴り響く。

一悶着あったが、こうしてその日の昼休みは終わっていくのだった。

放課後、シャルルは寮の手続き、一夏は今まで覚えた知識の最終確認のために、山田教諭と抜き打ちの小テストとそれぞれ思い思いの行動をしていた。

「そこです！」

「甘いっ！」

そんな中、満は昼休みの約束通り、セシリアと鈴の特訓に付き合っていた。

因みに、箒 最近、流石にこの歳で ちゃん 付けは止めてくれと満は言われた は訓練機が貸し出されなかったからと、一夏について行っていた。

その時にまた一悶着あったのは、言うまでもないだろう。
それはともかく

閑話休題、レーザーと衝撃砲の空を飛び交う。その一発一発の狙いは精密だ。互いに弱所を見極め、次々に撃ち込んでいく。

回避行動を取りながらの射撃でこの的中率はなかなかだ、と彼は思った。

さすが腐つても代表候補生、実戦訓練の時にギュンギュンと下がっていた株も^{ひょうか}上昇に修正される。

と、改めて彼の内での彼女達の評価が変わっていつてると、不意に彼の方に流れ弾が飛んで来た。

間近で観戦するためにアリーナ内へ入ったのが災いしたが、戦闘になると周りが見えなくなるようなので、彼は軽々とそれを避けながら、やはり2人ともチーム戦は苦手なのだと再認識する。

「もらった！」

「させませんわっ！」

双天牙月での薙ぎ払いを三次元躍動旋回で回避。体勢を崩しながらも主力のスターライトmk?で狙い撃つ。

セシリアのその動きは、クラス代表決定戦では見られなかったモノだ。

あれから、一夏の訓練に付き合ってもらっていたが、それにより彼女も成長しているということだろう。

「ククッ……」

誰かが成長しているのを目の当たりにして喜ぶ。

それは普通なら良いことなのだろうが、理由が理由だけに満は複雑な思いだった。

つくづく、血生臭かったり、硝煙の臭いに縁があるのだなど、彼は自嘲する。

「なに笑ってんのよ？」

「いや、何でもないよ」

そんな彼をジト目で見ながら、戦闘が終わりISを解除した鈴が問い掛けてきた。

それに対し、満は何事もなかったかのように表情を消すと、それを苦笑いに変えて首を横に振る。

「きちんと見てらしたの？」

「ああ、それは大丈夫だ。一部始終きちんと見ていたよ」

自嘲していたことには気付かれていないが、笑っていたことは事実なので、それを不信に思ったセシリアが問いただしてくるも、満はそれを上手くかわした。

「スポーツドリンクだけど、いるか？」

「もらっわ。結構動いて汗かいたしね」

「いただきますわ。ありがとうございます」

「わかった」

2本のペットボトルをタオルとともに投げると、2人は危なげなくキャッチする。

運動したあとの水分補給は大事である。発汗によって失われた養分を摂取するにはスポーツドリンクが適しているのだ。

「ぶは……それで？ あんたが言った通り試合してみたけどさ。あれでなにがわかったのよ？」

「ふう……鈴さんの言う通りですわ。あれではいつもの実戦訓練と同じですよ？」

「俺が2人の力をきちんと把握できてなかったんだ。今試合してもらったのは、2人の実力を測らせてもらうためだよ。俺の物差しだから、正確ではないだろうけどな」

それを一頻り飲んだ後、タオルで汗を拭きながら鈴が再び問い掛けてくる。

セシリアもその言葉に賛同した後、自身の考えを混ぜて問いただしてきた。

それを聞いた満は、腕を組みながら先ほどの試合の意味を説明する。

「実力ねえ。あたしたちは代表候補生なんだから、今更そんなの測る必要ないと思うんだけど？」

「そう言っな。それに、代表候補生だからって必ず勝てる保証はないだろう？」

すると、その説明に疑問を持ったのか、鈴が訝しげに言葉を口にした。

それに対し、午前中の実戦訓練の時のことや、それが理由で今の特訓に付き合っていることが満の頭に浮かぶのだが、それは口にして無難な言葉を返しておいた。

六久 満は空気を読める男です。

「どれだけ強くても、無敵 な奴なんてそう居ない。それにいくら代表候補生でも、お前達は俺と同じ年、つまり高校生だ。突然のイレギュラーを対処し切れないかもしれないだろ？ その可能性を少しでも減らすために日々、操縦訓練や実戦訓練をしてる。それはつまり、毎日成長しているってことだ。だから、一定間隔で力を測るのは大事なんだよ。まア、知識だけの頭でっかちの言葉だと一蹴してくれても構わんがな」

未だに納得いかないといった表情をしている2人に、満は内心で苦笑いを浮かべながら説明を続ける。

だが、2人にとって彼はISに 乗れるだけ の男であることを理解しているつもりなので、あえて皮肉気な言葉を付け加えてだ。

「とりあえず、俺の中で2人の評価をつけてみた。俺を選んで話してくけど、それでいいか？」

「別に方法なんてどうでもいいわよ。一夏以外のISに乗れる男の意見っていうのは、それだけで新鮮だしね」

「わたくしも構いません。六久さんの意見は大変参考になりますので、文句なんてありませんわ」

その皮肉に対し、2人は何も言ってこなかったので、満はそのまま話を進めようと彼女達に問い掛ける。

それを耳にした2人は、素直にそれに従ってきた。

普段は これほど素直であるのは、彼女達の美点であろう。

一夏が絡むと一気に壊れるが。

「まずは……セシリアからいくか」

「よろしくお願いいたします」

「一夏の訓練の時から思っていたが、お前の狙撃及び射撃の腕はかなり高い。それに、クラス代表決定戦の時と比べて回避能力も高くなっていた。先の戦闘中にIS装甲に傷がついてなかったのがその証拠だ。だが、以前のお前ではそんな立ち回りはできなかったはず。一夏との特訓で自分のウィークポイントを発見した、といったところか？」

「仰る通りです。わたくしのブルー・ティアーズでは一夏さんの白

式を相手に近距離戦闘を演じることは不可能ですわ。ですから、接近を許さない戦闘方法を取ることにしましたの」

「ああ、別に相手の土俵で戦う必要はないからな。近距離戦が苦手なら、得意な遠距離戦に持ち込めばいい。その判断は賢明だ」

2人が従ってきたことにより、準備は出来たと判断した満は、まずはセシリアへの助言から始める。

一切の不純物を無くし、ただ自分が見ていて思ったことを口にするので、まずは褒めるような形となり、セシリアも気分上々といった様子で彼の問い掛けに答えていた。

「次は……セシリアの弱み。つまりは不得手な部分についてだ」

「それに関してはわたくしが一番理解していますわ。近距離戦が苦手ということでしょう?」

だが、褒めるところしかなかったワケではないので、次は弱点について言及しようとするのだが、その前にセシリアが自分で自身の弱点だと思っているところを口にする。

「いや、それ自体は弱点じゃないぞ」

「へ?」

「どういうこと? セシリアが近距離戦闘に弱いのは事実じゃない」

しかし、彼女の言ったことは満にとっては正解ではなかった。

その間違いを正すために、満は助言をしようとするのだが、セシリアが間抜けな声をあげた後に、鈴木も疑問に思ったのか話に参

加してくる。

「それはブルー・ティアーズの弱点であって、セシリアの弱点じゃない。それにさっき言っただろ？ セシリアの回避能力は徐々に高くなってきている。いずれは弱点にもならなくなるさ」

「……」

やはり、2人とも勘違いをしていたかと思いながら、満はそれを正そうと自らの考えを口にする。

そう、彼女達の言ったことは機体の弱点であり、彼女の弱点ではないのだ。

そして、弱点はどの機体にもある。身近な良い例は、白式だ。

武装は近接用の雪片式型しか存在していない。遠距離戦は向いてないどころか不可能。

それでも一夏が白式で戦えているのは、その弱点を一夏がカバーしようと立ち回っているからだ。セシリアもいずれはそれができるようになるだろう。

「では、わたくしの不得手な部分というのは一体？」

「ああ、弱点と言えるかどうかは微妙なんだが……ブルー・ティアーズを使うタイミングと、後は使い方だな」

「タイ……ミング？」

「セシリアがビットを向かわせるタイミングは決まってるんだ。とある条件下で、お前は必ずと言っていいほどブルー・ティアーズを展開させている」

「そ、そうなんですの!？」

その勘違いを正したところで、満はやつと弱点について言及する。ビットの制御中に攻撃を受けない距離まで離れた時、相手の動きが止まった時、自分が追い詰められた時……大体こんな感じの時に、セシリアはビットを展開させていた。

先に挙げた二つはいいが、自分が追い詰められた時に制御の難しいブルー・ティアーズを使うのは悪手としか言いようがない。

それをセシリアに告げ始めると、彼女は驚愕の声をあげていた。

「……知りませんでしたわ」

「あたしも気付かなかった。アンタ、洞察力もすごいのね」

「そりやどうも」

一通り指摘し終わると、セシリアは自分でも気付いていなかった事実を聞かされたためか呆然と呟き、鈴も満の洞察力を賞賛している。

それを受け、満は内心で自嘲しながら、素っ気なく礼を返していた。

「（恐らく、戦闘だけなら世界中の誰よりも見慣れているはずだからな……）」

鈴は自分の言ったことを 嫌み だと満が受け取ったと思ったのか、何も言っただけでなかったが、普段の彼からしたらそれは少しおかしい。

しかし、その理由は少し考えれば出てくるようなことだった。彼は過去を思い出してしまっていたのだ。

「まア、セシリアの弱点はすぐに改善出来る。要は使うタイミングを相手に悟られないようにするのと、後はさっき言った通り 使い方 だな」

「それはどういふことですか？」

「あー、話すとき長くなるのでな。一応、時間制限もあるし、先に鈴の評価を済ましてからでも良いか？」

「……分かりましたわ」

過去を振り払うかのように、満はセシリアへの助言を続ける。

それに大きな期待を寄せてセシリアは問いただしてくるのだが、自分で考えることも大事だと思った満は、先に鈴への助言を済ますことにした。

それをセシリアも汲み取ってくれたのか、素直に満に従って、ブツブツと自分で弱点の改善案を考え始める。

「じゃあ、次は鈴だな」

「……ホント、アンタって何者？ 代表候補生であるあたし達でさえ気付かなかったことに気付くし、やけに的確な指摘をしてくるし」

「あー、前から言ってるだろう？ ただの知識だけの、頭でっかちだって。さっき言ったことだって、セシリアにとっては良いかもしれないが、自分では出来ない事だからな」

そんなセシリアを一瞥して、満は鈴の方へと向かい合うのだが、先ほどの指摘を聞いていた鈴が若干の警戒心を見せながら問いただ

してきた。

それを聞いた満は、苦笑いを浮かべながらいつものような答えを返す。

そう、彼が言ったことは彼が持ち合わせている洞察力と知識からきたモノであり、彼自身がそのような立ち回りが出来るワケではないのだ。

言うなれば、教科書のようなモノ。

本を読むだけで強くなれるのなら、誰だってそうしていると、彼は常々言っている。

これは、知識だけを持っていても、それを実行出来なければ意味が無いと暗に言っているのだ。

「……まア、今はそんなことどうでも良いか。覚悟は出来てるわ、どんなことでも言ってみなさい」

それを鈴も知っているので、彼女はあえて何も言わずに話を逸らす。

「じゃあ遠慮なく。甲龍の燃費の良さと安定性を鈴自身が良く理解してるな。双天牙月による連撃は光るモノがある。それに、衝撃砲の命中率も悪くない……特に目立った弱点はないと言える」

「あれ？ベタ褒めだ。なーんだ、構えて損し」

「ただし……、今のところ特にこれといった長所も無いとも言えるな」

話が逸れたが、セシリアの時と同じように満は鈴への助言を始めた。

彼女自身、自信過剰というか、自分に弱点はないと思っているの

か、構えてと言っではいるがそれほど緊張していない。

だが、もし本当にそうなら彼女はもう既に完成されていて、これ以上の大きな進歩はないと言える。

勿論、そんなことはないの、満は鈴自身も気付いていない 弱点 を指摘するために、彼女の言葉に被せて言及を始めた。

「それに近距離で……いや、相手の間合いで衝撃砲を撃つのは控えた方が良い」

「なんでよ。不可視な上に弾速も速いじゃん。どこで放とうが相手には関係ないじゃない」

「相手には、な。問題はそこじゃない。お前が衝撃砲を展開して、空間を圧縮させる時に発生する処理時間が問題なんだ。要するに、タイムラグだな」

「タイムラグ？」

そう、鈴もセシリアと一緒に、自身の機体が持つ特殊兵装の使い方に難があるのだ。

それを指摘すると、納得がいかなかったのか鈴が噛みついてくるのだが、それを諭すように満は説明を続ける。

肩アーマー展開から砲撃までの時間のズレ。その隙が甲龍と鈴の弱点になりえるのだ。

「今の相手はセシリアだったからあまり目立たなかったが、相手が近接戦闘を得意とするIS操縦者ならその隙はかなり目立つ。鈴も気付いていただろ？ クラス対抗戦の時に、一夏がその瞬間を狙って衝撃砲を回避していたことを」

「ああ」

それを理解させるために、満は具体例を出しての説明に切り替えた。

説明の途中で噛みつかれていては、たまったものではないからだ。その例に納得出来る部分があったのか、鈴は声をあげながら頷いている。

「確かに衝撃砲は使い勝手が良くて威力も高い。だが、だからと言って頼り切るのはダメだ。衝撃砲はあくまで中・遠距離用の武装と考えた方がいい。じゃないと」

「ピンチの時、 龍砲 を無意識のうちに使っちゃうってこと？」

「ご名答。もし、俺がそれなりにISを扱えるのなら、そこを確実に突いていく」

それに内心でホツとすると、満は更に言葉を続けた。

その頃になると、鈴はもう反論することもなくなっていたので、彼は彼女にも考えさせるような形で、問い掛けを織り交ぜた説明に切り替える。

「鈴はせっかく近距離戦闘も出来るのに、それを衝撃砲で潰すのは勿体無い。だから、さっき言ったように衝撃砲は中・遠距離で使って、近距離は双天牙月で攻める。そうすれば、長所も出てくるだろう。欲を言えば、衝撃砲は中距離だけにして、遠距離用に何か他の装備があれば、相手は3択を迫られて、なお良いんだがな。まア、さっきも言った通り、これは頭でっかちの戯れ言だ。青竜刀を使うか、衝撃砲を使うかは鈴次第だからな」

「うん、分かったわ」

完全に鈴が聞き入っているのを確認すると、満は自身の言えることは全て口にしていた。

その全てが鈴にとって納得出来るモノだったようで、彼女はすんなりと受け入れている。

「あら、鈴さん。もう終わりましたの？」

「ええ、終わったわ。満の奴、やっぱり色んな意味で規格外だわね」

「わたくしわ、一夏さんの勉強会に参加させていただいたことがあります、その時もとても分かりやすい教え方でしたわ」

鈴への助言が終わると同時に、思考の海に潜っていたセシリアが意識をこちらに戻し、鈴と話し出した。

その内容は満を化け物扱いするようなモノであったが、あながち間違っただけはなかったりする。

「あー、そろそろ時間だからな。俺はもう行くぞ？　これから俺が言ったことを実践してみるのも良いし、一度部屋に戻って煮詰めてみるのも良い。それらはお前達の自由だ」

その後、セシリアへの改善案を2、3伝えたと、満は時間だと言っただけでアリーナを出る準備を始めた。

そして、踵を翻してアリーナの出口へと向かう途中、2人にそう言い残して彼はその場を去る。

こうして、その日は1日が終わっていくのだった。

翌朝。その日の朝は、特にこれといったことはなく、平和な時間が過ぎていつていた。

だから、その日は何事もなく、1日が平和に過ぎていくだろうと、満は思っていた。

だが、そんな思いとは裏腹に、彼の所属する教室はざわついている。

「え、えーっと……。きよ、今日も嬉しいお知らせがあります。また1人、クラスにお友達が増えました」

何故なら、昨日シャルルが転入してきたばかりなのに、その日も転校生が現れたからだ。

どうせなら、同じ日にちにすれば良かったのにも思うが、手続きなどの関係なのだろう。

転校生を紹介しようとしている山田教諭にも、若干の戸惑いが見える。

それよりも、ここは高校なのに、小学生を相手にしているような物言いだったのだが、そこに誰もツツコミを入れなかった。

「（あの纏う空気は……）」

それはともかく

閑話休題、転校生ということはまたどこかの代表候補ということである。

満も最初はそれを考え、このクラスに集中させても良いのかと思っていたが、件の転校生を見てそれを中断させた。

その転校生は見るからに女の子。

シャルルのように 男 だと言われない限り、クラスの女子達もざわつくことはなかっただろう。

ISは基本的に女性しか扱えないので、学園は女子校のようになっているので、それ自体は普通であるし、満も軽く流すだけで済んでいたはずだ。

しかし、現実とは違って、女子達はざわついているし、満も何か考え込んでいる。

「ドイツから来た、 ラウラ・ボーデヴィツヒさん です」

何故なら、その転校生が、黒い眼帯をした如何にも 軍人 といった空気を纏った人物だったからだ。

山田教諭が紹介した後も、クラスの女子達はヒソヒソと話し合っている。

そんな中で、銀髪の黒い眼帯をした少女は、自身に向けられている数多の視線をモノともせず、その場に佇んでいるのだった。

ハイ、こんなに長いのに、終わり方が何やら中途半端でしたが、今回はここまでです。

セシリアと鈴に強化フラグが立ちましたが、魔改造とまでいくつもりはないので、悪しからずご了承下さい。

後、この辺りで主人公の簡易プロフィールと言いますが、どのように 六久 満 というキャラクターが出来上がったのか、説明させていただきます。

名前：六久^{ムク} 満^{ミツル}

これは作中にあるとおり、新しく貰った名前です。彼は本当の名前は全く覚えていません。

身長：178cm

これは、千冬より少し高いという設定でこのくらいにしました。確か、一夏が170位だったので、それとトントンか少しだけ高い彼女より大きいとなると、それくらいかなと思ひまして。

因みに、キャラの大まかな部分は、拙作を書き始める前に行ったカラオケで友人が歌っていた、UVERworldの colors of the heart という曲を聞いて、思い付きました。それで、その曲の歌詞のような人生を歩むキャラを作ろうとしたのですが、エミヤのようになってしまったと（苦笑）

それほどまでに、奈須さん及び型月さんの作品は、自分に影響しているのだと思います。

長すぎる後書きで申し訳ありませんでしたm(_____)m

ここまで読んで下さった方が居られたら、本当に有難うございます。

では、未だに忙しい日々が続いているため、次はいつになるかわかりませんが、次話にてお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4599t/>

IS インフィニット・ストラトス -無限の可能性を持つカ-

2011年10月30日07時04分発行